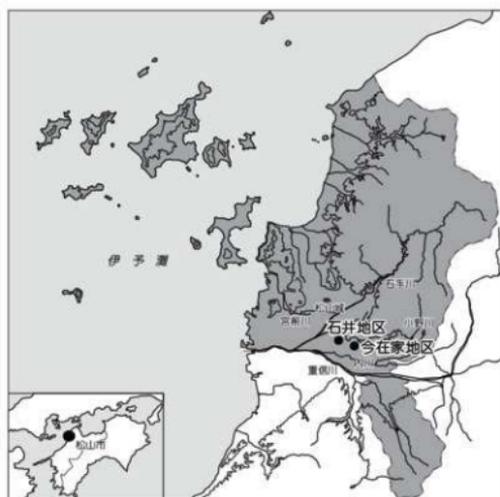


# 石井・浮穴の遺跡Ⅱ

2013

松山市教育委員会  
公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団  
埋蔵文化財センター

いしい うけな  
石井・浮穴の遺跡Ⅱ



2013

松山市教育委員会  
公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団  
埋蔵文化財センター

## 序 言

本書は、松山市南部の石井・浮穴地区において、昭和163年度から平成21年度にかけて実施した7遺跡についての埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

本遺跡の所在する石井・浮穴地区は、小野川と重信川に挟まれた平地部に位置し、これまでの発掘調査によって弥生時代から中世にわたる継続的な人々の営みが明らかとなっています。

今回報告する西石井荒神堂遺跡2次調査、同3次調査、西石井遺跡4次調査、東石井遺跡2次調査、同3次調査、繁成分遺跡、今在家遺跡2次調査からは、主に弥生時代から中世までの集落に関連した遺構や遺物を得ることができました。特に、西石井荒神堂遺跡、西石井遺跡及び東石井遺跡から発見された竪穴建物や掘立柱建物・溝・土坑などは、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落構造やその変遷を理解し、当時の景観を復元する上で貴重な資料となるものです。

このような成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財の保護思想の啓発や調査研究等の一助となれば幸いです。

平成25年3月

松山市教育長  
山本 昭 弘

## 例 言

1. 本書は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、昭和63年～平成21年度に松山市西石井、東石井、今在家で実施した7遺跡についての埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書掲載の遺構は、呼称名を略号で記述した。  
堅穴建物：SB/溝：SD/土坑：SK/柱穴：SP/性格不明遺構：SX/  
自然流路：SR
3. 本書表示の標高数値は海拔標高を示し、方位は真北である。
4. 本書掲載の遺構図や実測図は、縮分値をスケールに記した。
5. 本書掲載の遺構図作成や遺物実測は、各遺跡の担当調査員の指示のもと、猪野美喜子、金子育代、木下奈緒美、佐伯利枝、仙波千秋、田崎真理、多知川富美子、築山知子、中村紫、丹生谷道代、村上真由美が行った。
6. 本書掲載の遺構図や実測図のトレースや版下作成は、各遺跡の担当調査員の指示のもと猪野、木下が行った。
7. 本書掲載の遺物観察表の凡例は、第2章末に掲載している。
8. 調査での遺構写真の撮影は担当調査員と大西朋子が行い、遺物の撮影・写真図版の作成は大西が行った。
9. 写真図版データは以下の通りである。
  - (1) 遺構の主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補正している。一部の撮影には高所作業車を使用した。
  - (2) 遺物は、4×5判の白黒フィルムで撮影している。
  - (3) 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。
  - (4) 製版 写真図版 175線 印刷 オフセット印刷  
用紙 ニューVマット 76.5kg
10. 本書の執筆と編集は、担当調査員の作成した資料を基に河野史知が主体で行い、浄書及び編集は猪野、木下の協力を得た。
11. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
12. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

# 目 次

第1章 はじめに	vi		
1. 調査に至る経緯	2. 編集・刊行組織		
第2章 立地・環境	vii		
1. 立地	2. 環境		
第3章 西石井荒神堂遺跡2次調査	1		
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第4章 西石井荒神堂遺跡3次調査	13		
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第5章 西石井遺跡4次調査	19		
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第6章 東石井遺跡2次調査	29		
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第7章 東石井遺跡3次調査	37		
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第8章 繁成分遺跡	45		
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第9章 今在家遺跡2次調査	51		
1. 調査の経緯	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第10章 まとめ	56		

## 挿図目次

### 第2章 立地・環境

第1図	周辺の遺跡分布図	viii
-----	----------	------

### 第3章 西石井荒神堂遺跡2次調査

第2図	調査地位位置図	2
第3図	北壁土層図	
第4図	遺構配置図	3
第5図	SB1 測量図	
第6図	SB1 出土遺物実測図	4
第7図	SB2測量図	
第8図	SB3 測量図	
第9図	SB4 測量図・出土遺物実測図	5
第10図	SB5 測量図・出土遺物実測図	
第11図	掘立1 測量図	6
第12図	掘立2 測量図	7
第13図	掘立3 測量図	
第14図	掘立4 測量図	8
第15図	掘立5 測量図	
第16図	SK1 測量図	9
第17図	SK1 出土遺物実測図 (1)	
第18図	SK1 出土遺物実測図 (2)	10
第19図	SD1 測量図・出土遺物実測図	11

### 第4章 西石井荒神堂遺跡3次調査

第20図	調査地位位置図	14
第21図	北壁・東壁土層図	
第22図	遺構配置図	15
第23図	SD1 測量図	
第24図	SD1 出土遺物実測図	16
第25図	SX1測量図・出土遺物実測図	17

### 第5章 西石井遺跡4次調査

第26図	調査地位位置図	20
第27図	土層図	
第28図	遺構配置図	21
第29図	SB101 測量図	
第30図	SB101 出土遺物実測図	22
第31図	SB102測量図・出土遺物実測図	23
第32図	SB103 測量図・出土遺物実測図	
第33図	SB201 測量図	24
第34図	SB201 出土遺物実測図	
第35図	SD101 測量図	25
第36図	SX101 測量図	

第37図	SX101 出土遺物実測図	25
第38図	SX201 測量図	
第39図	SB202 測量図	26
第40図	SB202 出土遺物実測図	
第41図	中世出土遺物実測図	27

### 第6章 東石井遺跡2次調査

第42図	調査地位位置図	30
第43図	東壁・西壁土層図	31
第44図	遺構配置図	32
第45図	SD1 測量図	33
第46図	SD1 出土遺物実測図	
第47図	SD3 測量図	34
第48図	SD8 出土遺物実測図	
第49図	SD2 測量図	
第50図	SD2 出土遺物実測図	35
第51図	SD4・5 出土遺物実測図	

### 第7章 東石井遺跡3次調査

第52図	調査地位位置図	38
第53図	I区(南壁)・II区・III区土層図	
第54図	I・II・III区遺構配置図	39
第55図	SK101 測量図	
第56図	SK101 出土遺物実測図	40
第57図	SD101出土遺物実測図	41
第58図	SD103 出土遺物実測図	
第59図	SP305 測量図・出土遺物実測図	42
第60図	SP310 測量図	
第61図	SP310 出土遺物実測図	43

### 第8章 繁成分遺跡

第62図	調査地位位置図	46
第63図	東壁土層図	
第64図	遺構配置図	47
第65図	土器溜測量図	
第66図	土器溜出土遺物実測図	48
第67図	集石1 測量図・出土遺物実測図	
第68図	集石2 測量図・出土遺物実測図	49
第69図	グリッド出土遺物実測図	

### 第9章 今在家遺跡2次調査

第70図	調査地位位置図	52
第71図	遺構配置図・南壁土層図	53
第72図	第6・8層出土遺物実測図	54
第73図	治水地形分類図	

## 表目次

### 第1章 はじめに

表1 調査地一覧	vi
----------	----

### 第3章 西石井荒神堂遺跡2次調査

表2 SB1出土遺物観察表(土製品)	12
表3 SB4出土遺物観察表(土製品)	
表4 SB5出土遺物観察表(土製品)	
表5 SK1出土遺物観察表(土製品)	
表6 SK1出土遺物観察表(鉄製品)	
表7 SD1出土遺物観察表(土製品)	

### 第4章 西石井荒神堂遺跡3次調査

表8 SD1出土遺物観察表(土製品)	18
表9 SX1出土遺物観察表(土製品)	

### 第5章 西石井遺跡4次調査

表10 SB101出土遺物観察表(土製品)	28
表11 SB102出土遺物観察表(土製品)	
表12 SB103出土遺物観察表(土製品)	
表13 SB201出土遺物観察表(土製品)	
表14 SX101出土遺物観察表(土製品)	
表15 SB202出土遺物観察表(土製品)	
表16 中世出土遺物観察表(土製品)	

### 第6章 東石井遺跡2次調査

表17 SD1出土遺物観察表(土製品)	36
---------------------	----

表18 SD1出土遺物観察表(石製品)	36
表19 SD2出土遺物観察表(土製品)	
表20 SD8出土遺物観察表(土製品)	
表21 SD4・5出土遺物観察表(土製品)	

### 第7章 東石井遺跡3次調査

表22 SK101出土遺物観察表(土製品)	44
表23 SD101出土遺物観察表(土製品)	
表24 SD101出土遺物観察表(石製品)	
表25 SD103出土遺物観察表(土製品)	
表26 SP305出土遺物観察表(石製品)	
表27 SP310出土遺物観察表(土製品)	
表28 SP310出土遺物観察表(石製品)	

### 第8章 築成分遺跡

表29 SK1出土遺物観察表(土製品)	50
表30 集石1出土遺物観察表(石製品)	
表31 集石2出土遺物観察表(石製品)	
表32 グリッド出土遺物観察表(土製品)	
表33 グリッド出土遺物観察表(石製品)	

### 第9章 今在家遺跡2次調査

表34 第6・8層出土遺物観察表(土製品)	55
-----------------------	----

## 写真図版目次

### 第3章 西石井荒神堂遺跡2次調査

図版1	1. SB1 カマド完掘状況 2. SB3 完掘状況 3. SK1 遺物出土状況 4. SK1 完掘状況 5. 遺構完掘状況
-----	--

図版2	1. SK1 出土遺物
-----	-------------

### 第4章 西石井荒神堂遺跡3次調査

図版3	1.・2. SD1 中層遺物出土状況 3. SD1 下層遺物出土状況 4. SX1 遺物出土状況 5. 遺構完掘状況
-----	--

図版4	1. SD1 完掘状況 2. SD1 出土遺物
-----	-------------------------

### 第5章 西石井遺跡4次調査

図版5	1. I・II区遺構検出状況 2. SB201 遺物出土状況 3. SB101 完掘状況 4. SB201 完掘状況 5. I・II区遺構完掘状況
-----	--

図版6	1. 出土遺物(SB101・10B・301・302・SX101・中世)
-----	-------------------------------------

### 第6章 東石井遺跡2次調査

図版7	1. T1 完掘状況 2. T2 完掘状況 3. SD1 完掘状況 4. SD1 完掘状況 5. 遺構完掘状況
-----	---

図版8	1. 遺構完掘状況 2. SD1 出土遺物
-----	-----------------------

### 第7章 東石井遺跡3次調査

図版9	1. II区遺構完掘状況 2. III区東壁土層 3. I区SK101 遺物出土状況 4. I区SK101 完掘状況 5. I区遺構完掘状況
-----	---

図版10	1. 出土遺物(SK101・SD101・SD103・SP310)
------	----------------------------------

### 第8章 築成分遺跡

図版11	1. 集石1出土状況 2. 集石2出土状況 4.・5. 土器溜出土状況 6. SD1 完掘状況 7. SD3・4 完掘状況 8. 遺構完掘状況
------	---

図版12	1. 出土遺物(土器溜・集石1・集石2・グリッド)
------	---------------------------

### 第9章 今在家遺跡2次調査

図版13	1. 遺構検出状況 2. 砂礫検出状況 3. 遺物出土状況 4. 南壁土層 5. 西側完掘状況
------	---

図版14	1. 完掘状況 2. 第6層出土遺物
------	--------------------

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

昭和63年度から平成21年度の間に、松山市西石井、東石井、今在家の7ヶ所について、埋蔵文化財の確認願が開発関係者より松山市教育委員会に提出された。確認願が申請された西石井町240番1・240番4、西石井一丁目79番1の一部、西石井二丁目251番1は松山市が指定する〔No.119 西石井遺物包含地〕、東石井二丁目355番1の一部、東石井五丁目295番外は〔No.118 東山縄文・弥生遺物包含地 東山古墳群〕、今在家町272番1、今在家二丁目48番1外は〔No.125 今在家遺物包含地〕内にあり周知の遺跡として知られており、各申請地周辺では、現在までに数多くの発掘調査が行われ、弥生時代から中世の集落跡を確認している。

発掘調査は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、関係者の協力のもと平成元年～平成21年に実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在(松山市)	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間
西石井荒神堂遺跡2次調査	西石井町240番1・240番4	296.2	平成12年11月15日～平成13年1月12日
西石井荒神堂遺跡3次調査	西石井二丁目251番1	150	平成15年4月14日～同年5月16日
西石井遺跡4次調査	西石井一丁目79番1の一部	135	平成19年5月16日～同年6月15日
東石井遺跡2次調査	東石井二丁目355番1の一部	112.75	平成17年1月5日～同年1月31日
東石井遺跡3次調査	東石井五丁目295番外	90.14	平成18年1月23日～同年2月9日
竊成分遺跡	今在家町272番1	1,157.12	平成元年2月27日～同年5月28日
今在家遺跡2次調査	今在家二丁目48番1外	151.86	平成21年6月1日～同年6月19日

## 第2節 平成24年度報告書編集・刊行組織 (平成25年1月1日時点)

### 〔刊行組織〕

松山市教育委員会

教育長 山本 昭弘(10月2日～)  
教育長 山内 泰(前任、～10月1日)  
事務局 局長 嶋 啓吾  
企画官 渡部 満重  
企画官 前田 昌一  
文化財課 課長 駒澤 正憲  
主幹 篠原 昭二  
主査 楠 寛輝

### 〔編集組織〕

公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

理事長 一色 哲昭  
事務局 局長 松澤 史夫  
次長 近藤 正  
施設利用推進部 部長 玉井 弘幸  
埋蔵文化財センター 所長 田城 武志  
主査 栗田 茂敏  
主任 河野 史知(編集担当)  
大西 朋子(写真担当)

## 第2章 立地・環境

### 第1節 立地

松山平野は、伊予灘と斎灘に挟まれた高縄半島の南西部に位置する。高縄半島中央部には東三方ヶ森、伊之子山、北三方ヶ森、高縄山からなる高縄山系が形成されている。高縄山系は領家変成岩帯に属し、主に中生代に貫入した石英斑岩脈を伴う花崗閃緑岩より構成されている。松山平野は、高縄半島を南北に延びる高縄山地に源を発する石手川と重信川によって形成された沖積平野である。

調査地が所在する石井地区は、平野中央部にあり、石手川の支流である小野川と重信川の支流である内川に挟まれた沖積低地の標高20 mから32 mに立地している。

### 第2節 環境

**先土器～縄文時代** 松山平野内では、先土器時代から縄文時代中期までの遺跡は希薄であるが、石井地区の北側には独立丘陵があり、丘陵上の東山鶯が森古墳群や天山天王ヶ森遺跡からサヌカイト製のナイフ形石器が、それぞれ1点ずつ採取されている。北井門遺跡2次調査からは後期の縄文土器の出土や晩期の竪穴建物や埋甕なども確認されており、周辺に縄文土器を排出する生活集団の存在の可能性が指摘されている。

**弥生時代** 前期は、石井東小学校構内遺跡から土坑や土器棺墓が確認されており、出土した土器は前期前半の良好な資料である。また、南中学校構内遺跡からは、前期後半の土器を伴う溝を検出しており、溝からの出土品は松山平野の前期後半の土器編年における基準となる資料である。北井門遺跡は前期から中期に竪穴建物が作り始められる。中期は資料が希薄ではあるが、西石井遺跡2次調査の中期中葉から中期後半の溝からは未製品の石斧が多数出土し、その周辺の土坑からは分銅形土製品が出土している。また、同遺跡では中期後半の竪穴建物を検出しており、貴重な資料である。後期後半から終末までは、石井東小学校構内遺跡や西石井荒神堂遺跡から竪穴建物が確認されている。また、前述の西石井遺跡2次調査の全域からは、後期前半から終末にかけて多数の竪穴建物や溝・土坑・井戸・土器棺墓など残存状況の良好な遺構を検出し、出土した搬入品の土器などは貴重な資料である。北井門遺跡は後期には鍛冶炉を中心とした竪穴建物群を検出している。北井門遺跡2次調査の自然流路内には土器が廃棄されている。

**古墳時代** 前期は、西石井遺跡1次調査の区画性の高い溝から完形品を含む大量の土器が並べられた状態で出土し、その中には近畿地方や山陽地方・西南四国地方からの搬入品も含まれている。また、同遺跡の竪穴建物からは近畿系土器や外来的要素の強い土器が出土している。北井門遺跡では前期に竪穴建物ができはじめ、中期には顕著に分布し、後期後半まで続く。中期から後期にかけては、西石井遺跡1次調査跡から掘立柱建物や溝・土坑、石井幼稚園遺跡1次調査と同2次調査から、竪穴建物が確認されている。

**古代～中世** 奈良時代の真北を指向する溝が東石井遺跡で確認されている。石井幼稚園遺跡1次調査では、平安時代の溝が検出されており、溝内から大量の土器や須恵器のほか、緑釉陶器や灰釉陶器が出土し、平野内における古代後半の土器編年の基準資料になっている。また、石井幼稚園遺跡2次調査からは古代から中世にかけての掘立柱建物や、中世の土坑、石井遺跡3次調査からは14世紀頃の土坑墓6基や溝・土坑などを検出しており、石井地区に集落や墓域の存在がみられる。



第1図 周辺の遺跡分布図

## 【文献】

- 重松佳久 1992 「石手川水系に於ける旧石器文化」〔桑原地区の遺跡〕(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 梅木謙一 1998 「石井東小学校構内遺跡」〔石井・浮穴の遺跡〕(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 栗田茂敏 1994 「石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡-第2次調査-」(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 森 光晴 1980 「浮穴・西石井荒神堂遺跡・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡」松山市教育委員会  
 宮内慎一編 2005 「東石井遺跡・西石井遺跡-1・2・3次調査-」(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
 三好裕之ほか編 2010 「北井門遺跡-一般国道33号線松山インター整備に伴う埋蔵文化財調査報告書-」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

## 第3章～第9章掲載遺物観察表 -凡例-

法量欄 ( ) : 推定復元値

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金雲母、砂→砂粒、密→精製土。

( ) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4) → 「1～4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、不良。

# 第3章 西石井荒神堂遺跡2次調査

## 第1節 調査の経緯

### 1. 調査に至る経緯

平成12年7月24日、中川典雄氏より松山市西石井町240番地1・240番地4における宅地造成工事に伴い、当該地における埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.119西石井遺物包含地」内にあたる。申請地周辺はこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代から古代の集落関連遺構や遺物が数多く確認され、松山平野の主要な遺跡として知られている。

これらのことから、申請地周辺には弥生時代を中心とした集落の存在が予想されるため、中川氏と文化教育課は協議を重ね、遺跡の有無を確認するために、試掘調査を実施することとなった。試掘調査の結果、申請地では遺構や遺物が検出され、弥生時代から古代の集落関連の遺跡があることを確認した。

この結果を受け、申請者と文化教育課、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者は発掘調査についての協議を行い、西石井町240番地1の一部について本格調査を実施することとなった。調査は、埋文センターが主体となり、弥生時代から古代の集落構造の解明と範囲確認を主目的とし、平成12年11月15日～平成13年1月12日の間に野外調査を実施した。

### 2. 調査の経緯

平成12年11月15日、重機により表土の剥ぎ取りを開始する。11月17日、重機による表土の剥ぎ取り作業を終了し、人力による遺構検出作業を行う。11月22日、4m四方のグリッドを設定する。12月1日、遺構検出状況の写真撮影を行い、遺構の掘り下げを開始する。平成13年1月10日、遺構の掘り下げを終了する。1月11日、遺構完掘写真の撮影を行う。1月12日、出土遺物と発掘機材を搬出し調査を終了する。

### 3. 調査組織（平成12年9月30日時点）

財団法人 松山市生涯学習振興財団

	理事長	中村 時広
事務局	局長	二宮 正昌
	次長	江戸 孝
	次長	森 和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川 隆
	専門監	野本 力
	係長	田城 武志
	主任	栗田 正芳（文化教育課）
		栗田 茂敏（調査担当）
		吉岡 和哉（調査担当）
		大西 朋子（写真担当）

## 第2節 層位 (第3図)

調査地は松山平野南部の小野川左岸の沖積低地上20.5 mに立地し、調査以前は耕作地として利用されていた。

第Ⅰ層：近現代の農耕に伴う耕作土で、灰白色を呈するシルトである。全域に層厚10～15cmの堆積を測る。

第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う床土で、橙色を呈するシルト。北西部と南東部に層厚2～4cmの堆積を測る。

第Ⅲ層：橙色と灰色を呈するシルトの混合層で、北端の一部に層厚2～10cmの堆積を測る。

第Ⅳ層：灰色と暗褐色を呈するシルトの混合層で、北西部を中心に層厚5～10cmの堆積を測る。

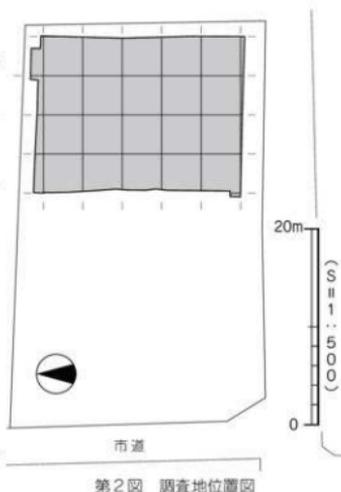
第Ⅴ層：暗灰色を呈するシルトで東側に層厚5～18cmの堆積を測る。

第Ⅵ層：暗黄灰色を呈する土で、暗褐色を呈する土が混じる。本層上面が遺構検出面となる。北西部と南東部に層厚10～25cmの堆積を測る。

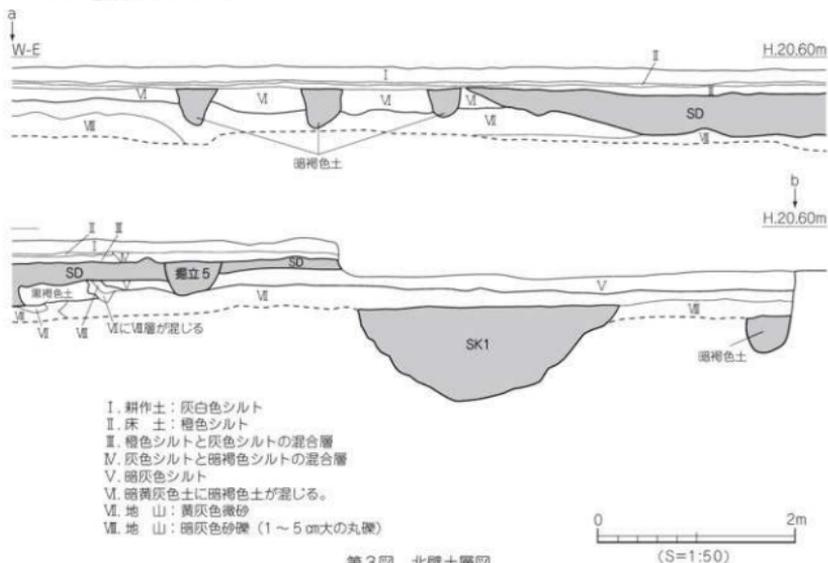
第Ⅶ層：黄灰色を呈する微砂で、北端と南東隅に層厚10～25cmの堆積を測る。

第Ⅷ層：暗灰色を呈する砂礫(1～5cm大の丸礫)で西端に層厚5～25cmを測る。

遺構検出は、第Ⅵ層上面で行った。ただし、調査地の南西部は第Ⅵ、第Ⅶ層の堆積が見られず、第Ⅷ層上面が遺構検出面となる。

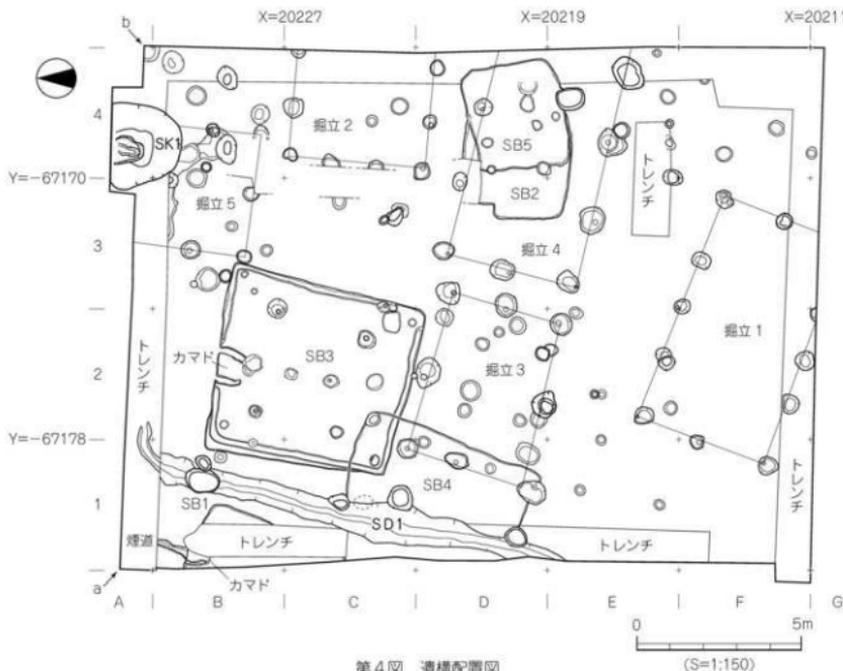


第2図 調査地位置図



第3図 北壁土層図

遺構と遺物



第4図 遺構配置図

### 第3節 遺構と遺物

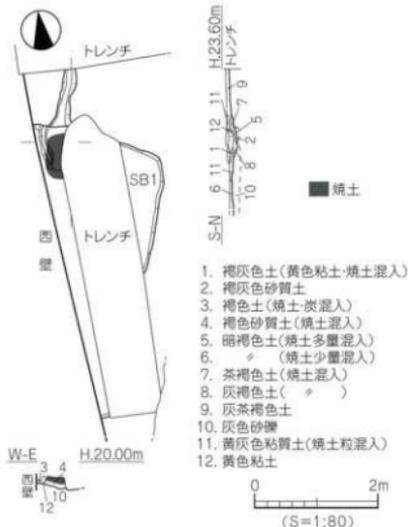
検出した主な遺構は竪穴建物5棟、掘立柱建物5棟、土坑1基、溝1条がある。

#### (1) 古墳時代

##### 1) 竪穴建物

##### SB1 (第5図、図版1)

調査区北西部B～C・1区に位置し、遺構の大半は調査区外や試掘トレンチによって失われ、全容は不明である。平面形態は、方形を呈すると考えられ、規模は東西2.0m、南北4.5m、壁高2～14cm、床面積4.89㎡以上を測る。埋土は褐灰色土～灰褐色土である。建物の北壁において、カマドと煙道を検出した。カマドは作り付けで、幅40cm、長さ70cm、残存高17cmを測る。燃焼部は床面より窪む。カマド内からは土師器、須恵器が出土している。煙道は、北壁から北に延びて試掘トレンチに切ら



第5図 SB1測量図

1. 褐色土(黄色粘土・焼土混入)
2. 褐色土砂質土
3. 褐色土(焼土・炭混入)
4. 褐色土(焼土混入)
5. 褐色土(焼土多量混入)
6. \* (焼土少量混入)
7. 茶褐色土(焼土混入)
8. 灰褐色土(\* )
9. 灰茶褐色土
10. 灰色砂質土
11. 黄灰色粘質土(焼土粒混入)
12. 黄色粘土

れ、長さ1.0m、幅0.30～0.15m、深さ5～12cmを測る。遺物は埋土中より土師器片が出土する。

#### 出土遺物(第6図)

1は土師器の鉢で外反した口縁端部は平らな面をなし僅かに上方が肥厚される。

時期:出土遺物の特徴から、古墳時代後期とする。

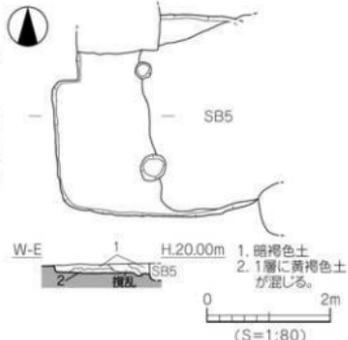


第6図 SB1出土遺物実測図

#### SB2(第7図)

調査区中央部東側D～E・3～4区に位置し、SB5を切って構築される。平面形態は、方形を基調としながらも建物北側の西壁の1/3が内に40cmほど控えた形態となっている。規模は東西1.55m、南北3.32m、壁高10～14cm、床面積9.53㎡以上を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器・土師器が出土しているが、器形のわかるものは殆どない。

時期:時期決定しうる遺物に乏しく、SB5を切ることから、古墳時代でも前期前半以降としか判らない。

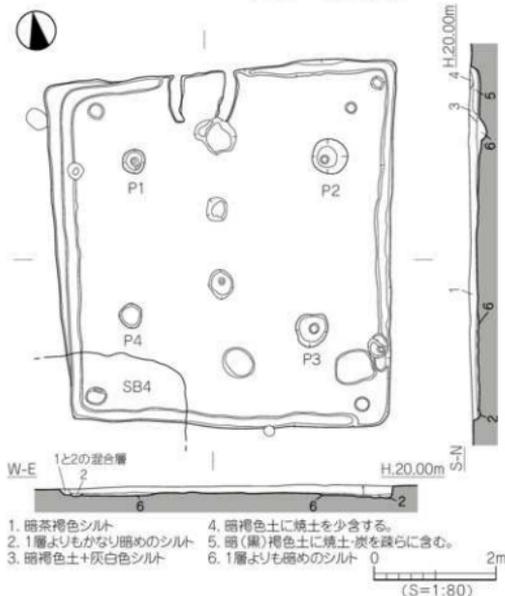


第7図 SB2測量図

#### SB3(第8図、図版1)

調査区北側B～D・1～3区に位置し、SB4に切られる。平面形態は方形を呈し、規模は南北5.86m、東西5.5m、壁高10～20cm、床面積32.03㎡を測る。壁沿いには周壁溝を検出し、周壁溝はカマド部分と南東隅の2箇所途切れ、幅10～15cm、深さ4～6cmを測る。埋土は暗茶褐色シルトである。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、建物内の四隅で小ピット4基を検出したが、この建物に伴うものかは不明である。建物内の北壁中央部において、作り付けカマドを検出し、規模は幅1.1m、長さ0.8m、残存高0.15～0.2mを測る。遺物はカマド内から弥生土器・土師器・須恵器が出土した。

時期:時期決定しうる遺物に乏しく、SB4に切られることから古墳時代後期以前としか判らない。



第8図 SB3測量図

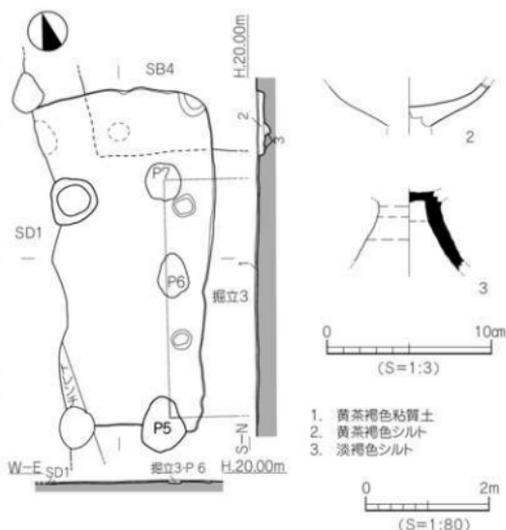
SB4 (第9図)

調査区中央部西側C・D・1～2区に位置し、SB3を切って構築され、SD1に切られる。平面形態は方形を呈し、規模は南北5.46m、東西2.57m、壁高1～4cmを測る。埋土は黄茶褐色粘質土～淡褐色シルトである。カマドや炉址などの内部施設は検出していない。遺物は埋土中より弥生土器片・須恵器が出土した。

出土遺物 (第9図)

2は土師器の高坏の坏部で脚との接合部中央に未貫通の穿孔が残る。3は須恵器の高坏の脚部で、焼成不良のため軟質である。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期とする。



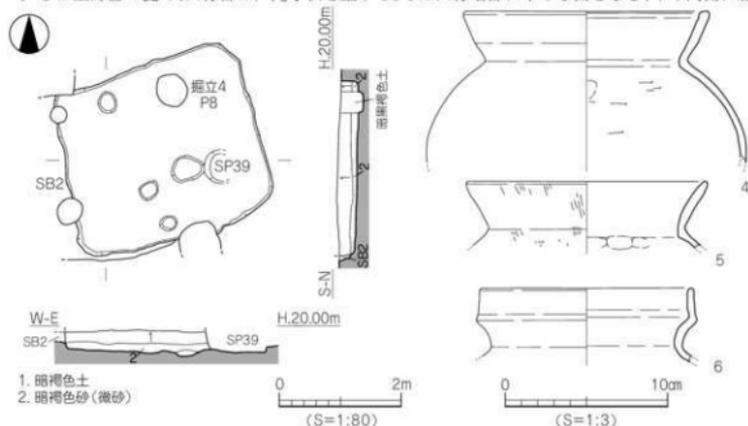
第9図 SB4測量図・出土遺物実測図

SB5 (第10図)

調査区中央部の東側D～E・4区に位置し、SB2に切られる。平面形態は、方形を呈し、規模は、東西3.26m、南北2.92m、壁高28～37cm、床面積9.57㎡を測る。埋土は暗褐色土～暗褐色砂(微砂)である。カマドや炉址などの内部施設は検出していない。遺物は埋土中より弥生土器・土師器が出土した。

出土遺物 (第10図)

4・5は土師器の甕で、口縁部は「く」字状を呈する。4は口縁端部に平らな面をなし、やや内側に肥厚



第10図 SB5測量図・出土遺物実測図

される。5は口縁端部が丸く納まる。6は土師器の二重口縁壺で口縁部が上方に拡張され、端部は丸く納まる。

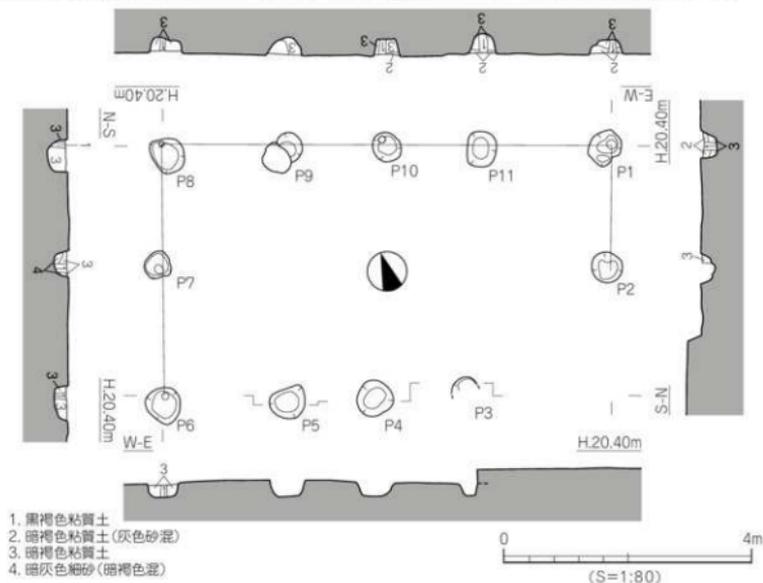
時期：出土した土師器の特徴から古墳時代前期前半とする。

## 2) 掘立柱建物

### 掘立1 (第11図)

調査区南側E～G・1～3区に位置する東西棟で、東西4間、南北2間規模の側柱構造の建物であり、南東隅が調査区外へ延びる。建物方位はN-18°-Eであり、桁行7.27m、梁行4.05m、床面積25.47㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.48～2.11m、梁間1.91～2.14mである。柱穴掘り方埋土は、暗褐色粘質土でP1・6～8・10・11からは直径8～16cmで黒褐色粘質土の柱痕を検出した。遺物は柱穴掘り方埋土内より弥生土器・土師器片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が掘立3と類似することから古墳時代後期以降とする。



第11図 掘立1測量図

### 掘立2 (第12図)

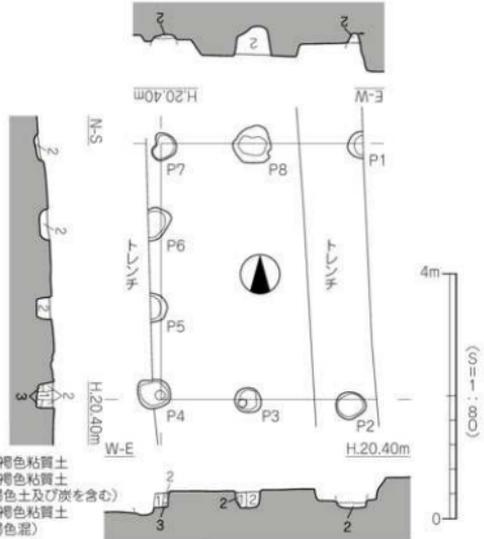
調査区北部の東側B～D・4区に位置する東西棟と考えられ、東西2間以上、南北3間規模の側柱構造の建物であり、東側は調査区外に延び全容は不明である。建物方位はN-2°-Eであり、桁行3.26m、梁行4.2m、床面積13.36㎡を測る。柱穴間隔は、桁間1.46～1.8m、梁間1.3～1.5mである。柱穴掘り方埋土は、暗褐色粘質土で、P3・4からは直径13～14cmで黒褐色粘質土の柱痕を検出した。遺物は柱穴掘り方埋土内より土師器・須恵器片が少量出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が掘立3と類似することから古墳時代後期以降とする。

掘立3 (第13図)

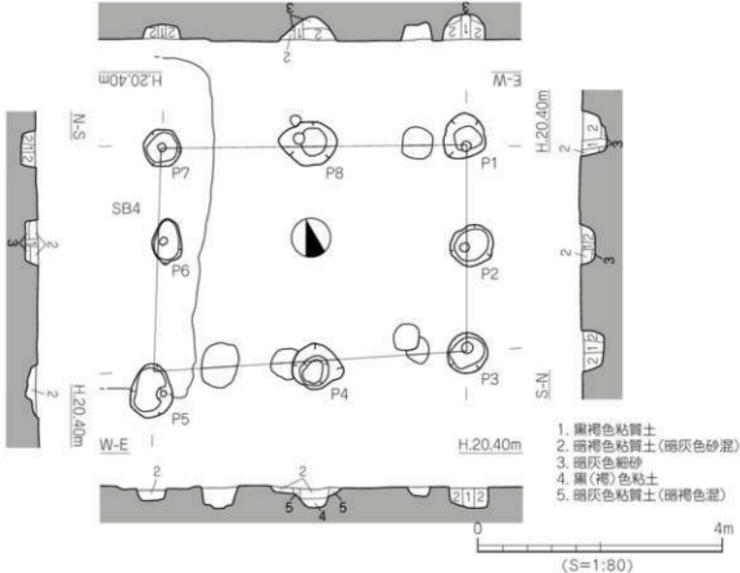
調査区中央部のC～E・1～3区に位置する東西棟で、東西2間、南北2間規模の隅柱構造の建物であり、SB4を切る。建物方位はN-19°-Eであり、桁行5.1m、梁行3.7m、床面積17.92㎡を測る。柱穴間隔は、桁間2.45～2.65m、梁間1.56～2.14mで南北の柱間に比べ東西の柱間が広い。柱穴掘り方埋土は、暗褐色粘質土で、P1～3・P6～8から直径12～18cmで黒褐色粘質土の柱痕を検出した。遺物は柱穴掘り方埋土内より土師器・須恵器片が出土した。

時期: 時期決定しうる遺物が乏しく、SB4に切られることから、古墳時代後期以降とする。



1. 黒褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土  
(褐色土及び灰を含む)
3. 黒褐色粘質土  
(褐色混)

第12図 掘立2測量図

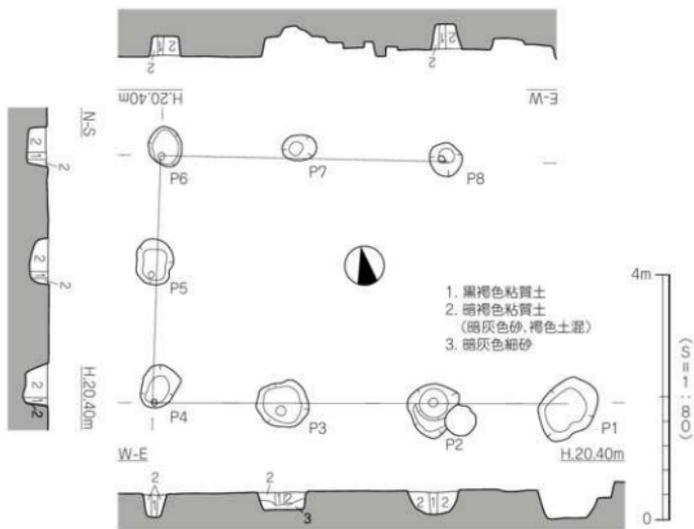


1. 黒褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土 (黒灰色砂混)
3. 黒灰色細砂
4. 黒(褐)色粘土
5. 黒灰色粘質土 (暗褐色混)

第13図 掘立3測量図

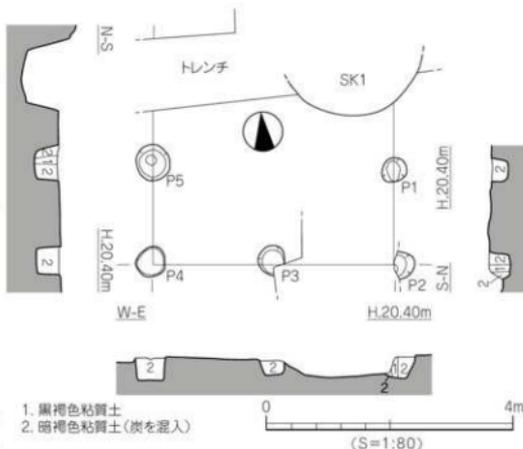
## 掘立4(第14図)

調査区中央部東寄りのD・E・3～4区に位置する東西棟で、東西3間以上、南北2間規模の側柱構造の建物で、東側は、調査区外に延び全容は不明である。建物方位はN-12°-Eであり、桁行6.78m、梁行4.02m、床面積22.95㎡以上を測る。柱穴間隔は、桁間2.1～2.45m、梁間1.72～2.3mで南北の柱間に比



第14図 掘立4測量図

べ東西の柱間が広い。柱穴掘り方埋土は、暗褐色粘質土でP2～P6・P8から直径8～16cmで黒褐色粘質土の柱痕を検出した。遺物は柱穴掘り方埋土内より土師器片が僅かに出土した。時期:時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が掘立3と類似することから、古墳時代後期以降とする。



第15図 掘立5測量図

## 掘立5(第15図)

調査区北部のB・3～4区に位置する南北棟で南北1間以上、東西2間規模の側柱構造の建物であり、SK1との切り合

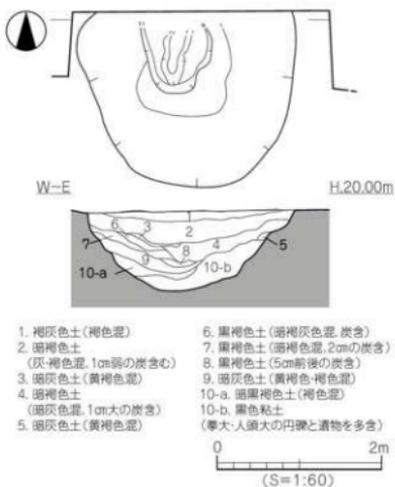
い関係は不明で、北側は調査区外となるため全容は不明である。建物方位はN-5°-Eであり、桁行1.68m、梁行3.92m、床面積6.55㎡以上を測る。柱穴間隔は、桁間1.68m、梁間1.93~1.99mで、柱穴掘り方埋土は、暗褐色粘質土で、P2・5から直径12~14cmで黒褐色粘質土の柱痕を検出した。遺物は柱穴掘り方埋土内より土師器片が僅かに出土した。

時期: 時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が独立3と類似することから、古墳時代後期以降とする。

### 3) 土坑

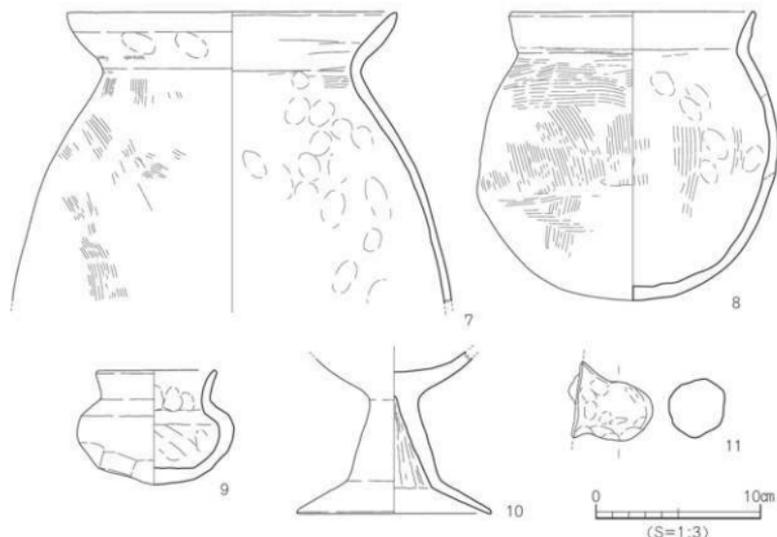
#### SK1 (第16図、図版1)

調査区北東部のA~B・3~4区に位置し、北側は、調査区に延びるため全容は不明であるが、平面形態は円形を呈するものと考えられる。規模は、長径2.67m、短径2.16m、深さ97cmを測る。断面形態はU字状を呈する。埋土は褐灰色土~黒色粘土である。遺物は土師器、須恵器が多量に出土したほか、馬または牛と思われる数点の歯が土坑底から出土している。

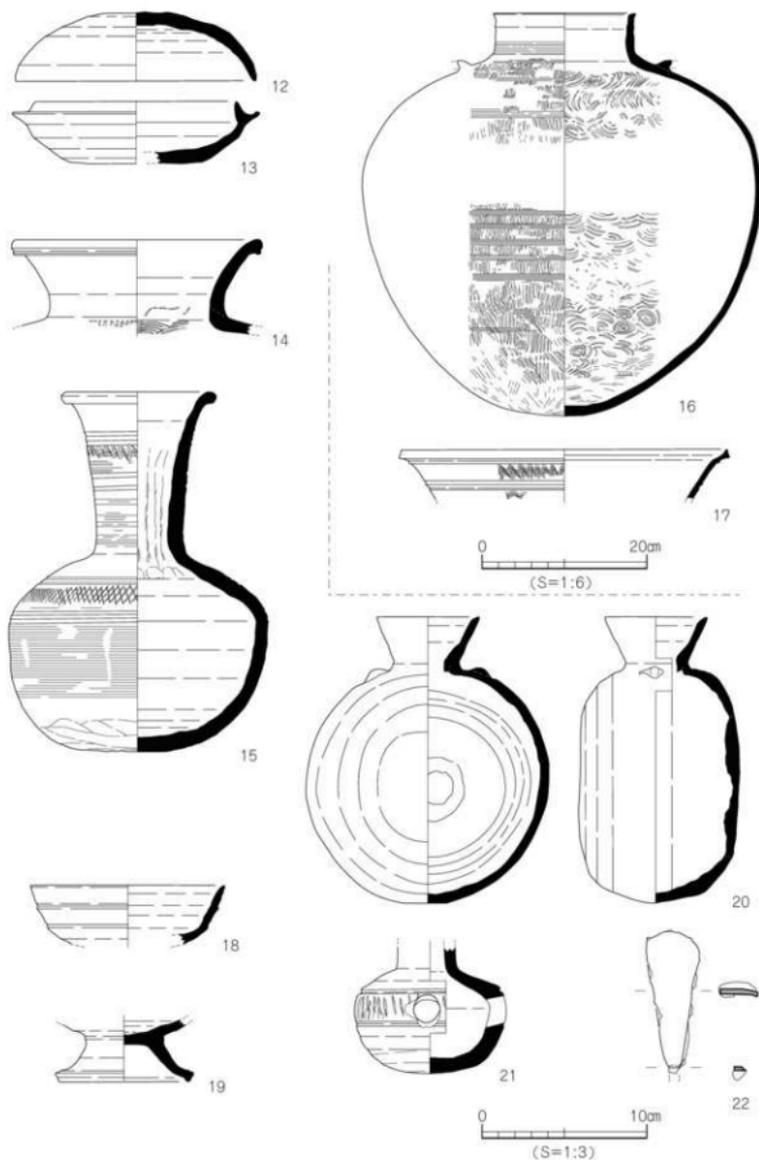


1. 褐灰色土(褐色器)
2. 暗褐色土  
(灰褐色泥, 1cm厚の炭含む)
3. 暗灰色土(黄褐色泥)
4. 暗褐色土  
(暗灰色泥, 1cm大の炭含む)
5. 暗灰色土(黄褐色泥)
6. 黒褐色土(面褐灰色泥, 炭含む)
7. 黒褐色土(面褐色泥, 2cmの炭含む)
8. 黒褐色土(5cm前後の炭含む)
9. 暗灰色土(黄褐色~褐色泥)
- 10-a. 暗褐色土(褐色泥)
- 10-b. 黒色粘土  
(ขนาดใหญ่の円珠と遺物を多含む)

第16図 SK1 測量図



第17図 SK1 出土遺物実測図(1)



第18図 SK1出土遺物実測図(2)

## 出土遺物(第17・18図, 図版2)

7・8は土師器の甕で、7は「く」字状の口縁部をもち、内面に指頭痕が顕著に残る。8は胴部中位やや下に粘土の継ぎ目痕がほぼ全周する。9は土師器の甕で、口縁部が緩やかに外反し端部は丸く納まる。10は土師器の高坏で、脚内部にしほり痕がみられる。11は甕の取手部で、断面形状は球状である。12～21は須恵器である。12は坏蓋で、天井部約1/3に回転ヘラ削りが残る。13は坏身で、受部端に凹みをもつ。14～16は甕で、14は口縁端部に沈線が1条巡り、頸部付近の内面に同心円状のタタキ、外面に格子状のタタキが施される。15は長頸甕で、頸部に沈線や波状文、肩部に沈線文や斜格子文が施され、全体の色調は茶褐色を帯びる。16は球状の胴部に口縁部は直立し、端部に平らな面をなし肩部に把手状の突起をもつ。17は甕で外反する口縁部の外面に波状文や沈線文が施される。18・19は高坏であり、18は外反する口縁部に稜をもつ。19は脚部で内端面が接地する。20は提瓶で、球状の胴部外面は回転ヘラ削り調整が施され肩部に半円状の突起をもち、焼成はあまく軟質である。21は甗で、上胴部に沈線2条とその間に刺突文や円孔が施される。22は鉄鍔で、鍔身部や茎部の断面は長方形状を呈する。残存する長さ8.75cm、最大幅3.25cmを測る。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期末～古代とする。

## 4) 溝

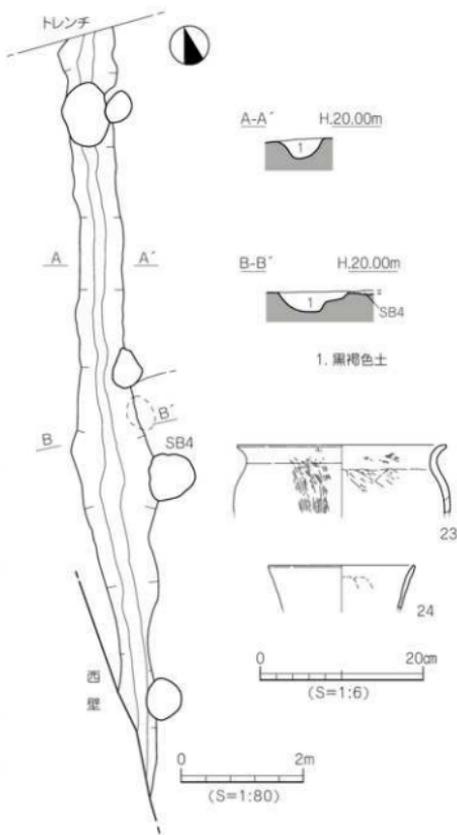
## SD1(第19図)

調査区北西部のA～E・1区で検出した南北方向の溝で、北側は試掘トレンチに切れ、西側は調査区外に延びる。主軸はN-15°-Eで南西から北東に走る溝であるが、北壁の試掘トレンチ内で東へ向きを変える。規模は検出長12.64m、幅0.46～1.25m、深さ30～33cmを測る。断面形態は舟底状を呈し、溝床は南から北へ16cmの比高差をもつ。埋土は黒褐色土である。遺物は埋土内より弥生土器・土師器・須恵器が出土した。

## 出土遺物(第19図)

23・24は土師器の鉢で、23は口縁部内外面にハケ目調整後の横ナデ調整、上胴部内面にケズリ調整、外面にハケ目調整が施される。24は外反する口縁部をもつ。

時期：出土した土師器の特徴から、古墳時代後期以降とする。



第19図 SD1測量図・出土遺物実測図

## 第4節.小 結

調査では、古墳時代から古代の遺構や遺物を確認した。竪穴建物は北壁にカマドや煙道などをもつ施設を伴う。竪穴建物や掘立柱建物は同方位を意識して建てられているが、竪穴建物が古く掘立柱建物が新しい時期差をもつ。SD1は建物と並行な位置関係にあり、集落内の施設と考える。SK1は土器の廃棄土坑と考えるが、獸歯数点が出土していることから墓の可能性もある。竪穴建物や掘立柱建物などを検出したことは、本調査地が古墳時代から古代にかけての集落地であり、住居の構造や集落の変遷を考える上で、貴重な資料となるものである。

表2 SB1出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
1	鉢	口径 (20.4) 残高 8.0	マメツ	ヨコナデ (陶器)	明褐色・淡灰褐色	橙褐色	石・長 ①-③ ○		

表3 SB4出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
2	高坏	残高 27	マメツ	マメツ	淡黄褐色	明褐色	石 ①-② 多含 ○		
3	高坏	残高 49	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	灰白色	石・長 ①-② △		

表4 SB5出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
4	甕	口径 (15.0) 残高 9.4	マメツ	ケズリ	淡黄色	淡黄色	石・長 ①-② ○		
5	甕	口径 (14.6) 残高 4.2	ハケ→ナデ	ヨコナデ (陶器)	淡灰褐色	淡褐色	石・長 ① ○		
6	甕	口径 (13.0) 残高 4.6	ハクリ	マメツ	白褐色	明黄色	砂・密 △		

表5 SK1出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
7	甕	口径 (20.0) 残高 17.9	ナデ/ハケ	ナデ/陶器圧痕	茶褐色	茶褐色	石・長 ①-③ ○		
8	甕	口径 (14.8) 残高 17.7	ハケ→ナデ	ナデ/ハケ	茶褐色・灰褐色	茶褐色・灰褐色	石・長 ①-③ ○		
9	甕	口径 (7.0) 器高 7.0	ケズリ	筒ナデ (陶器圧痕)	黄褐色	黄褐色	砂 ○	2	
10	高坏	底径 (11.8) 残高 10.0	マメツ	マメツ	明褐色	明褐色	長 ① 密 △		
11	瓶	残高 4.9	ナデ	ナデ	橙褐色	橙褐色	砂 ○		
12	坏蓋	口径 14.7 器高 4.3	筒ナデ/ハケ	回転ヨコナデ	白灰色	白灰色	石・長 ① 密 △		
13	坏身	口径 (12.1) 残高 3.8	筒ナデ/ハケ	回転ナデ	灰白色	灰白色	長 ① 密 ○		
14	甕	口径 (14.8) 残高 5.8	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/タタキ	暗灰色	暗灰色	長 ①-② ○		
15	甕	口径 (8.9) 器高 22.0	筒ナデ/ハケ	筒ナデ/ハケ	茶褐色・黄褐色	茶褐色・明褐色	石・長 ①-② ○	2	
16	甕	口径 (17.0) 器高 49.4	筒ナデ/ハケ	筒ナデ/ハケ	灰色・暗灰色	淡灰色・淡青灰色	長 ① ○	2	
17	甕	口径 (29.5) 残高 6.0	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色	淡灰褐色	長 ① ○		
18	高坏	口径 (11.8) 残高 3.6	筒ナデ/ハケ	回転ナデ	灰色・暗灰色	灰色・暗灰色	石 ① 密 ○		
19	高坏	底径 (7.8) 残高 3.8	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	淡青灰色	長 ①-② ○		
20	提瓶	口径 (6.2) 器高 17.5	筒ナデ/ハケ	回転ナデ	白灰色	白灰色	石 ① 密 △	2	
21	甕	残高 7.7	ナデ/筒ナデ	ナデ	灰色	灰色	長 ①-② ○	2	

表6 SK1出土遺物観察表(鉄製品)

番号	器種	残存	法 量				備 考	図版
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
22	鉄 鏝	鏝身部	8.75	0.42 ~ 3.25	0.95	11.707		2

表7 SD1出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
23	鉢	口径 (34.0) 残高 11.4	ハクリ/ハケ	ハクリ/ハケ	明褐色・黒灰色	明褐色・黒灰色	石・長 ①-② ○		
24	鉢	口径 (23.8) 残高 7.2	マメツ	マメツ (ケズリ)	淡黄色	淡黄色	石・長 ①-③ ○		

## 第4章 西石井荒神堂遺跡3次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯

2002（平成14）年1月18日、白石博氏より松山市西石井2丁目251番地1における宅地造成工事に伴い、当該地における埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。確認願が提出された申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地[№119西石井遺物包含地]内にあたる。申請地周辺では以前より調査が行われ、西石井荒神堂遺跡1・2次調査や石井幼稚園遺跡1・2次調査などがあり、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が多数検出され集落の存在や規模が明らかになりつつある。

これらのことから、申請地周辺には弥生時代から中世にかけての集落の存在が予想されるため、白石氏と文化財課は協議を重ね、遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施することとなった。試掘調査の結果、申請地では遺構や遺物が検出され、弥生時代から古墳時代にかけての集落関連の遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化財課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と地権者の三者は発掘調査についての協議を行い、松山市西石井2丁目251番地1の一部について本格調査を実施することとなった。調査は埋文センターが主体となり弥生時代から古墳時代の集落構造の解明と範囲確認を主目的とし、平成15年4月14日～同年5月16日の間に野外調査を実施した。

#### 2. 調査の経緯

2003（平成15）年4月14日、重機により表土掘削を行う。4月15日、調査仮設事務所を設置し、発掘器材や道具類を搬入する。4月16日、壁面・床面の精査を開始する。4月18日、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げと測量を開始する。5月15日、遺構完掘写真撮影を行う。5月16日、発掘器材を搬出、調査仮設事務所を撤去し、屋外調査を終了する。

#### 3. 調査組織（平成16年3月31日時点）

財団法人 松山市生涯学習振興財団

	理 事 長	中村 時広
	事務局 局 長	三宅 泰生
	次 長	菅 嘉見
埋蔵文化財センター	所 長	杉田 久憲
	専門監査学芸係長	高本 昌陽
	次長兼調査係長	西尾 幸則
	管 理 係 長	岸本 照修
		河野 史知（調査担当）
		大西 朋子（写真担当）

## 第2節 層位 (第21図)

本遺跡は、松山平野の南部にあり、小野川左岸の沖積低地上、標高20mに立地する。調査以前は畑地である。基本層序は、第Ⅰ層は現代の耕作土で灰黄褐色土と暗灰黄色土、第Ⅱ層は床土にふい黄色土と黄褐色土、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層にふい黄褐色土、第Ⅴ層は地山で灰黄褐色砂礫層と褐灰色砂礫層である。

第Ⅰ層：①灰黄褐色(10YR5/2)土：層厚16～20cmを全域に堆積する。

②暗灰黄色(2.5Y5/2)土：層厚2～8cmを東壁の南側、西壁の中央部に堆積する。

第Ⅱ層：①にふい黄色(2.5Y6/4)土：層厚3～10cmを東西壁共に疎らに堆積する。

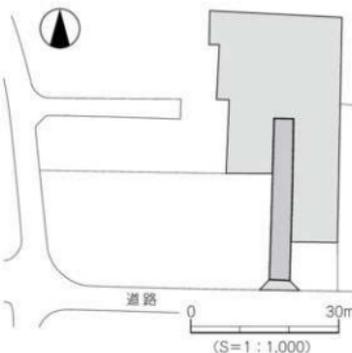
②黄褐色(2.5Y5/6)土：層厚2～10cmを東壁中央部・南東部・北西部に堆積する。

第Ⅲ層：暗褐色(10YR3/4)土：遺構

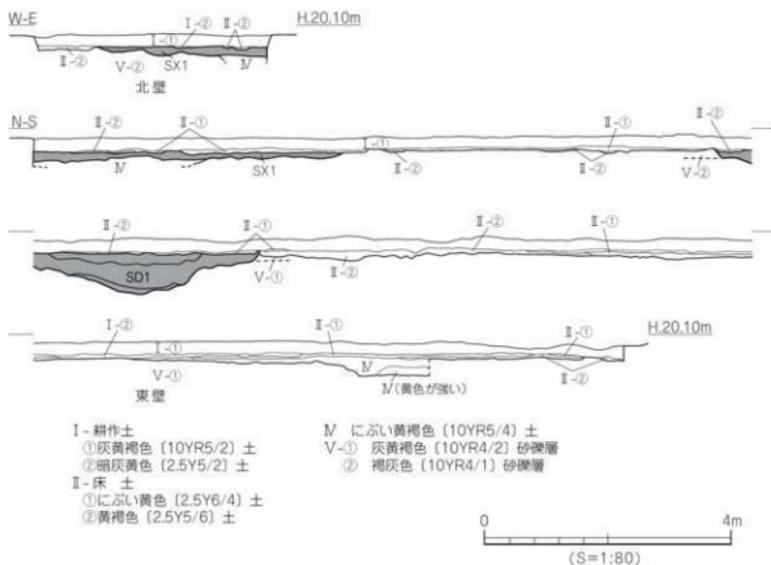
第Ⅳ層：にふい黄褐色(10YR5/4)土：3～13cmを北東部・南東部に堆積する。

第Ⅴ層：①灰黄褐色(10YR4/2)砂礫層：東壁中央部～南壁東側2/3まで堆積する。

②褐灰色(10YR4/1)砂礫層：調査区の北側に堆積する。



第20図 調査地位置図



第21図 北壁・東壁土層図

### 第3節 遺構と遺物

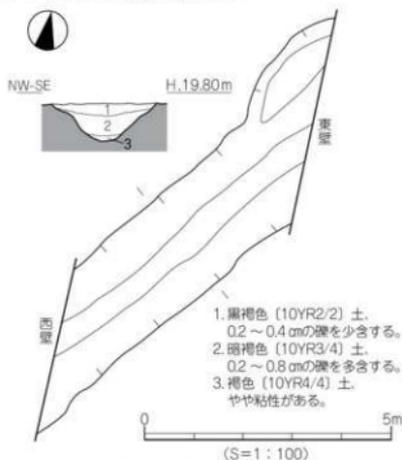
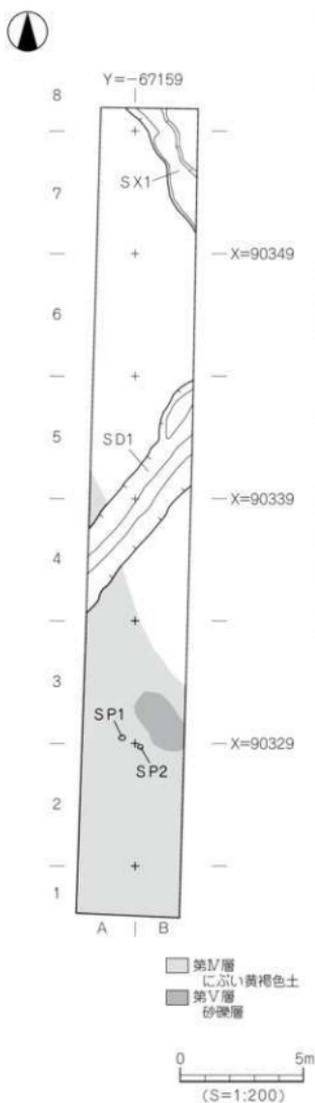
調査では、弥生時代の遺構や遺物を検出した。検出した遺構は、溝1条、柱穴2基、性格不明遺構1基である。

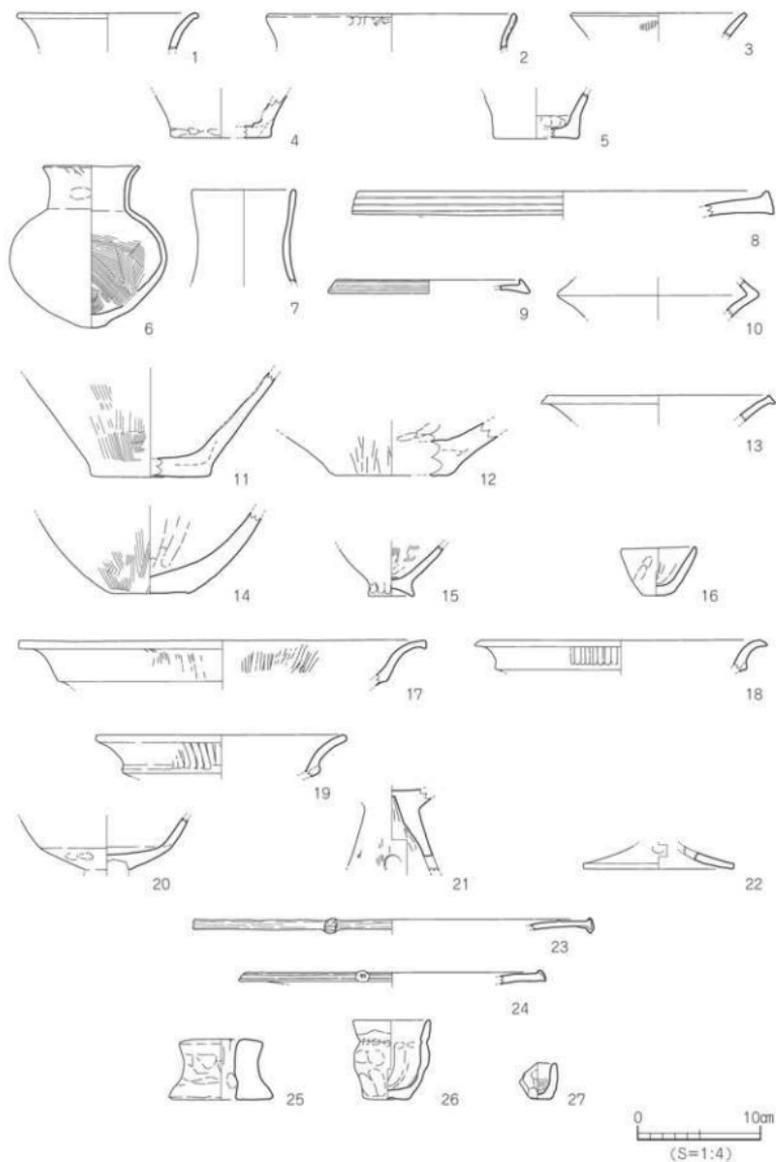
#### (1) 弥生時代

##### 1) 溝

##### SD1 (第23図、図版3・4)

調査区中央部のA～B・4～5区の第IV層上面にて検出した。東・西端は調査区外に延びる。主軸はN-40°-Eを指向し、北東方向から南西方向に直線的に延びる。規模は検出長6.26m、上場幅1.9～2.22m、深さ55～74cmをり、断面形態は逆台形状を呈し、溝床の比高差はない。埋土は3層に分層でき、上層の黒褐色〔10YR2/2〕土は溝の上面に深さ20cmでレンズ状に堆積し礫が混じる。中層は暗褐色〔10YR3/4〕土に礫を多含しており、深さ40cmで埋土の大部分を占める。下層は粘性をもつ暗褐色〔10YR4/4〕土で、溝床付近に10cmの厚みで薄く堆積する。遺物は上層に弥生土器の小片が多く、中層下位からは比較的多く破片が出土する。下層からは僅かに弥生土器の小片が出土する。出土した土器の器種は、甕・壺・高坏・ミニチュア土器である。また、溝の北東部に半円形の不明瞭な掘り込みの一部を検出した。この掘り込みはSD1に切られ全容は不明であるが推定直径5mを測り、僅かに平坦な基底面を確認した。





第24図 SD1出土遺物実測図

## 出土遺物(第24図、図版4)

1～27は弥生土器である。1～5は甕で、1は外反する口縁端部が丸みをもつ。2は外反する口縁端部は僅かに上方に延び丸く納まる。3は外反する口縁端部は平らな面をなす。4・5は平底の底部で、4は粘土の継ぎ足し痕が残る。6～14は壺で、6は僅かに残る平底の底部に胴部は球状を呈し、直立した口縁部に端部はやや外反する。7は長頸壺で口縁部が僅かに外反気味に立ち上がる。8・9は口縁端部が上下方に肥厚され端面に3条の凹線文が施される。10は「く」字状の屈曲部をもつ複合口縁壺である。13は口縁端部が外下方に肥厚され、端面に平らな面をなす。11・12・14は平底の底部で、11は底部付近に括れをもつ。15・16は鉢で、15は上げ底の底部はやや括れる。16は平底の底部をもつ。17～22は高坏である。17～19は口縁部で、17は口縁部が外反し端部は下方に肥厚される。18は口縁部に貼付凸帯状に稜がつく。19は外反する坏部に大きく外反する口縁部が貼り付く。21は脚上部内面にしぼり痕が残る。22は大きく外反する脚裾部に円孔がある。23・24は器台の受部で受部端に2条の凹線文がみられ、23は棒状の浮文、24は花形状の浮文が貼り付く。25は支脚で、断面台形状で中空である。26・27はミニチュア品で、26は緩やかに外反する口縁部をもち、内外面に指おさえ痕が顕著に残る。27は内面に爪状の成形痕、外面に指頭痕がある。

時期:出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後葉から後期末とする。

## 2)性格不明遺構

## SX1(第25図)

調査区北東隅部のA～B・7～8区の第IV層上面にて検出した。北東側は調査区外に延びる。一部だけの検出で全容は不明であるが、南西方向に肩部と中段をもち、北東方向に下がる様相を呈する。規模は検出長5.8m、幅1.7m以上、深さ14cm以上を測る。埋土は暗褐色土に褐色土が混入する。遺物は弥生土器の小片が出土した。

## 出土遺物(第25図)

28は弥生土器の複合口縁壺で、外反した口縁部に内湾する拡張部をもつ。

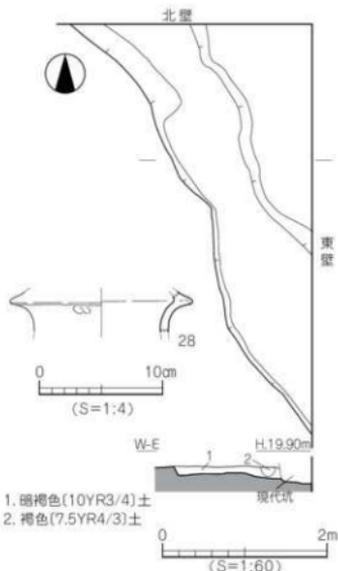
時期:出土した弥生土器が小片であり、弥生時代後期としか判らない。

## (2)時代不明

## 1)柱穴

調査区南側のA～B・2～3区の第IV層上面にて2基を検出した。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、規模は長軸22～26cm、短軸18～21cm、深さ9～10cmを測る。埋土にはぶい黄褐色[10YR5/3・4/3]土である。遺物の出土はない。

時期:出土遺物がなく、時期は判らない。



第25図 SX1測量図・出土遺物実測図

## 第4節 小 結

今回の調査では、弥生時代の遺構と遺物を確認した。第Ⅲ層は、第Ⅳ層上面の凹みに堆積し、南側を中心に薄く堆積がみられS D 1に切られていることから、弥生時代後期後葉以前から堆積していたことが判る。調査地は北約0.6kmに位置する小野川と南約1kmの内川に挟まれた位置に立地することなどから、第Ⅳ層の砂礫層は旧河川の氾濫原と考えられる。S D 1は大きく3層に分かれる。上層と中層に含まれる礫は、検出面である第Ⅳ層の礫が流れ込んだものである。下層は薄く溝床付近に堆積するが、S D 1の南側に広がる第Ⅲ層の流れ込みと思われる。埋土の堆積状況からS D 1が弥生時代後期後葉に掘られ、後期末に廃絶されたと考えられる。S D 1はほぼ直線的に北東方向から南西方向に延びており、礫層を掘り込んだ集落を区画する溝と考えられる。調査地から南約70mに位置する荒神堂遺跡からは弥生時代後期末の堅穴建物や土墳墓を検出しており、S D 1はこれらの集落に伴うものと推測される。S D 1の北東部に検出した半円形の掘り込みは、円形の様相を呈しており、S D 1より古い段階の堅穴建物の残存と考えられる。S X 1は一部だけの検出で全容は不明である。

荒神堂遺跡の北側周辺での調査例はなく、今回、区画溝を検出したことで弥生時代後期末頃の集落が調査地周辺に展開することが確認できた。

表8 S D 1出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
1	甕	口径(14.3) 残高 3.0	マメツ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長(1~4)金 ○		
2	甕	口径(19.9) 残高 2.9	マメツ	マメツ	明赤褐色・褐色	明褐色	石・長(1~3)金 ○		
3	甕	口径(14.0) 残高 1.9	ナデ+ハケ(6本/cm)	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	石・長(1~3)金 ○		
4	甕	底径(7.9) 残高 3.5	ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	石・長(1~3)金+チャ ○		
5	甕	底径(6.9) 残高 3.8	ナデ	マメツ	褐色にぶい黄褐色	にぶい褐色	石・長(1~3)金 ○		
6	甕	口径(7.6) 器高13.3 底径2.5	ナデ・ヨコナデ	ナデ+ハケ(10本/cm)	明赤褐色・明褐色	明赤褐色・暗灰黄色	石・長(1~5)金 ○		4
7	甕	口径(8.2) 残高 7.7	マメツ	マメツ	浅黄褐色	褐色	石・長(1~3)チャ ○		
8	甕	口径(33.2) 残高 2.0	ナデ	ハケ	褐色にぶい褐色	褐色	石・長(1~4)金+チャ ○		
9	甕	口径(14.7) 残高 1.1	マメツ	マメツ	褐色	明赤褐色	石・長(1~3)金 ○		
10	甕	残高 3.1	ナデ	マメツ	灰白色・褐色	にぶい黄褐色	石・長(1~4)チャ ○		
11	甕	底径(9.6) 残高 8.6	ナデ(15本/cm)	ナデ(15本/cm)	にぶい黄褐色	灰色	石・長(1~4)金 ○		
12	甕	底径(9.8) 残高 4.3	ナデ(工具痕)	ナデ(指頭痕)	にぶい褐色	黒色	石・長(1~4)金 ○		黒環
13	甕	口径(18.0) 残高 2.1	マメツ	マメツ	褐色	褐色	石・長(1~6)金 ○		
14	甕	底径(6.3) 残高 6.6	ハケ(14~6本/cm)+ナデ	ナデ	明黄褐色・黒褐色	黄灰色	石・長(1~4) ○		
15	鉢	底径 3.6 残高 4.1	マメツ(指頭痕)	ハケ(工具痕)	にぶい褐色・浅黄褐色	にぶい褐色	石・長(1~3)金 ○		8.5.18
16	鉢	口径 5.9 器高10.0 底径 2.1	マメツ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	淡灰色	灰黄色	石・長(1~2)金 ○		4
17	高坏	口径(33.0) 残高 3.7	ヨコナデ(ハケ)	ミガキ+ヨコナデ	にぶい褐色	灰褐色・褐灰色	石・長(1~2)金 ○		4
18	高坏	口径(22.5) 残高 2.5	ミガキ+ヨコナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	石・長(1~2)金 ○		
19	高坏	口径(20.2) 残高 3.4	ミガキ+ナデ	マメツ	褐色	灰黄褐色	石・長(1~4)金 ○		
20	高坏	残高 4.3	ナデ	ヨコナデ+ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長(1~2)金 ○		8.5.18
21	高坏	残高 6.8	ナデ(ハケ)	ナデ(指頭痕)	褐色	褐色	石・長(1~4)チャ ○		
22	高坏	底径(12.1) 残高 1.9	マメツ	マメツ	褐色にぶい褐色	褐色にぶい黄褐色	石・長(1~2)金 ○		
23	器台	口径(32.1) 残高 1.2	マメツ	マメツ	浅黄褐色	浅黄褐色	石・長(1~2)金 △		4
24	器台	口径(23.8) 残高 1.1	マメツ	ナデ	にぶい黄褐色	黄灰色	石・長(1~3) ○		4
25	支脚	口径(6.4) 器高5.0 底径(8.0)	ナデ+マメツ	ナデ(指頭痕)	褐色	褐色	石・長(1~3)金 ○		4
26	支脚	口径(6.0) 器高5.5 底径 3.7	ヨコナデ+指ナデ	ヨコナデ+指ナデ	灰黄色	灰黄色	石・長(1~3)金 ○		黒環 4
27	支脚	口径 2.8 器高3.0 底径 1.5	指ナデ(指頭痕)	指ナデ(爪圧痕)	褐色	褐色	石・長(1~4)チャ ○		4

表9 S X 1出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
28	甕	残高 3.3	マメツ	マメツ	にぶい褐色	褐色	石・長(1~3) ○		

# 第5章 西石井遺跡4次調査

## 第1節 調査の経緯

### 1. 調査に至る経緯

2007（平成19）2月23日、松田辰美氏より、松山市西石井1丁目79番1の一部における宅地造成に伴い、当該地における埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No119西石井遺物包含地」内にあたる。申請地周辺では西の西石井荒神堂遺跡1次・2次調査からは、弥生時代後期の竪穴建物や土坑墓が検出され、南の石井幼稚園遺跡1次・2次調査からは、古墳時代後期の竪穴建物や古代の溝、中世の土器が出土した。南東の南中学校構内遺跡からは、弥生時代前期の溝が確認され、古川遺跡1～3、5～6次調査では、弥生時代後期から古代までの集落関連遺構を多数検出している。

このことから、申請地周辺には弥生時代から中世までの集落の存在が予想されるため、申請者と文化財課は協議を重ね、遺跡の有無を確認するため試掘調査を実施することになった。試掘調査は2007（平成19）年3月6日に実施され、溝や土坑・柱穴などを検出し、弥生土器・土師器片などが多数出土した。この結果を受け、申請者と文化財課、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者は協議を重ね、開発に伴って消失する遺構や遺物に対して、記録保存のための本格調査を実施することとなった。

発掘調査は、埋文センターが主体となり2007（平成19）年5月16日～同年6月15日の間に野外調査を実施した。調査区は2区に分け、西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。

### 2. 調査の経緯

仮設テント、仮設トイレを設置し、発掘機材の搬入を行った。調査区を設定し、重機にてⅠ区から掘削を行い同日終了した。遺構検出作業をⅠ・Ⅱ区の北側より行い、竪穴建物・溝・柱穴を検出した。業者に委託し調査区内に基準点を設置し座標系に伴う調査区割りを設定し、遺構配置図を作成した。遺構埋土と遺構番号を記録した後に、個別の遺構調査を開始した。遺構調査は、竪穴建物から行い、溝・柱穴の精査を行い遺構全体が明確になった。高所作業車を使用し、遺構完掘写真撮影を行った。測量補足、発掘機材の撤去、土器洗浄、注記を行い調査を終了する。

### 3. 調査組織（平成19年4月1日時点）

財団法人 松山市生涯学習振興財団

	理事長	中村 時広
	事務局 局長	吉岡 一雄
埋蔵文化財センター	所長	丹生谷博一（兼考古館館長）
	次長	田城 武志（兼調査担当リーダー）
	主任	山之内志郎（調査担当）
		高尾 和長（調査担当）
		大西 朋子（写真担当）

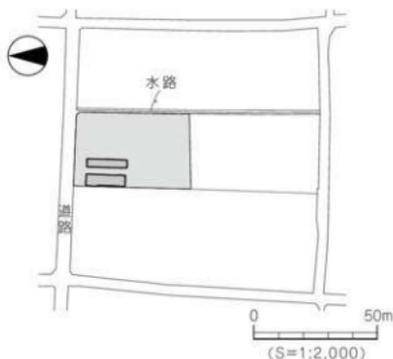
## 第2節 層位 (第27図)

申請地は松山平野南部に位置し、石手川の支流である小野川、重信川の支流である内川に挟まれた沖積低地上の標高21mに立地する。調査地は、小野川南岸の沖積低地上に立地し、標高21mを測る。調査前は水田であった。本調査では、2層の土層を確認した。

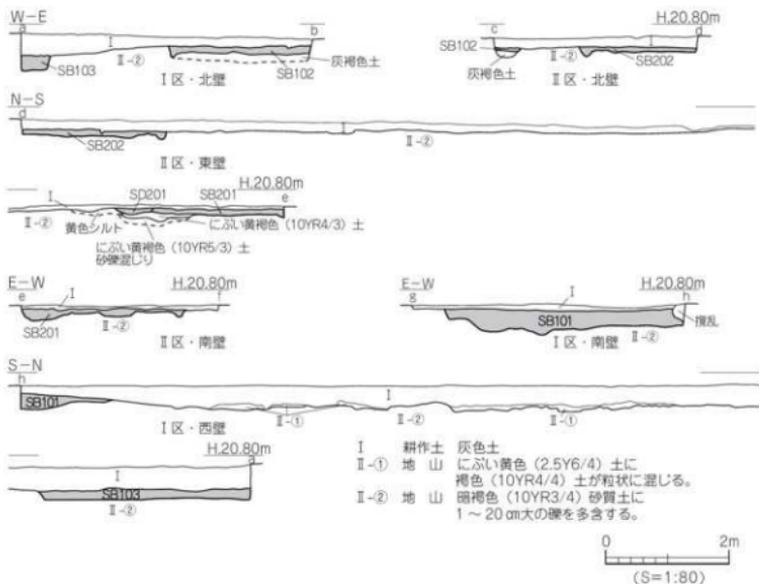
I層：灰色土(水田耕作土)である。調査区全域で層厚10～38cmを測る。

II-①層：にぶい黄色(2.5Y6/4)土に褐色(10YR4/4)土が粒状に混じり、層厚4～20cmを測る。

II-②層：暗褐色(10YR3/4)砂質土に1～20cmの礫を多く含む。II-②層は、I、II区北側とII区中央部で検出した。II-①・II-②層上面が遺構検出面である。

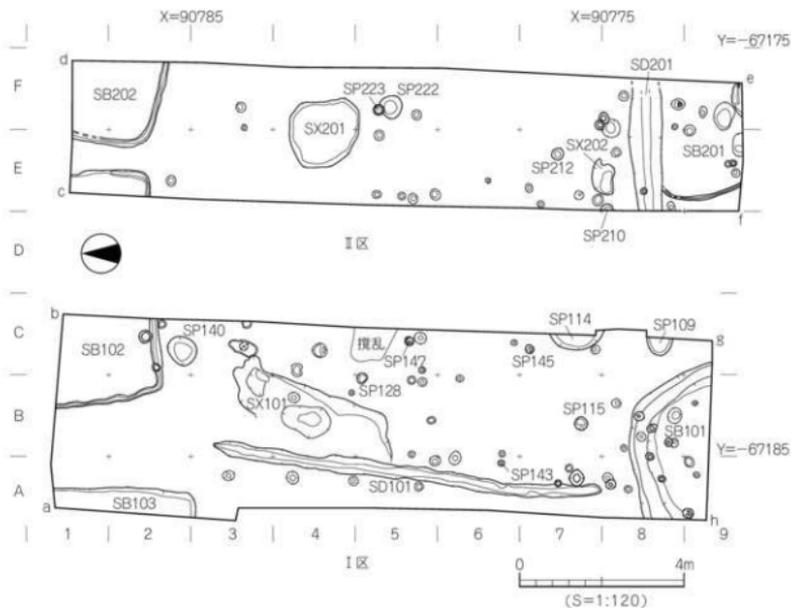


第26図 調査地位置図



第27図 土層図

## 遺構と遺物



第28図 遺構配置図

## 第3節 遺構と遺物

検出した主な遺構は、竪穴建物5棟、溝状遺構2条、性格不明遺構3基、柱穴84基である。

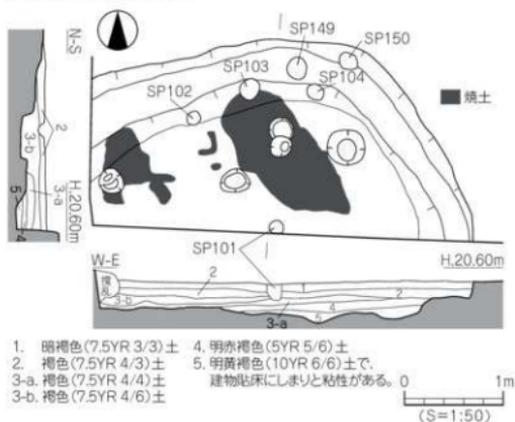
### (1) 弥生時代

竪穴建物4棟、溝状遺構1条、性格不明遺構2基を検出した。

#### 1) 竪穴建物

SB101(第29図、図版5)

I区南部のA～C・8～9区に位置し、SP101～104・149・150に切られ、南側と西側は調査区外に延びる。平面形態は検出した北側の形状から円形と考えられる。規模は、東西3.88m、南北2.0m、壁高40cmを測る。内部施設には高床部、貼り床、柱穴がある。高床部は周壁に沿って幅20～40cm検出した。貼り床は建物の東側で検出した。埋土は、5層に分別でき、①層は暗褐色土、②層は褐色土、③-a層・③-b層は褐色土、



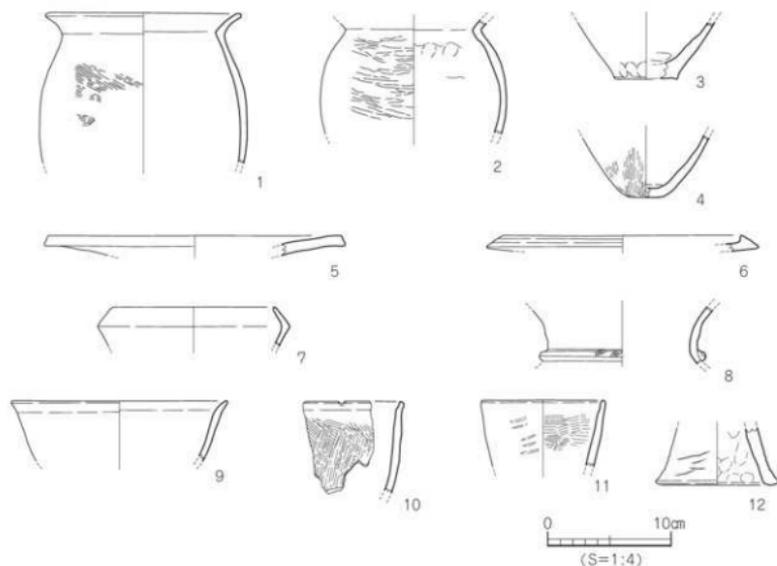
第29図 SB101測量図

④層は明赤褐色土で特に中央部が赤い。⑤層は明黄褐色土で建物貼り床面になり、しまりと粘性がある。北東床面において焼土を検出しており、遺物は弥生土器・炭化物が出土した。

#### 出土遺物(第30図、図版6)

1～12は弥生土器である。1～4は甕で、1・2は「く」字状を呈する口縁部をもち、1は口縁端部が丸く納まり、2は内湾する上胴外面にタタキ調整が施される。3・4は平底の底部をもち、3は底部付近が僅かに括れる。5～8は壺で、5は大きく外反する口縁部に端部は平らな面をなす。6は口縁端部に2条の凹線文が施される。7は複合口縁の壺で「く」字状の口縁部を呈する。8は頸部に1条の貼り付け凸帯に刻目文をもつ。9～11は鉢で、9・10は外反する胴部に口縁部付近がさらに外反し、9は端部が丸く納まる。10は端部が平らな面をなし、内面にハケ目調整後のミガキ調整が施される。11は口縁部が外反し端部が丸く納まる。12は支脚の脚部で脚端部は平らな面をなし、外面にタタキ調整が施される。

時期: 出土した遺物の形態より弥生時代後期末とする。



第30図 SB101出土遺物実測図

#### SB102(第31図)

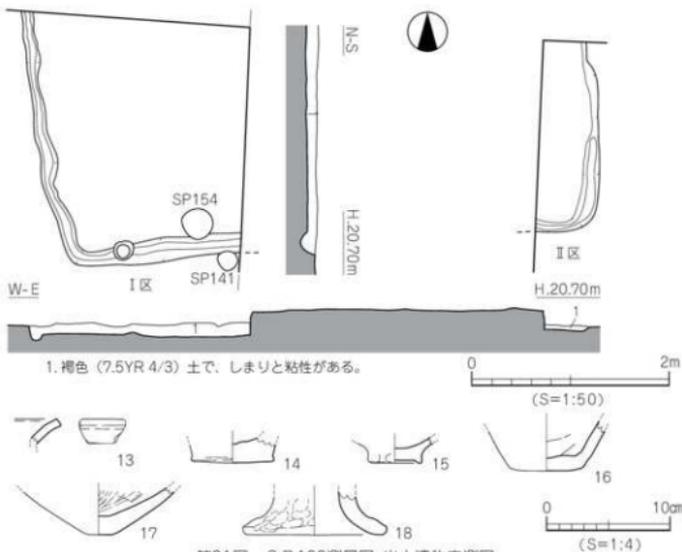
I区北部のB・C・1～2区～II区北部のE・1～2区に位置し、S P141・154に切られ、北側は調査区外へ延び中央部はII区に続く。平面形態は2箇所のコーナー部を検出し方形と考えられる。規模は東西5.66m×南北2.56m以上、壁高10～15cm、床面積12.65㎡以上を測る。内部施設には周壁溝と柱穴がある。周壁溝はI区西から南の壁下とII区南東隅で検出し、規模は幅10～20cm、深さ13cmを測る。埋土は褐色土で、しまりと粘性がある。遺物は弥生土器が出土した。

#### 出土遺物(第31図)

13～18は弥生土器である。13～15は甕で、13は外反する口縁部内面はハケ目調整が施される。14

は平底の底部をもち、15はやや上げ底の底部で内外面はナデ調整が施される。16は壺の底部で、内外面にナデ調整が施される。17は鉢の底部で、内面にハケ目調整後のミガキ調整が施される。18は支脚の脚裾部で外面にナデ調整や指おさえ痕がある。

時期：出土した遺物の形態より、弥生時代後期末とする。



第31図 SB102測量図・出土遺物実測図

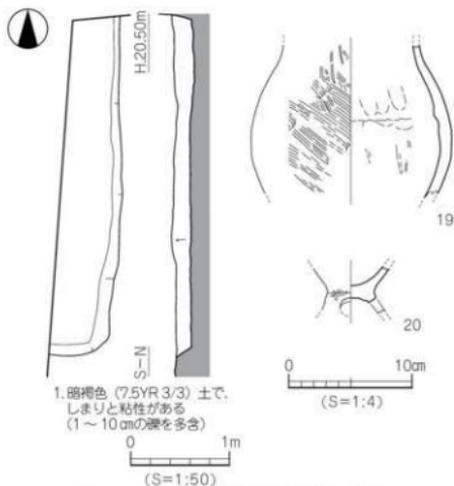
SB103(第32図)

I区北西部A・1～3区に位置し南東隅部だけの検出である。平面形態は方形と考えられ、規模は東西0.64m以上、南北3.5m以上、壁高16～20cm、床面積2.03㎡以上を測る。埋土は暗褐色土に1～10cmの礫を多含し、しまりと粘性がある。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物(第32図、図版6)

19は壺で、胴部中位の接合痕を境に上胴部内面はナデ調整、下胴部内面はハケ目調整が施される。20は台付杯の杯部と脚部の接合部で、脚部に4方向の透しが施される。

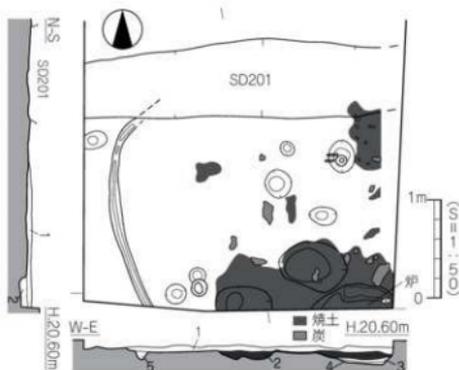
時期：出土した遺物の形態より、弥生時代後期末とする。



第32図 SB103測量図・出土遺物実測図

## SB201(第33図、図版5)

Ⅱ区南部のE～F・8～9区に位置し、北側をSD201に切れ、南側と東側は調査区外に延びる。平面形態は楕円形と思われる。規模は東西2.96m以上、南北1.9m以上、壁高6～18cm、床面積5.49m以上を測る。埋土の①層は暗褐色土で、しまりと粘性がある。内部施設は周壁溝と炉を検出した。周壁溝は西の壁下で検出し、規模は幅8～14cm、深さ9cmを測る。炉は調査区の南東隅に位置し南側は調査区外に続く。平面形態は楕円形と思われる。規模は88cm、深さ15cmを測る。炉の埋土は3層に分層し、上層の②層はにぶい赤褐色土で、しまりはあるが粘性は弱く、焼土を多く含む。中層の③層は明黄褐色土で、しまりはあるが粘性はない。下層の④層は黒色土で、しまりはないが粘性は強い。下層の⑤層は、暗褐色土に③層が混じる。遺物は弥生土器、炭化物が出土した。

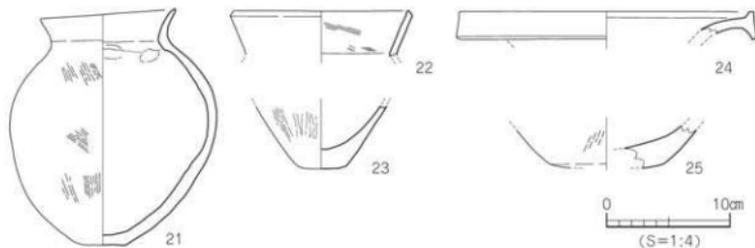


1. 暗褐色 (7.5YR 3/3) 土で、しまりと粘性がある。
2. にぶい赤褐色 (2.5YR 4/3) 土で、しまりはあるが粘性は弱い。焼土は多量。
3. 明黄褐色 (10YR 6/6) 土で、しまりはあるが粘性はない。
4. 黒色 (10YR 2/1) 土で、しまりはないが粘性は強い。
5. 暗褐色 (7.5YR 3/3) 土に、3層が混じる。

第33図 SB201測量図

## 出土遺物(第34図、図版6)

21～25は弥生土器である。21～23は甕で、21は平底の底部をもち緩やかに外反する口縁部に端部は丸く納まる。22は外反する口縁の端部は平らな面をなす。23は外面に板状工具によるナデ調整が施される。24・25は壺である。24は外反する口縁部に端部は上下方に拡張される。25は平底の底部である。時期: 出土した遺物の形態より、弥生時代後期末とする。

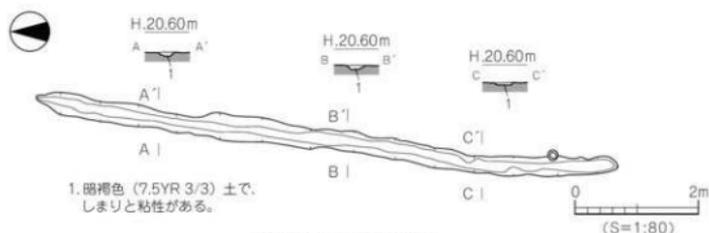


第34図 SB201出土遺物実測図

## 2) 溝状遺構

## SD101(第35図)

I区中央部のA・3～7、B・3～4区に位置する。主軸はN-8°-Eで南北に走る溝である。規模は検出長9.64m、幅0.2～0.48m、深さ2～10cm、溝床は北から南に比高差3cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土で、しまりと粘性がある。遺物は弥生土器が僅かに出土した。時期: 出土した遺物の形態より、弥生時代後期末とする。



第35図 SD101測量図

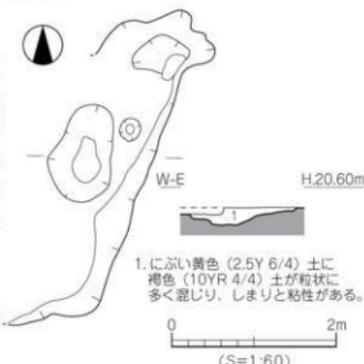
### 3) 性格不明遺構

#### SX101 (第36図)

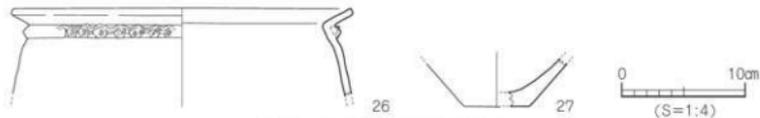
I区中央部のB・3～5、C・3区に位置し、西側は削平されている。平面形態は不整形である。規模は4.3m以上、短径1.09m以上、深さ4～20cmを測る。埋土はにぶい黄色土に、褐色土が粒状に多く混じり、しまりと粘性がある。出土遺物は弥生土器がある。地山の褐色土に類似し、平面形態が不整形なことより、SX101は地山の窪地と考えられる。

#### 出土遺物 (第37図、図版6)

26・27は弥生土器である。26は甕の口縁部で、頸部に貼付突帯が1条巡る。27は平底の壺の底部である。  
 時期: 出土した遺物の形態より、弥生時代後期末とする。



第36図 SX101測量図

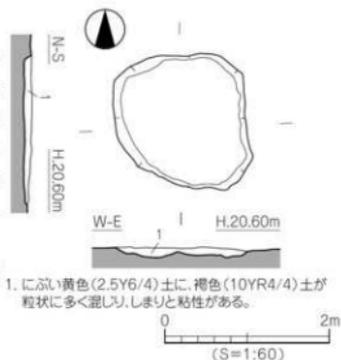


第37図 SX101出土遺物実測図

#### SX201 (第38図)

II区中央部のE～F・4～5区に位置する。平面形態は不整形である。規模は長径1.64m、短径1.58m、深さ2～12cmを測る。埋土はにぶい黄色土に褐色土が粒状に多く混じり、しまりと粘性がある。出土遺物は弥生土器がある。地山の褐色土に類似し、平面形態が不整形なことより、SX201は地山の窪地と考えられる。

時期: 特定しうる遺物に乏しく、埋土がSX101に類似することから、弥生時代後期末とする。



第38図 SX201測量図

## (2) 古墳時代

竪穴建物1棟を検出した。

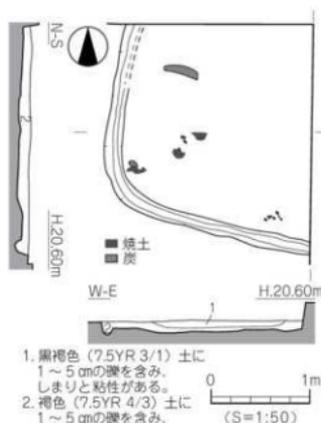
### SB202(第39図)

Ⅱ区北部のE～F・1～2区に位置し、北側と東側は調査区外に延びる。平面形態はコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は東西2.3m以上、南北2.07m以上、壁高10～13cm、床面積4.18m以上を測る。内部施設は周壁溝がある。周壁溝は壁下に位置し規模は、幅10～15cm、深さ8cmを測る。建物埋土は2層に分層され、①層は黒褐色土に1～5cmの礫を含み、しまりと粘性がある。②層は褐色土に1～5cmの礫を含み、しまりと粘性がある。遺物は土師器の甕形土器・高坏形土器、焼土、炭化物が出土した。

### 出土遺物(第40図、図版6)

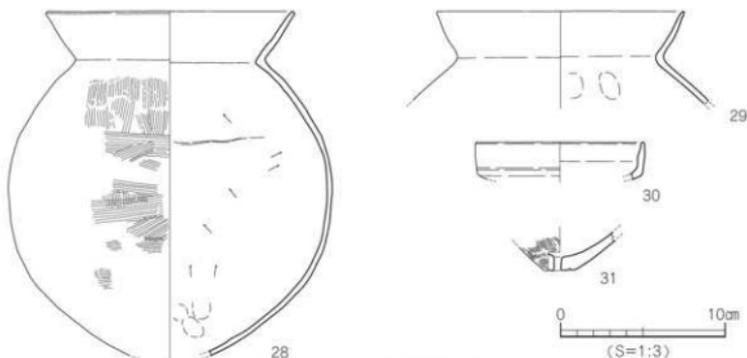
28～31は土師器である。28～29は甕で、「く」字状の口縁部をもち、28は球状の胴部内面にケズリ調整、外面にハケ目調整が施される。30は壺の口縁部で口縁端部が上方に延びる。31は瓶の底部で、底部に焼成前の穿孔があり、外面にハケ目調整が施される。

時期: 出土した遺物の形態より、古墳時代前期とする。



1. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 土に  
1～5cmの礫を含み、  
しまりと粘性がある。
2. 褐色 (7.5YR 4/3) 土に  
1～5cmの礫を含み、  
しまりと粘性がある。

第39図 SB202測量図



第40図 SB202出土遺物実測図

## (3) 中世

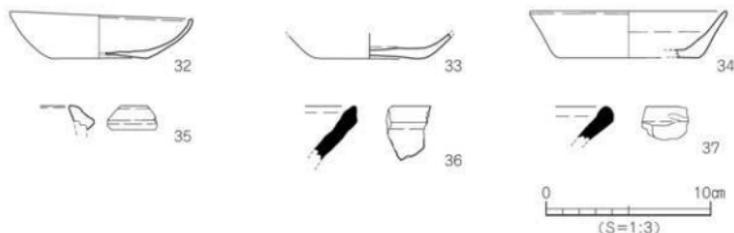
柱穴75基を検出した。

柱穴は、調査区のⅠ・Ⅱ区の南から北4mまでの範囲に分布している。特にⅠ区中央部に多くに柱穴が位置する。柱穴の平面形態は円形である。規模は径12～15cm、深さ6～33cmを測る。埋土は灰黄褐色土(10YR4/2)である。遺物は土師器の皿・坏、須恵器の捏鉢が出土した。

### 出土遺物(第41図、図版6)

32～34は土師器の坏である。32は底部に板状痕がある。33は底部に回転糸切り痕が残る。35は土釜の

口縁部で、断面三角形の凸帯をもつ。36・37は須恵器の捏鉢の口縁部である。36は口縁端部が断面三角形を呈する。37は口縁端部が丸く納まる。



第41図 中世出土遺物実測図

#### (4) 時代不詳

溝状遺構 1 条を検出した。

##### SD201

Ⅱ区南部のE～F・8区に位置する。主軸はN-87°-Eで東西に走る溝である。規模は検出長2.98m、幅0.55～0.8m、深さ3～12cm、溝床は西から東に比高差7cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は褐灰色(7.5YR4/1)土で、しまりはあるが粘性はない。遺物の出土はない。

## 第4節 小 結

本調査では弥生時代後期、古墳時代前期、中世の遺構と遺物を検出した。検出した遺構は、弥生時代後期末と古墳時代前期の堅穴建物2棟が目される。

弥生時代後期末の堅穴建物SB201は、出土遺物の甕形土器が横転した状態で出土し、焼土と炭化物を建物床面の広い範囲で検出している。古墳時代前期の堅穴建物SB202では、SB201と同じく焼土と炭化物を床面より検出し、出土遺物の甕形土器も横転した状態で出土している。

堅穴建物2棟(SB201-SB202)は、遺物の出土状況と焼土、炭化物の検出状況から火災を受けた建物の可能性が考えられる。このような火災を受けた堅穴建物は、調査地の南部に位置する西石井荒神堂遺跡1次調査SB1がある。SB1は、弥生時代後期末の堅穴建物で、床面に多量の木材の炭化物が出土したことにより、火災を受け廃絶した建物であると報告されている。

弥生時代の集落では、堅穴建物を4棟検出したことにより、調査地周辺には弥生時代後期の集落が存在していることが確認され、西石井荒神堂遺跡の集落の範囲が大きく北部に広がる事が明らかとなった。

また、古墳時代の建物も同時に確認されたことより、弥生時代から古墳時代にかけて引き続き集落が展開していたことが考えられる。

今回の調査からは、現在まであまり調査が行われていなかった石井地区北部の集落の存在が明らかになった。火災建物の検出では、建物廃絶時の状況を考える上で貴重な資料となるものである。

表 10 S B 101 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
1	甕	口径 (158) 残高 2.3		マメツ	褐色	赤褐色・明黄褐色	石・長 (1-2) 全 ○	黒斑	6
2	甕	残高 9.4	ナデ・タタキ	マメツ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石・長 (1-2) ○		6
3	甕	底径 (5.0) 残高 4.6	ナデ (指痕)	ナデ	褐色	陶灰色	石・長 (1-3) ○		
4	甕	底径 (3.0) 残高 5.2	ハケ (口縁部) (5本/cm)	マメツ	明赤褐色	にぶい黄褐色・灰色	石・長 (1-3) ○		
5	甕	口径 (236) 残高 1.6	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色	褐色	石・長 (1-3) ○		
6	甕	口径 (220) 残高 1.3	マメツ	マメツ	淡黄色	にぶい褐色	石・長 (1-2) 全 ○		
7	甕	口径 (130) 残高 3.2	マメツ	マメツ	褐色	褐色	石・長 (1-2) ○		
8	甕	残高 4.6	マメツ	マメツ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	石・長 (1-3) ○		
9	鉢	口径 (174) 残高 4.9	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色・黄灰色	磨 ○		
10	鉢	残高 7.5	マメツ	ハケ (5本/cm) → ミガキ	淡黄色	褐色	石・長 (1-3) ○		
11	鉢	口径 (96) 残高 5.3	タタキ	ヨコナデ (口縁部) → ミガキ	褐色	にぶい黄褐色	石・長 (1-3) ○		
12	支脚	底径 (100) 残高 4.7	タタキ	ナデ (指痕)	にぶい黄褐色	にぶい褐色	石・長 (1-2) ○		

表 11 S B 102 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
13	甕	残高 2.0	マメツ	ハケ (5本/cm)	褐色	褐色	石・長 (1-3) 全 ○		
14	甕	底径 (6.6) 残高 2.0	マメツ	マメツ	褐色	灰白色	石・長 (1-2) ○		
15	甕	底径 (4.3) 残高 2.1	ナデ (指痕)	ナデ	褐色	浅黄色	長 (1-5) 全 ○		
16	甕	底径 (6.0) 残高 4.1	ナデ	ナデ	黒色・褐色	にぶい黄褐色	石・長 (1-5) ○		
17	鉢	底径 (25) 残高 3.8	マメツ	ハケ (7本/cm) → ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長 (1-4) ○		
18	支脚	底径 (11.0) 残高 3.5	ナデ (指痕)	マメツ	にぶい黄褐色	褐色	石・長 (1-2) ○		

表 12 S B 103 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
19	甕	残高 12.5	ハケ (5本/cm)	ナデ・ハケ (10本/cm)	褐色	褐色	石・長 (1-2) 全 ○	6	
20	台付杯	残高 3.8	ミガキ	マメツ	褐色	にぶい褐色	石・長 (1-4) ○	6	

表 13 S B 201 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
21	甕	口径 (109) 底径 (93) 残高 3.9	ハケ (4-6本/cm)	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長 (1-6) ○	6	
22	甕	口径 (14.0) 残高 3.7	ハケ	ハケ	にぶい黄褐色・黄灰色	灰色	石・長 (1) ○		
23	甕	底径 3.8 残高 5.1	ナデ (工具痕)	マメツ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長 (1-9) ○		
24	甕	口径 (238) 残高 2.3	マメツ	マメツ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長 (1-7) ○		
25	甕	底径 (9.2) 残高 3.4	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色	陶灰色	石・長 (1-6) ○		

表 14 S X 101 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
26	甕	口径 (27.2) 残高 7.2	ヨコナデ	マメツ	にぶい褐色	灰褐色	石・長 (1-3) ○	6	
27	甕	底径 (5.4) 残高 4.0	マメツ	マメツ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長 (1-2) ○		

表 15 S B 202 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
28	甕	口径 (148) 残高 21.1	ハケ (7-8本/cm)	ケズリ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石・長 (1-5) ○	黒斑	6
29	甕	口径 (148) 残高 5.6	ナデ	ナデ (指痕)	浅黄褐色	陶灰色	石・長 (1) ○		
30	甕	口径 (100) 残高 2.3	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄色	浅黄色	磨 ○		
31	甕	底径 2.3 残高 3.2	ハケ (8本/cm) ナデ	マメツ	褐色	灰白色	石・長 (1-4) ○	黒斑	6

表 16 中世出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
32	杯	口径 11.0 器高 2.9 底径 5.8	マメツ (指痕)	マメツ	浅黄褐色	浅黄褐色	石・長 (1) ○		6
33	杯	底径 6.5	ナデ	回転ナデ	浅黄色	浅黄褐色	磨 ○		
34	杯	口径 (120) 器高 2.8 底径 (8.6)	マメツ	マメツ	浅黄褐色	浅黄褐色	磨 ○		黒斑
35	土釜	残高 1.4	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長 (1-2) ○		黒斑
36	控鉢	残高 3.4	回転ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	灰色	磨 ○		
37	控鉢	残高 2.1	ナデ	ナデ	明オリブ灰色	明オリブ灰色	磨 ○		

## 第6章 東石井遺跡2次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯

2004（平成16）年11月22日、株式会社ドゥエルより松山市東石井2丁目355番1における宅地造成工事に伴い、当該地における埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.118東山縄文・弥生遺物包含地 東山古墳群」内にあたる。申請地の北側から東方にのびる独立丘陵は、古来より伊予三山のひとつ「東山」として知られ、旧石器から縄文時代の遺物が採取できるほか、縄文時代晩期から弥生時代前期頃の土坑墓、弥生時代後期の溝、古墳が存在し、南北朝時代には合戦が行われたことなどが発掘調査および文献資料などによって判明している。

これらのことから、申請地周辺には弥生時代を中心とした集落の存在が予想されるため、株式会社ドゥエルと文化財課は協議を重ね、遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施することとなった。試掘調査の結果、申請地では遺構や遺物が検出され、弥生時代から古墳時代の集落関連の遺跡があることを確認した。

この結果を受け、申請者と文化財課、及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）の三者は発掘調査についての協議を行い、松山市東石井2丁目355番1の一部について本格調査を実施することとなった。調査は、埋蔵文化財センターが主体となり、弥生時代から古墳時代の集落構造の解明と範囲確認を主目的とし、平成17年1月5日～同年1月31日の間に野外調査を実施した。

#### 2. 調査の経緯

遺構を検出する作業から開始した。重機による掘削と人力による精査作業を実施し、溝状遺構を時代の新しいものから順番に掘り下げ、埋蔵文化財センターは、発掘調査費用の負担者である株式会社ドゥエルに、SD1の延長部分をトレンチ調査で確認したいとの相談を持ちかけた。その結果、株式会社ドゥエル側から快諾を得て、T2、T1の順に人力による掘削作業を実施し、T2にてSD8及びSD9、T1にてSD1及びSD2の延長部分を確認することができた。調査の終盤にさしかかった段階で、遺構検出面から20～40cm下がった土層の内部に、縄文時代晩期の土器が包含される状況を確認し、それを受け、調査区北端を主体とした範囲内において、遺物包含層の内部に含まれる遺物の取り上げ作業を実施した。予定期間内で野外調査を終了することができた。

#### 3. 調査組織（平成16年4月1日時点）

財団法人 松山市生涯学習振興財団	埋蔵文化財センター	所長	杉田 久憲
理事長	中村 時広	専門監兼学芸係長	早瀬 忠幸
事務局 局長	三宅 泰生	次長兼調査係長	西尾 幸樹
次長	石丸 允良	管理係長	岸本 照修
次長	池田 政勝		栗田 茂敏（調査担当）
			吉岡 和哉（調査担当）

## 第2節 層位(第43図)

調査地周辺には天山、土亀山、東山、星乃岡の四つの分離丘陵が集中する地域である。調査地は東山の丘陵裾部にあたり標高22.5mに立地し調査以前は耕作地として利用していた。

第Ⅰ層 近現代の水田耕作に伴って形成された土層（耕作土）で、上下2層に細分することが可能である。

-①層 暗灰色粘質微粒土：調査区全域で層厚12～22cmを測る。

-②層 灰色微粒土中に黄橙色土をブロック状に含む。調査区全域で層厚2～6cmを測る。

第Ⅱ層 近現代の水田耕作に伴って形成された土層で、いわゆる床土である。黄橙色粘土中に灰色粘土および、暗褐色土をブロック状に含む。調査区全域で層厚2～12cmを測る。

第Ⅲ層 暗褐色～褐色粘質微粒土。弥生時代から古墳時代の遺構検出面である。調査区全域で層厚2～7cmを測る。

-トレンチ掘り-

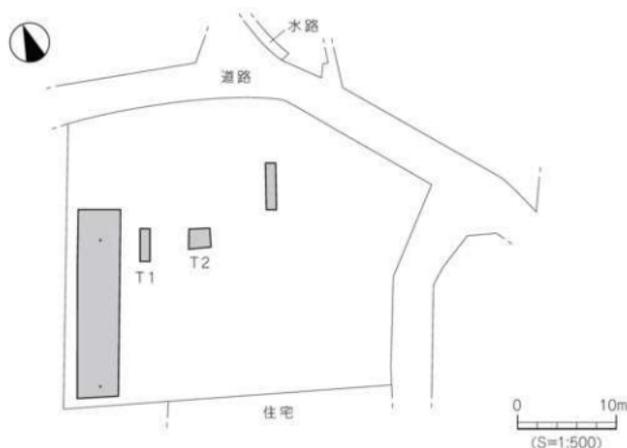
第Ⅳ層 黄褐色硬質微粒土：層厚24～38cmを測る。

第Ⅴ層 第Ⅳ層+暗褐色硬質微粒土：層厚20～32cmを測る。

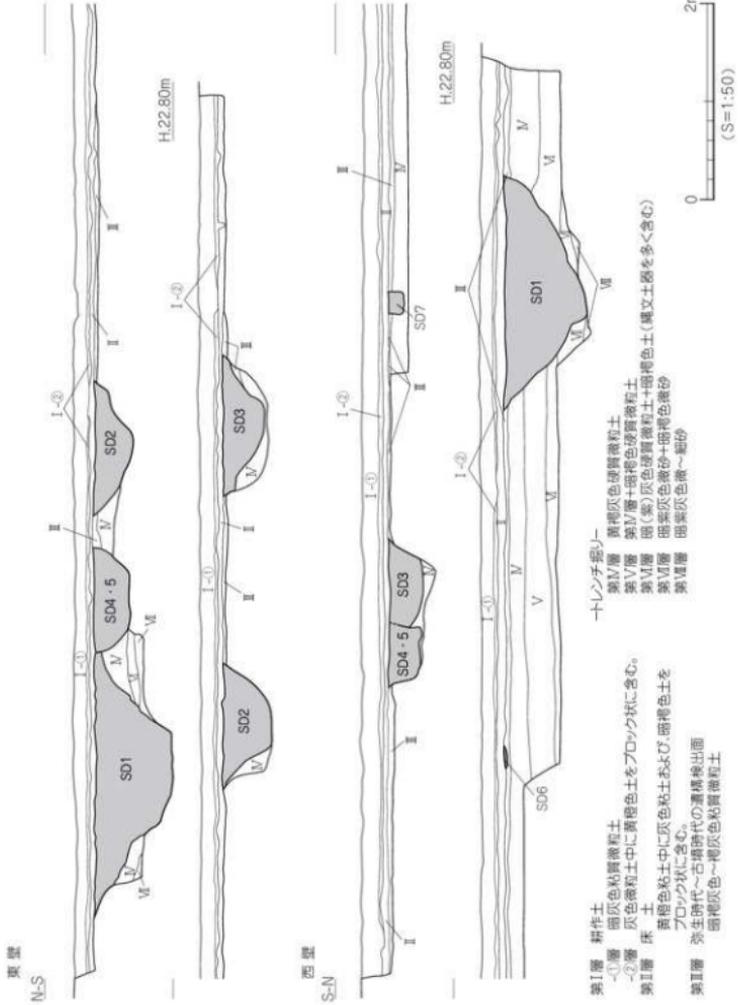
第Ⅵ層 暗(紫)灰色硬質微粒土+暗褐色土。本層の内部に縄文土器が多く含まれる。層厚8～30cmを測る。

第Ⅶ層 暗紫灰色微砂+暗褐色微砂：層厚8～20cmを測る。

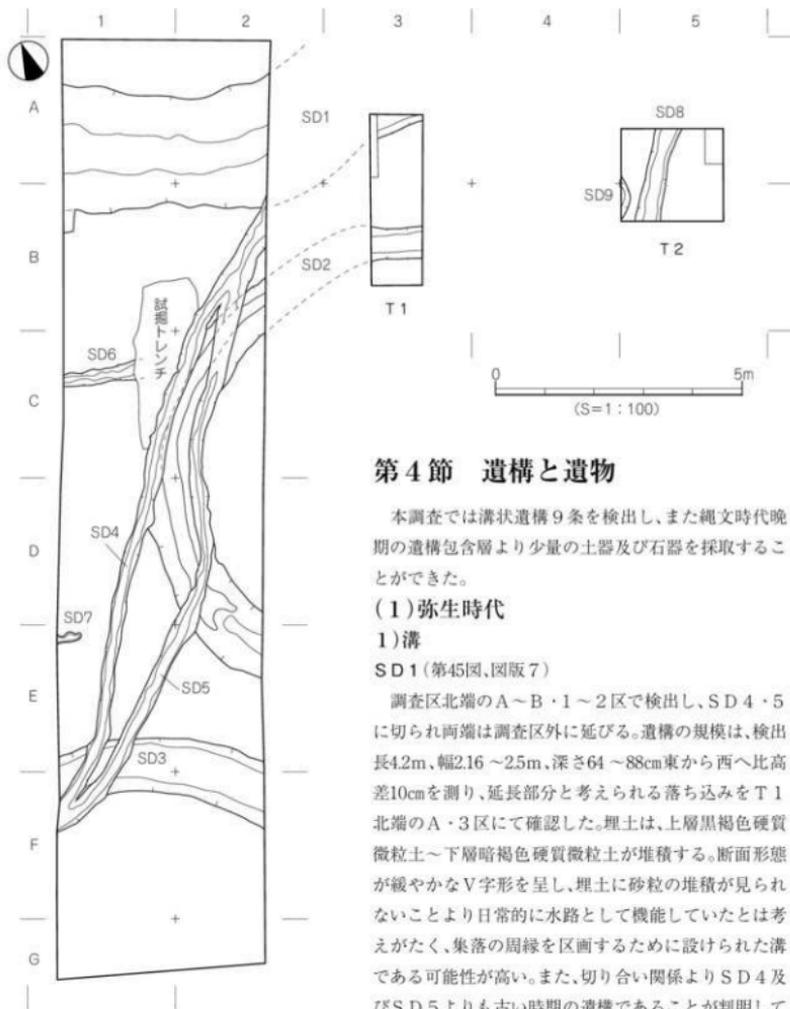
第Ⅷ層 暗紫灰色微～細砂：層厚4～8cmを測る。



第42図 調査地位図



第43図 東壁・西壁土層図



第44図 遺構配置図

## 第4節 遺構と遺物

本調査では溝状遺構9条を検出し、また縄文時代晩期の遺構包含層より少量の土器及び石器を採取することができた。

### (1) 弥生時代

#### 1) 溝

##### SD1 (第45図、図版7)

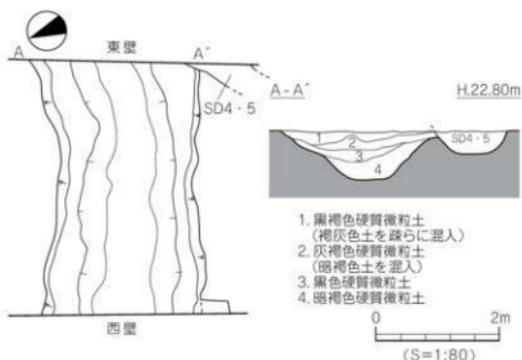
調査区北端のA～B・1～2区で検出し、SD4・5に切れ両端は調査区外に延びる。遺構の規模は、検出長4.2m、幅2.16～2.5m、深さ64～88cm東から西へ北高差10cmを測り、延長部分と考えられる落ち込みをT1北端のA・3区にて確認した。埋土は、上層黒褐色硬質微粒土～下層暗褐色硬質微粒土が堆積する。断面形態が緩やかなV字形を呈し、埋土に砂粒の堆積が見られないことより日常的に水路として機能していたとは考えがたく、集落の周縁を区画するために設けられた溝である可能性が高い。また、切り合い関係よりSD4及びSD5よりも古い時期の遺構であることが判明している。内部より弥生土器の破片が出土した。また、本遺構が縄文時代晩期の包含層を掘り込むことから縄文土器の破片も出土している。

#### 出土遺物(第46図、図版8)

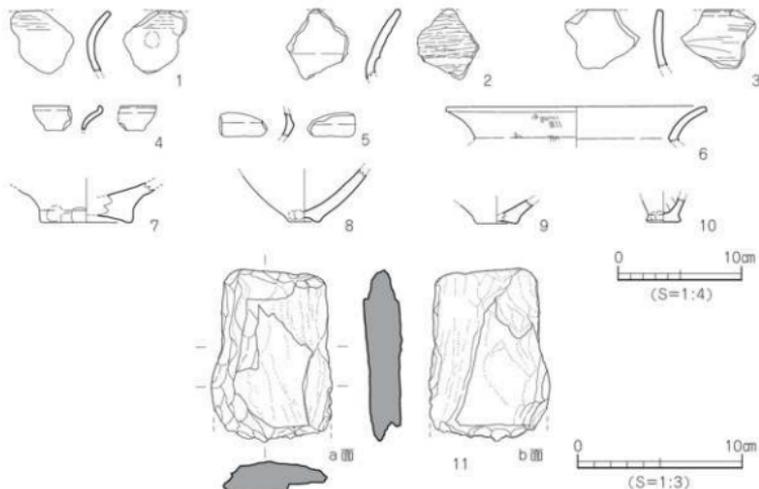
1～5は包含層から混入した縄文土器である。1～3は深鉢の口縁部で、1は外反する口縁部に端部は平らな面をなし、外面に条痕、内面にヨコナデ調整が施される。2は外反する口縁端部は丸く納まり、外面にミガキ、内面にヨコナデ調整が施される。3はやや内傾気味の口縁部の外面は条痕、内面はナデ

調整が施される。4・5は浅鉢で、4は外反した口縁端部が上方に屈曲する。5は逆「く」字状に屈曲する胴部をもつ。6～10は弥生土器である。6は甕で、外反する口縁部の端部は平らな面をなす。7は壺で、上げ底の底部付近は括れる。8～10は鉢で、8は上げ底、9は僅かに上げ底である。10は平底の底部付近に括れをもつ。11は打製石鏃である。短冊形を呈しており、側縁部が僅かに括れる。b面には平坦面が多く、側縁や基部は表面を強く打ち欠いている。刃部はb面を中心に欠失している。残存長10.45cm、幅7.3cm、厚み2.2cm、重さ233.55gを測る。石材は緑色片岩裂である。

時期：出土遺物より、弥生時代後期後葉に属する。



第45図 SD 1測量図



第46図 SD 1出土遺物実測図

SD 3 (第47図)

調査区南部のE～F・1～2区で検出し、SD 4・5に切られ、北側に弧を描きながら調査区の東西に延びる。遺構の規模は、検出長4.3m、幅1.1～1.4m、深さ31～40cm東から西へ比高差6cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は、上層が黒褐色硬質微粒土（褐灰色土を疎らに混入）、下層が暗灰色硬質微

粒土(暗褐色土混入)で、砂粒の堆積は認められない。遺物は、弥生土器の破片が出土した。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD1に類似することより、弥生時代後期後葉とする。

### SD8

調査区の東側に設定したT2のA~B・5区で検出し、東側にやや湾曲気味で両端は調査区外に延びる。遺構の規模は、検出長1.96m、幅40~50cm、深さ11~19cm南から北へ比高差10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は、暗~黒褐色硬質微粒土が堆積する。

#### 出土遺物(第48図)

12は縄文土器の浅鉢で、混入品で、口縁端部が上方に屈曲する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD1に類似することより、弥生時代後期後葉とする。

### SD9

T2内及び、A~B・5区で一部検出した。その他の検出遺構が全て溝状遺構であることから便宜的に溝状遺構と判断した。遺構の規模は検出長0.86m、幅18cm、深さ13~15cmを測る。埋土は、暗~黒褐色硬質微粒土が堆積する。遺物は、遺構が縄文時代の包含層を掘り込むことより、縄文土器の破片が出土した。

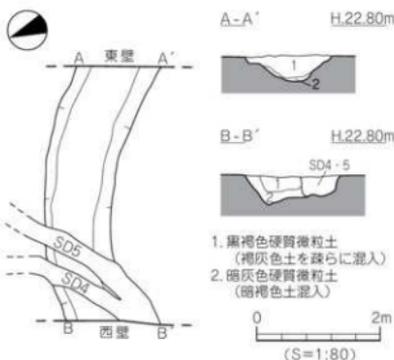
時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD1に類似することより、弥生時代後期後葉とする。

## (2) 古墳時代

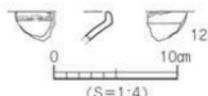
### 1) 溝

#### SD2(第49図)

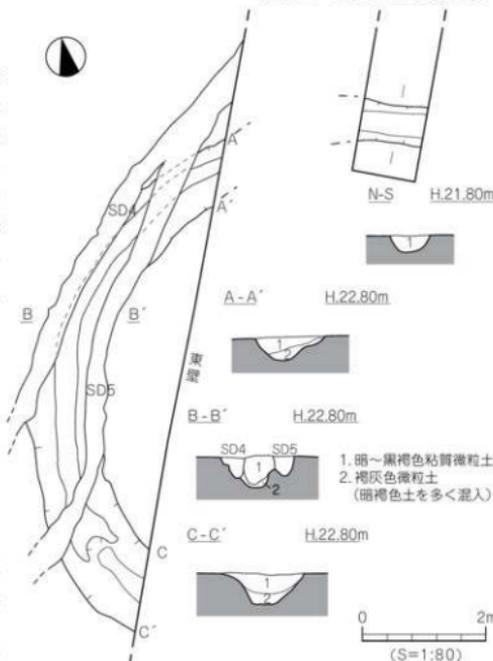
調査区中央部のB~E・1~2区で検出し、SD4・5に切られ、本遺構の延長部分と考えられる溝をT1南側のB・3区にて確認しており、直



第47図 SD3測量図



第48図 SD8出土遺物実測図



第49図 SD2測量図

径10m程の弧を描きながら東側に延びるものと考えられる。遺構の規模は、検出長8.5m、幅0.9～1.3m、深さ35～51cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は、上層が暗～黒褐色粘質微粒土、下層が褐灰色微粒土中に暗褐色土を多く混入するもので、砂粒の堆積は認められない。遺物は土師器、須恵器の小片が僅かに出土した。

#### 出土遺物(第50図)

13・14は土師器の椀である。13は内湾し、口縁端部は丸く納まる。14は内傾気味に口縁部が立ち上がる。15は須恵器の高杯の脚部で、脚裾部は屈曲をもち下方に延びる。

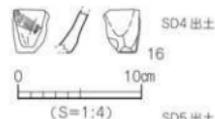
時期:出土した須恵器の特徴から、古墳時代中期とする。



第50図 SD2出土遺物実測図

#### SD4・5

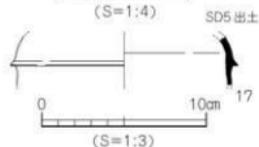
調査区のB～F・1～2区で検出され、中央で二股に分かれ、検出範囲内の両端で一本に合流し、両端は調査区外に延びる。遺構の規模は、検出長が直線距離で約13.7m、幅が合流部で43～63cm、SD4で20～46cm、SD5で23～35cm、深さ21～39cmを測る。埋土は、上層が暗褐灰色硬質微粒土、中層が褐灰色硬質微粒土(暗褐色土を多く混入)、下層が暗褐色硬質微粒土で、分岐・合流部位に関わらず同様の堆積状況を示す。SD1・SD2・SD3と切り合い関係を有し、それらの遺構よりも新しい時期に掘り込まれたことが判明している。



#### 出土遺物(第51図)

16は弥生土器の甕である。底部にシボリ痕が施されている。17は須恵器の坏蓋である。

時期:出土した須恵器の特徴から、古墳時代中期末とする。



第51図 SD4・5出土遺物実測図

#### SD6

試掘トレンチの西側のC・1区で検出し掘り込みが浅く、トレンチよりも東側の部分に関しては存在が確認できていない。遺構の規模は検出長1.5m、幅22～39cm、深さ1～3cmを測る。埋土は、暗褐灰色硬質微粒土が堆積する。遺物の出土はない。

時期:時期決定しうる遺物に乏しく埋土がSD4・5に類似することより古墳時代中期末とする。

#### SD7

調査区のE・1区西壁沿いに東端のみを検出し、遺構の規模は、検出長50cm、幅12～19cm、深さ12cmを測る。埋土は、暗褐灰色硬質微粒土が堆積する。遺物の出土はない。

時期:時期決定しうる遺物に乏しく埋土がSD4・5に類似することより古墳時代中期末とする。

## 第5節 小 結

今回の調査では、弥生時代後期後葉から古墳時代に属する溝状遺構を9条検出し、さらに縄文時代晩期中葉の遺物包含層を確認することができた。遺構の埋土内からの出土遺物が少なく、時期決定が困難であるが、SD1～3は弥生時代後期終末に属する可能性が高く、またSD4及びSD5は古墳時代中期末から後期に属する可能性が高い。検出した遺構の中でも特にSD1は溝幅が広く、深く掘られており、集落や丘陵等の周縁を区画していた可能性が高く、全容の解明が期待される。また今回、縄文時代晩期中葉の土器や石器を含む土層を確認し、小範囲ながら遺物を採取できたことは大きな成果であり、今後近隣における発掘調査の基礎資料として大いに貢献できるものである。

表17 SD1出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
1	深鉢	残高 48	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色・灰白色	灰色	石・長(1)○		8
2	深鉢	残高 57	ケズリ	ヨコナデ	淡褐色・暗褐色	暗褐色	石・長(1)全○		8
3	深鉢	残高 47	ヨコナデ・ナズリ	ヨコナデ	淡褐色	黒色	石・長(1)全○		8
4	浅鉢	残高 20	ナデ・ミガキ	ナデ	黒褐色・褐色	黒褐色	石・長(1)砂○		8
5	浅鉢	残高 19	ナデ・ケズリ	ナデ	茶褐色	黒褐色	石(1)全○		8
6	壺	口径(208) 残高29	ハケ→ヨコナデ	マメツ	浅黄褐色	浅黄褐色	石・長(1~3)		
7	密	底径(72) 残高32	ヨコナデ・ナデ	マメツ	褐色	褐色	石・長(1~2)○		
8	鉢	底径(24) 残高43	マメツ	マメツ	浅黄褐色	浅黄褐色	石・長(1~2)	黒斑	
9	鉢	底径(31) 残高19	マメツ	マメツ	褐色・黒灰色	淡黄色	石(1~3)△		
10	鉢	底径 25 残高20	ナデ	ナデ	黒褐色	浅黄褐色	石(1~3)○		

表18 SD1出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
11	石 敷	一 部	緑色片岩	10.45	7.3	2.2	233.55		8

表20 SD8出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
12	鉢	残高 24	ナデ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	石・長(1~2)○		

表19 SD2出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
13	甕	口径(118) 残高27	マメツ	マメツ	暗灰褐色	褐色	砂○		
14	甕	残高 27	ナデ	ナデ	褐色	褐色	石・長(1~2)○		
15	高 杯	底径(86) 残高12	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	赤○		

表21 SD4・5出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
16	壺	残高 35	ナデ	ハケ	淡黄色	淡黄色	石・長(1~3)全○	SD4	
17	坏 蓋	残高 30	ナデ・回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	赤○	SD5	

# 第7章 東石井遺跡3次調査

## 第1節 調査の経緯

### 1. 調査に至る経緯

2005（平成17年）11月、竹政文夫氏より、松山市東石井5丁目295番外における宅地開発工事に伴い、当該地における埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No118東山縄文・弥生遺物包含地 東山古墳群」内にあたる。申請地の西には、弥生時代後期の堅穴建物や土坑墓を検出した西石井荒神堂遺跡1・2次調査があり、南には、古墳時代後期の堅穴建物、古代の溝や中世の土器が出土した石井幼稚園遺跡1・2次調査がある。南東には、弥生時代前期の溝を検出した南中学校構内遺跡があり、東石井遺跡、西石井遺跡1～3次調査では、弥生時代後期から中世にかけての集落関連遺構や遺物が数多く確認されている。

このことから、申請地周辺には弥生時代から中世にかけての集落の存在が予想されるため、申請者と文化財課は協議を重ね、遺跡の有無を確認するために、試掘調査を実施することとなった。試掘調査は2005（平成17年）11月28日に実施され、土坑や柱穴などの遺構を検出したほか、包含層からは遺物が出土した。この結果を受け、申請者と文化財課、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者が協議を重ね宅地開発工事に伴い消失する遺跡に対して本格調査を実施することとなった。調査は埋文センターが主体となり2006（平成18年）1月23日より同年2月9日の間に野外調査を実施した。

### 2. 調査の経緯

発掘調査に先立ち、調査地の安全対策を施し、調査区を設定した。1月23日、重機によりⅢ区、Ⅱ区、Ⅰ区の順で掘削を行う。掘削は、Ⅳ層（地山）上面まで行った。26日、作業員を動員し調査区の精査を行った。調査地に隣接して仮設テントと仮設トイレを設置し、発掘機材の搬入を行った。Ⅳ層（地山）上面にて精査し遺構検出を行い、柱穴を確認する。出土遺物の測量、遺構測量後、写真撮影を行う。地山上面での遺構検出により溝を1条検出した。遺構完掘後測量及び写真撮影を行う。Ⅰ区では、11.5×11.5×15.2mの三角形の調査区を設定した。地山上面での遺構検出により、土坑・溝・柱穴・鋤跡を検出した。検出状況の写真撮影後遺構の掘削を行う。土坑より遺物が出土し測量を行い完掘状況の写真撮影を行う。遺構完掘状況の写真撮影と測量を行い、道具や備品を撤去し発掘調査野外調査を終了する。

### 3. 調査組織（平成17年4月1日時点）

財団法人 松山市生涯学習振興財団	埋蔵文化財センター 所長	丹生谷博一
理事長 中村 時広	次長兼管理係長	重松 幹雄
事務局 局長 一色 巧	次長兼調査係長	西尾 幸則
次長 石丸 允良		高尾 和長（調査担当）
次長 丹生谷博一		加島 次郎（調査担当）
調査監 杉田 久憲		

## 第2節 層位 (第53図)

調査地は、松山平野南部、石手川の支流である小野川と重信川の支流である内川の氾濫に起因する扇状地上に立地し、標高は20.90mを測る。調査以前は水田として土地利用されていた。

I層 : 灰色(N6/)土、水田耕作土である。調査区全域で層厚20~26cmを測る。

II-①層: 褐灰色(10YR5/1)土、水田耕作土である。Ⅲ区を除く全域で層厚3~10cmを測る。

II-②層: 明赤褐色(2.5YR5/8)土、水田耕作土にII-①層が混じる。Ⅲ区を除く全域で層厚2~8cmを測る。

Ⅲ層 : 明黄褐色(10YR6/6)土である。調査区全域で層厚2~12cmを測る。

Ⅳ層 : にぶい黄褐色(10YR5/4)土に黒褐色(10YR3/2)土、粒混じりである。調査区全域で層厚1~7cmを測る。Ⅳ層上面が遺構検出面となる。

Ⅴ層 : にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土である。I区の南壁深堀トレンチとⅡ区北壁トレンチで層厚6~40cmを測る。

Ⅵ-①層: 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土で、層厚4~16cmを測る。

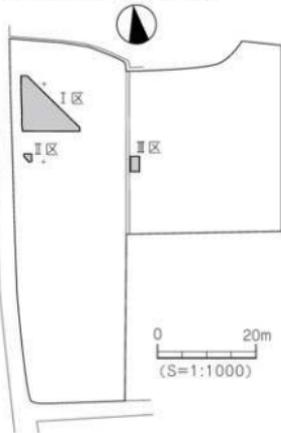
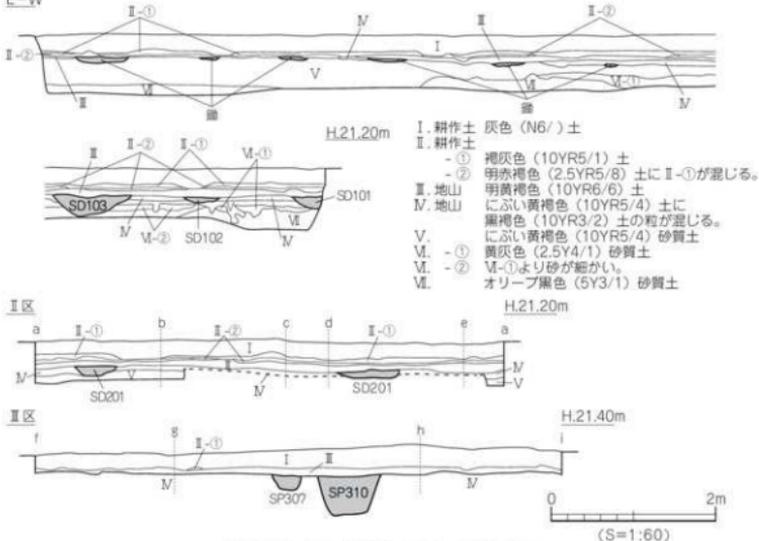
Ⅵ-②層: Ⅵ-①層より砂が細かく、層厚5~8cmを測る。

Ⅶ層 : オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土で、層厚2~17cmを測る。

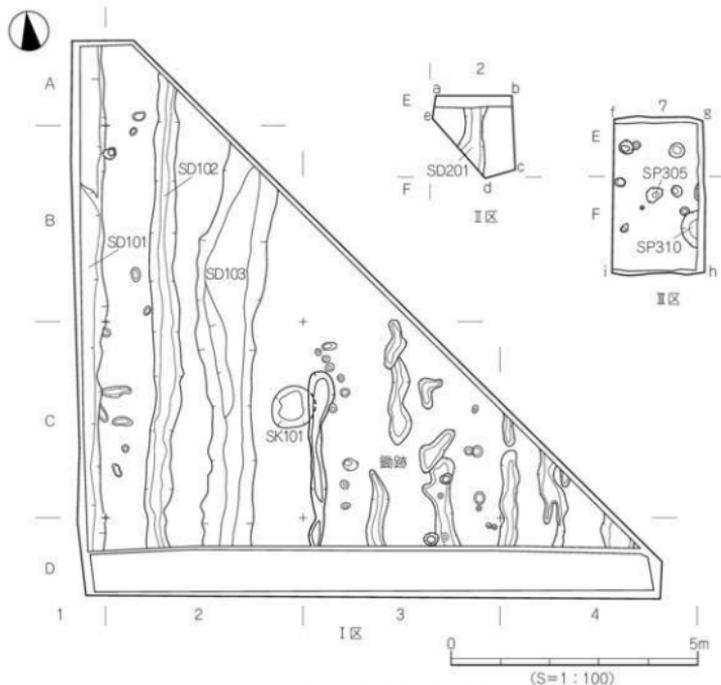
※Ⅵ・Ⅶ層は、I区南西トレンチで検出した。

I区・南壁

E-W



第53図 I区(南壁)・Ⅱ区・Ⅲ区土層図



第54図 I・II区遺構配置図

### 第3節 遺構と遺物

検出した主な遺構は、土坑1基、溝3条、柱穴43基、鋤跡10条である。

#### (1) 弥生時代

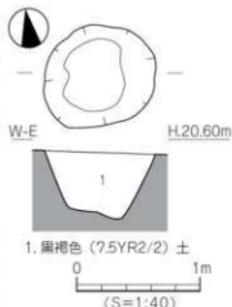
##### 1) 土坑

##### SK101 (第55図、図版9)

I区中央部のC・2～3区に位置し、鋤跡に切られる。平面形態は円形である。規模は長径0.90m、短径0.83m、深さ52cmを測る。断面形態は「U」字状である。埋土は黒褐色土で硬く締りがある。遺物は弥生土器が出土し、器種は甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高環形土器である。出土状況は、高環形土器の坏部片と柱部が土坑上層より出土した。下層と中層からも遺物は出土している。

##### 出土遺物 (第56図、図版10)

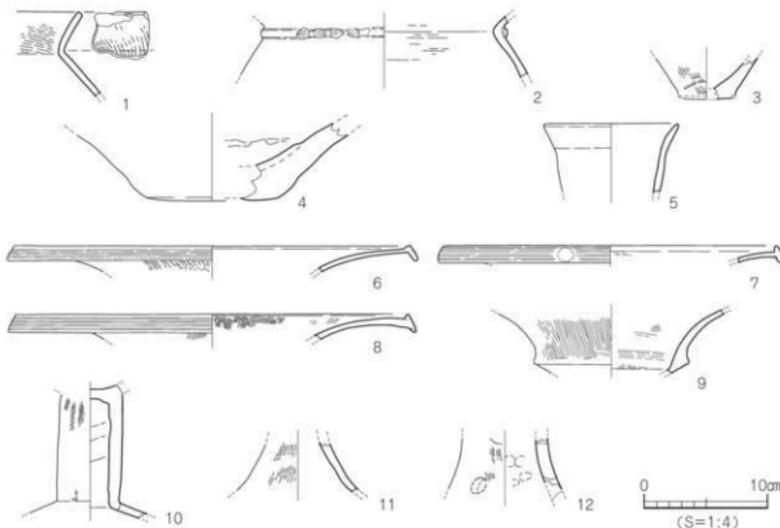
1～12は弥生土器である。1～3は甕で1・2は「く」字状の口縁部に1は端部が平らな面をなし、外面に刷毛目調整が施され、内面は刷毛目調整が施される。2は頸部の貼付凸帯に布目圧痕がみられる。3は平底の底部で、外面に刷毛目調整、内面にナデ調整が施される。4は壺の底



第55図 SK101測量図

部で、平底の底部から外反して立ち上がる。5は鉢で、緩やかに屈曲する口縁部をもち、内外面にナデ調整が施される。6～12は高坏である。6は大きく外反する口縁部に端部に下方方に拡張され端面に3条の沈線をもち、外面に刷毛目調整後のナデ調整、端部付近に横ナデ調整が施される。7・8は口縁端部に4条の沈線をもつ。7は口縁端部に円形浮文をもち、内外面に刷毛目調整後のナデ調整が施される。8は内外面に刷毛目調整、内面に刷毛目調整後のミガキ調整が施される。9は大きく外反する口縁部内外面に刷毛目調整が施される。10～12は脚部であり、10は脚部外面に刷毛目調整、内面にナデ調整が施される。11・12は柱部から裾部へかけ緩やかに外反しており、内面にナデ調整、外面に刷毛目調整が施される。12は脚部に凹孔が施される。

時期: 出土した高坏形土器の形態から、弥生時代後期後葉とする。



第56図 SK 101出土遺物実測図

## (2) 中世

### 1) 溝

#### SD101

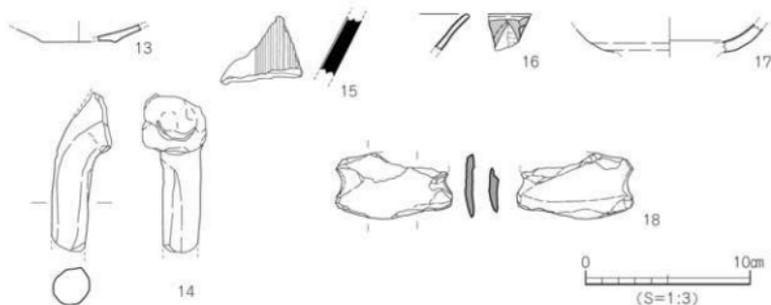
I区西壁のA～D・1～2区に位置し、東側の方を検出した。北・南・西側は調査区外に延びる。主軸はN-7°-Eを指向し、直線的に延びる。規模は検出長10.4m、幅(0.3～0.5m)、深さ14～32cm、南から北に比高差16cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は褐灰色(10YR5/1)土に黒褐色(7.5YR3/1)土、粒混じりである。遺物は土師器・須恵器・石甕丁・鉄滓が出土した。

出土遺物(第57図、図版10)

13は土師器の椀で、底部に断面三角形の高台を有する。14は土釜の脚部で下方方に延び断面形は円形を呈する。15は須恵器の播鉢で、上下方向に櫛掻き沈線が施される。16・17は磁器碗である。16は青磁で、外反する口縁外面に錆による蓮弁が施され、17は底部付近で両面に施軸が見られる。18は混入品で

ある。磨製の石庖丁で、両端に抉れをもち両刃である。石材はやや反っており、背部の一部を欠失している。残存長7.0cm、幅4.0cm、厚さ0.6cm、重さ23.68gを測る。材質は緑色片岩製である。

時期：出土した磁器の特徴から13世紀前半とする。



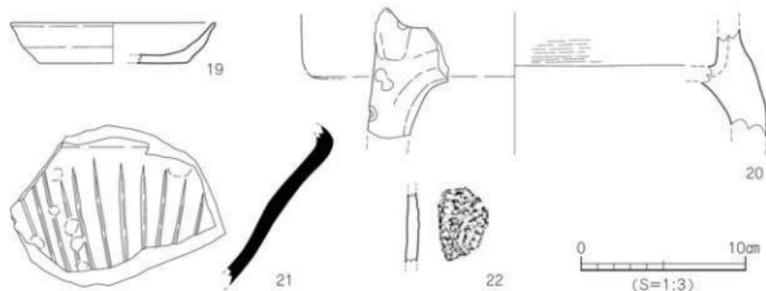
第57図 SD101出土遺物実測図

#### SD102

I区西部のA～D・2区とII区のE・2区に位置する。北側は調査区外に延び、南側はII区SD201に続くと思われる。主軸はN-5°-Eを指向し、直線的に延びる。規模はI区検出長9.62m、幅0.34～0.62m、深さ3～11cm、南から北へ6cmの比高差を測る。II区検出長1.44m、幅0.34～0.55m、深さ7～11cm、南から北へ2cmの比高差を測る。I区からII区の検出全長は17.3mを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は褐灰色(5YR5/1)土に黒褐色(7.5YR3/2)土、粒混じりである。遺物は土師器・須恵器が出土した。時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD101に類似することから13世紀前半とする。

#### SD103

I区西部のB～D・2区に位置する。北・南側は調査区外に延びる。主軸はN-12°-Eを指向する。規模は検出長8.3m、幅0.44～1.45m、深さ21～32cm、南から北へ7cmの比高差を測る。断面形態は「U」字状である。埋土は4層に分かれ、①褐灰色(5YR5/1)土に黒褐色(7.5YR3/2)土、粒混じり、②にぶい褐色(7.5YR5/4)土に褐灰色(5YR5/1)土混じり、③褐灰色(5YR5/1)砂質土ににぶい褐色(7.5YR5/4)土混じり、④黒褐色(5YR3/1)砂質土である。遺物は土師器・須恵器・弥生土器が出土した。



第58図 SD103出土遺物実測図

## 出土遺物(第58図、図版10)

19は土師器の皿で、内外面に横ナデ調整が施される。20の脚部は三足脚付土釜の脚部と推測され、ナデ調整が施される。21は須恵器の播鉢で、内面にヘラ状工具により1本ずつ放射線状に沈線を施し、口縁部付近外面に回転ナデ調整が施されるが焼成不良のため軟質である。22は土師質の胴部片で、外面に格子タタキ、内面にナデ調整が施されている。

時期: 時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がS D101に類似することから13世紀前半とする。

## 2) 柱穴

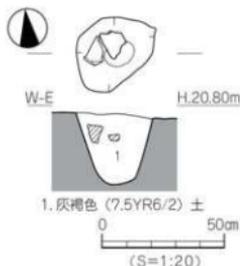
## SP305(第59図)

Ⅲ区中央部のF・7区に位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径37cm、短径26cm、深さ30cmを測る。断面形態は「U」字状である。埋土は灰褐色(7.5YR6/2)土である。出土遺物は石が上部より2点出土した。石は火を受けて黒く変色して割れている。割れた破片が出土していないことから、SP310と同様に他の場所で使用した石を廃棄したと考えられる。

## 出土遺物(第59図)

23は花崗岩の円礫で表面が煤け、内面は割れる。24は緑色片岩で表面が煤けている。23・24共に加工痕はない。

時期: 時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から中世としか判らない。



第59図 SP305測量測図・出土遺物実測図

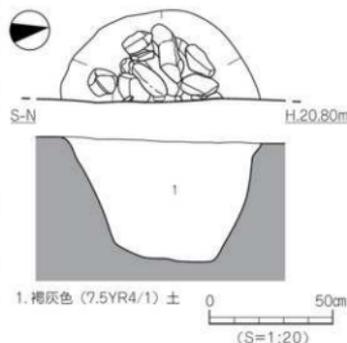
## SP310(第60図)

Ⅲ区東部のF・7区に位置し、東側は調査区外に続く。平面形態は円形である。規模は直径81cm、深さ50cmを測る。断面形態はU字状である。埋土は褐灰色(7.5YR4/1)土である。出土遺物は羽釜の口縁部と石が下部から11点、炭化物が石の周囲から出土した。石は火を受けて割れているもの、黒く変色しているもの、炭化物が付着しているものがある。出土した石は火を受け割れている。しかし、割れた破片全てが柱穴内から出土していないことから、他の場所で使用した石を柱穴内に廃棄したと考えられる。

## 出土遺物(第61図、図版10)

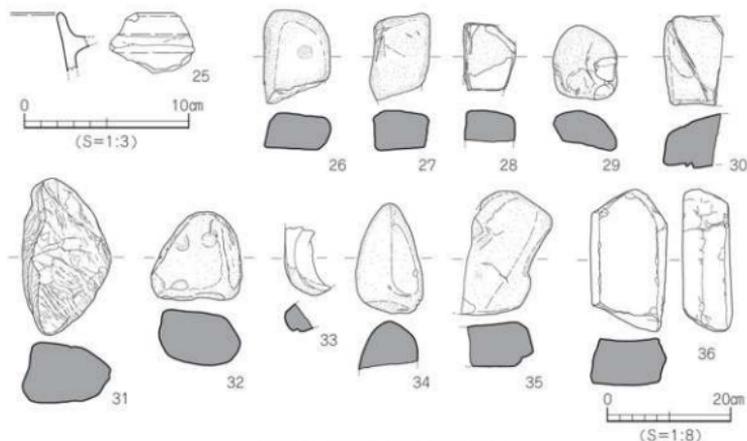
25は瓦質の羽釜の口縁部で、内傾する口縁部に外方向に延びる鋸をもち、外面に横ナデ調整が施される。26～35は支石で、27～30・35には人為的な割れ、33・34は受熱による割れがみられる。30・32～36には受熱による煤けがみられる。36は転用品で、4面に面取りが施されている。

時期: 出土した土器の特徴から14世紀代とする。



第60図 SP310測量測図

遺構と遺物



第61図 S P 310出土遺物実測図

### (3) 近世

鋤跡10条を検出した。

I区中央部から東部に位置し、南北方向のN-0°-E~N-11°-Eを指向する。規模は検出長0.63~3.6m、幅0.1~0.55m、深さ2~4cmを測る。断面形態はレンズ状、埋土は黄灰色(2.5Y5/1)土である。遺物は弥生土器、土師器の小片が僅かに出土した。

時期:時期決定しうる遺物が乏しく、埋土から近世としか分らない。

## 第4節 小 結

本調査では、弥生時代から近世までの遺構と遺物を検出した。検出した遺構には、弥生時代後期の土坑と、中世の溝、柱穴がある。遺物では、高坏形土器・石庖丁・支石・鉄滓が上げられる。旧地形は、東から西に緩やかに傾斜し、西側は砂層が隆起する不安定な堆積状況で、地形の安定した調査区東側で遺跡が広がる可能性が高い。

弥生時代は、S K 101から弥生時代後期の土器が出土し、土坑と同じ黒褐色土の埋土を持つ柱穴をI区東部から20基検出した。中世では、I区から溝3条、II区から溝1条、III区から柱穴11基を検出した。

出土した高坏形土器は、S K 101内から7個体分が出土し、1つの土坑としては出土量が多い。石庖丁は、小型品で両端抉り、主に刃部のみに研磨が施され、弥生時代後期末の特徴を持つ。中世では、S P 310から出土した石に受熱による破損、変色、炭化物の付着がみられ、土鍋や三足がつかない羽釜の使用時に、支石として用途の可能性を示唆するもので、類例は松山市樟味に所在する樟味遺跡2次調査がある。ここでは、支石が溝から出土し、本例とは出土遺構に相違点もあるが、出土した支石2点は、受熱による変色と炭化物の付着が報告されており、本例を考察するうえで興味深い所見である。鉄滓はSD101北部から1点出土したことより、周辺に鉄製作にかかわる遺跡が存在する可能性が高い。

今回の調査により、東石井遺跡3次調査が弥生時代後期から中・近世にかけての複合遺跡であることが判明した。また、弥生時代後期から中世の遺跡が西石井遺跡から荒神堂遺跡、東石井遺跡3次調査までの北側に800m大きく広がることが明らかになった。今後の調査と整理によって集落関連遺構の広がりを知る手がかりが得られるものと期待される。

表 22 SK 101 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
1	甕	残高 7.0	ハケ(6本/cm)	ハケ(5本/cm)	にぶい黄褐色	浅黄褐色	石・長(1-2) ○		
2	甕	残高 5.2	マメツ	ハケ	褐色	灰黄色	石・長(1-2) ○		10
3	甕	底径(4.6) 残高 3.4	ハケ(6本/cm)	ナデ	褐色	にぶい褐色	石・長(1-3) ○		
4	壺	底径(11.0) 残高 6.4	マメツ	マメツ	赤褐色	褐色	石・長(1-3) ○		
5	鉢	口径(10.6) 残高 5.6	ナデ	ナデ	褐色	褐色	石・長(1-2) ○		
6	高坏	口径(31.6) 残高 2.1	ハケ(7本/cm)→ナデ	マメツ	淡褐色	灰白色	石・長(1-2) ○		図16
7	高坏	口径(27.0) 残高 1.4	ハケ(8本/cm)→ナデ	ハケ→ナデ	褐色・淡黄色	淡黄色	石・長(1-3) 全 ○		10
8	高坏	口径(31.6) 残高 2.1	コナテ→ハケ(8本/cm)	コナテ→ハケ(8本/cm)	にぶい褐色	褐色	石・長(1-2) 全 ○		
9	高坏	残高 5.2	ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(5-9本/cm)	褐色	にぶい褐色	石・長(1-2) 全 ○		
10	高坏	残高 10.9	ハケ(12本/cm)	ナデ	褐色・淡黄色	褐色	石・長(1) 全 ○		10
11	高坏	残高 4.2	ハケ(6本/cm)→ナデ	ナデ	褐色	褐色	石・長(1-3) ○		
12	高坏	残高 4.2	ハケ(7本/cm)	ナデ(指調直)	褐色	褐色	石・長(1-2) 全 ○		

表 23 S D101 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
13	埴	底径(6.0) 残高 1.0	マメツ	マメツ	灰白色	明淡黄色	長(1) ○		
14	土釜	残高 9.7	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長(1-4) ○		10
15	指鉢	残高 3.7	回転コナテ	ナデ	灰色	灰白色	審 ○		10
16	碗	残高 2.2	埴輪	埴輪	灰白色	明緑灰色	審 ○		10
17	碗	残高 1.7	埴輪	埴輪	灰白色	明緑灰色	審 ○		

表 24 SD 101 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
18	石座丁	3/4	緑色片岩	7.0	4.0	0.6	23.68		10

表 25 SD 103 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
19	皿	口径(12.2) 底径(2.4) 残高(9.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長(1) ○		
20	土釜	底径(24.0) 残高 8.0	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石・長(1-3) ○		図16
21	指鉢	残高 9.7	ヨコナデ	ナデ(指調直)	灰白色・浅黄褐色	灰白色	審 ○		10
22	不明	残高 4.4	タタキ	ナデ	浅黄色	にぶい褐色	石・長(1) ○		

表 26 SP 305 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
23	支石 <td>一部</td> <td>花崗岩</td> <td>10.7</td> <td>10.0</td> <td>1.4</td> <td>204.31</td> <td></td> <td></td>	一部	花崗岩	10.7	10.0	1.4	204.31		
24	支石 <td>一部</td> <td>緑色片岩</td> <td>10.7</td> <td>6.4</td> <td>1.8</td> <td>159.8</td> <td></td> <td></td>	一部	緑色片岩	10.7	6.4	1.8	159.8		

表 27 SP 310 出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
25	羽釜	残高 3.6	ヨコナデ	マメツ	灰色	灰色	石・長(1-3) ○		10

表 28 SP 310 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
26	支石 <td>一部欠失</td> <td>砂岩</td> <td>15.1</td> <td>10.8</td> <td>6.1</td> <td>1610.67</td> <td></td> <td></td>	一部欠失	砂岩	15.1	10.8	6.1	1610.67		
27	支石 <td>一部欠失</td> <td>砂岩</td> <td>14.1</td> <td>9.6</td> <td>6.5</td> <td>1424.64</td> <td>人為の割れ</td> <td></td>	一部欠失	砂岩	14.1	9.6	6.5	1424.64	人為の割れ	
28	支石 <td>一部欠失</td> <td>砂岩</td> <td>11.0</td> <td>8.4</td> <td>5.4</td> <td>823.7</td> <td>人為の割れ</td> <td></td>	一部欠失	砂岩	11.0	8.4	5.4	823.7	人為の割れ	
29	支石 <td>ほぼ定存</td> <td>砂岩</td> <td>12.1</td> <td>10.1</td> <td>6.2</td> <td>1126.27</td> <td>人為の割れ</td> <td></td>	ほぼ定存	砂岩	12.1	10.1	6.2	1126.27	人為の割れ	
30	支石 <td>一部欠失</td> <td>砂岩</td> <td>14.5</td> <td>9.6</td> <td>8.9</td> <td>1894.77</td> <td>人為の割れ</td> <td></td>	一部欠失	砂岩	14.5	9.6	8.9	1894.77	人為の割れ	
31	支石 <td>完 存</td> <td>流紋岩</td> <td>25.6</td> <td>14.2</td> <td>11.2</td> <td>5100.00</td> <td></td> <td></td>	完 存	流紋岩	25.6	14.2	11.2	5100.00		
32	支石 <td>完 存</td> <td>流紋岩</td> <td>14.1</td> <td>14.6</td> <td>8.7</td> <td>2833.52</td> <td></td> <td></td>	完 存	流紋岩	14.1	14.6	8.7	2833.52		
33	支石 <td>一部残存</td> <td>砂岩</td> <td>11.1</td> <td>7.5</td> <td>4.6</td> <td>276.24</td> <td>受熱による割れ</td> <td></td>	一部残存	砂岩	11.1	7.5	4.6	276.24	受熱による割れ	
34	支石 <td>一部欠失</td> <td>砂岩</td> <td>17.8</td> <td>10.8</td> <td>8.1</td> <td>1716.48</td> <td>受熱による割れ</td> <td></td>	一部欠失	砂岩	17.8	10.8	8.1	1716.48	受熱による割れ	
35	支石 <td>一部欠失</td> <td>砂岩</td> <td>20.2</td> <td>12.8</td> <td>7.3</td> <td>2853.03</td> <td>人為の割れ</td> <td></td>	一部欠失	砂岩	20.2	12.8	7.3	2853.03	人為の割れ	
36	不明	一部欠失	流紋岩	23.1	12.5	7.3	3700.00	転用品	10

## 第8章 繁成分遺跡

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯

1988（昭和63）年9月22日、今井太郎氏より松山市今在家町272番1における分譲宅地工事に伴い、当該地における埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願が提出されたは申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財埋蔵地「No.125今在家遺物包含地」内にあたる。申請地周辺では、西方400mに弥生時代前期の壺棺墓や古墳時代の建物跡を検出した石井東小学校遺跡がある。

これらのことから、申請地周辺には弥生時代から古墳時代にかけての集落の存在が予想されるため、今井氏と文化教育課は協議を重ね、遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施することとなった。試掘調査は1988（昭和63）年11月24日～26日に実施され、弥生時代後期の遺物包含層を確認した。

この結果を受け、文化教育課と地権者は発掘調査についての協議を行い、松山市今在家町272番1について本格調査を実施することとなった。調査は弥生時代の集落構造の解明と範囲確認を主目的とし、平成元年2月27日～同年5月28日の間に野外調査を実施した。

#### 2. 調査の経緯

2月27日、重機による表土掘削を開始する。3月1日、北側より精査し遺構の確認作業を開始すると同時に第Ⅲ層の掘り下げを開始する。調査事務所となる仮設プレハブを設置する。3月2日、グリッド杭を設置する。3月3日、水準点を設置する。3月11日、測量作業を開始する。3月15日、同時に石敷の広がり確認作業を開始する。3月20日、第Ⅳ層の掘り下げを開始する。4月27日、第Ⅳ層の掘り下げを終了すると同時に第Ⅴ層掘り下げを開始する。5月24日、第Ⅴ層上面までの掘り下げを終了する。5月25日、全体清掃を行い、遺構の完備写真撮影を行う。5月26日、重機により埋め戻しを開始する。5月28日、重機による埋め戻しを終了し、本日に野外調査を終了する。

#### 3. 調査組織

（昭和63年4月1日時点）

松山市教育委員会	教育長	平井 亀雄
	参事	松原 重勝
	教育次長	井手 治己
	教育次長	古本 克
文化教育課	課長	渡部 忠平
	課長補佐	大野 衛治
	第二係長	菅野 治之
	主任	西尾 幸則（調査担当）
		栗田 茂敏（調査担当）
		高尾 和長（調査担当）

（平成元年4月1日時点）

松山市教育委員会	教育長	平井 亀雄
	参事	井手 治己
	教育次長	古本 克
	教育次長	井上 量公
文化教育課	課長	渡部 忠平
	第二係長	西 伸二
	調査係長	西尾 幸則（調査担当）
		栗田 茂敏（調査担当）
		高尾 和長（調査担当）

## 第2節 層位 (第63図)

調査地は、小野川南岸の沖積低地上に立地し、標高約30mを測る。調査前は水田であった。

本調査では、7層の土層を確認した。

第I層: 灰褐色土〔耕作土〕調査区全域で層厚15～25cmを測る。

第II層: 黄灰褐色土〔床土〕調査区全域で層厚5～20cmを測る。

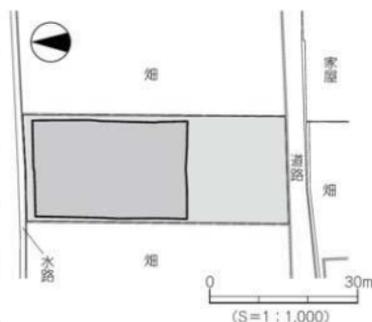
第III層: 黒色土〔包含層〕北東隅を除く全域で層厚5～30cmを測り、弥生土器片が出土する。

第IV層: 暗黄褐色土、調査区全域で層厚15～85cmを測る。

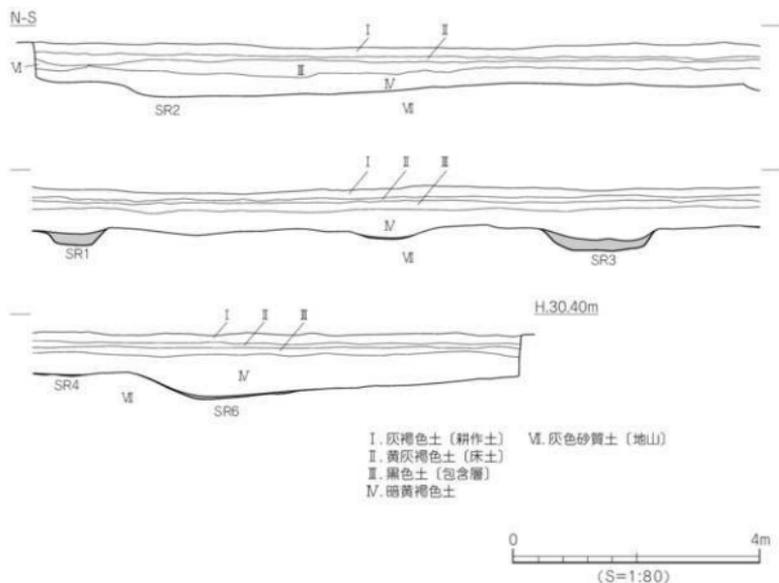
第V層: 暗青灰色細砂〔小礫少含〕自然流路で層厚10～15cmを測る。

第VI層: 黄灰褐色土〔黒色の粒子を含む〕北西隅でのみ層厚10～15cmを測る。

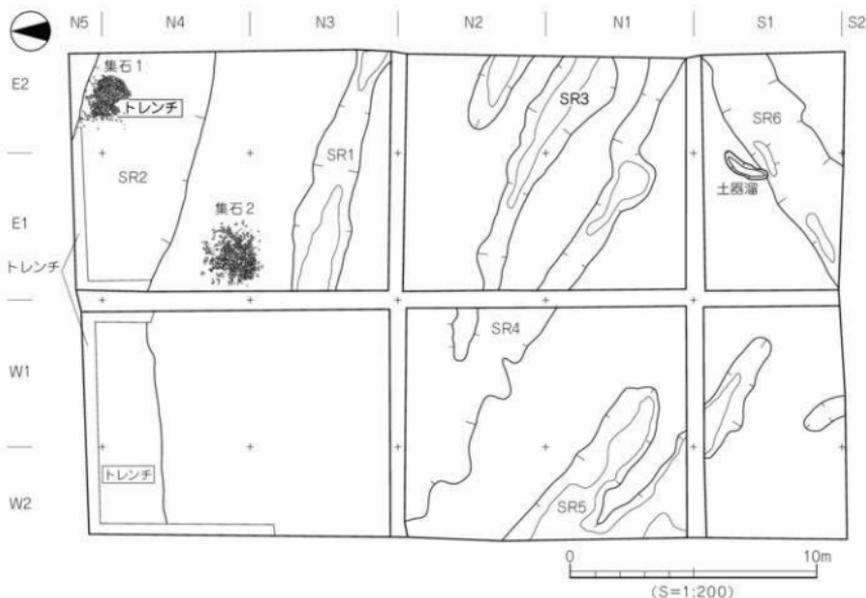
第VII層: 地山〔灰色砂質土〕



第62図 調査地位置図



第63図 東壁土層図



第64図 遺構配置図

### 第3節 遺構と遺物

#### (1) 弥生時代

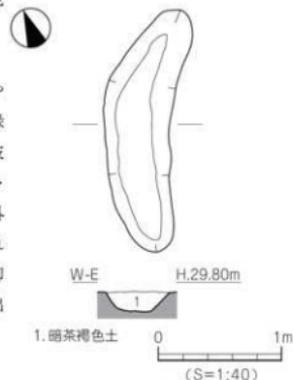
##### 1) 土器溜 (第65図、図版12)

調査区南東部のS1・E1に位置する。平面形態は三日月状で、断面形態は逆台形状である。規模は長径2.0m、短径0.56m、深さ11~16cmを測る。埋土は暗茶褐色土で、遺物は弥生土器が出土した。

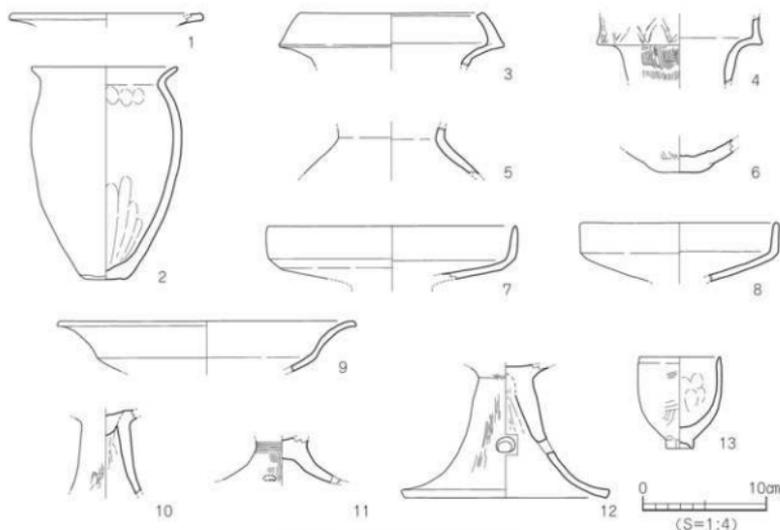
出土遺物 (第66図、図版12)

1~13は弥生土器である。1・2は甕で、2は口縁部が緩やかに「く」字状を呈する。3~6は壺である。3・4は複合口縁壺で、3は口縁拡張部が内湾する。4は拡張部外面に2条の波状文が施される。6は平底の底部である。7~12は高坏で、7・8は口縁部が上方に延びる。9は屈曲部から口縁部は大きく外反する。10~12は脚部で、10は脚部と坏部の接合部は充填される。11は脚上位に4条の沈線、裾部に円孔が施される。12は脚中位に円孔が施される。13はミニチュア土器で底部はつまみ出しによる上げ底である。

時期: 出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後葉とする。



第65図 土器溜測量図



第66図 土器溜出土遺物実測図

## (2) 時代不詳

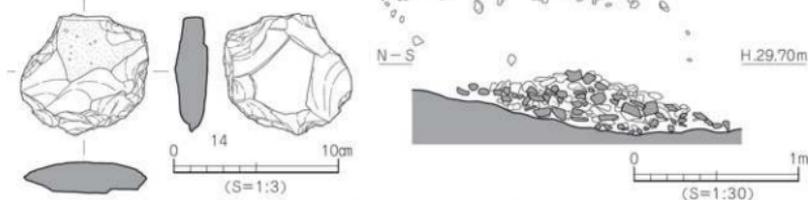
### 1) 自然流路(第64図、図版11)

調査区全域に6条を検出し、南東から北西方向を指向しており、検出長7.5~21m、上場幅0.8~5.0m、深さ7~75cmを測る。溝床は僅かであるが東から西へ傾斜しており、SR1は50cmの比高差をもつ。埋土は上層が第IV層暗黄褐色土、溝床が暗青灰色細砂である。遺物は上層から弥生土器片が出土するが、時期は弥生時代以降としか判らない。

## 2) 集石遺構

### 集石1(第67図、図版11)

調査区北東部N4・5、E2のSR1溝床付近に位置し、拳大~人頭大の円礫が積まれる。平面形態は不整形で、断面形態はレンズ状である。規模は長径2.12m、短径1.0m、堆石高0.34mを



第67図 集石1測量図・出土遺物実測図

測る。遺物は、堆石中から石器1点  
が出土し、弥生時代の可能性をもつ。

**出土遺物(第67図、図版12)**

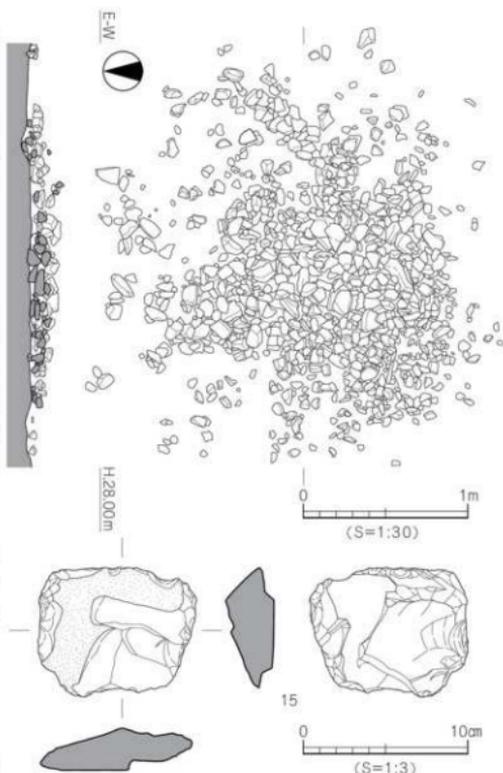
14は土掘具で上部両端が僅かに  
に抉れる。材質は安山岩製で、長さ  
8.4cm、幅7.8cm、厚さ2.1cm、重さ  
131.25gを測る。

**集石2(第68図、図版11)**

調査区北部N3・4、E1に位置し、  
拳大~人頭大の円礫が積まれる。平  
面形態は不整形で、断面形態はレン  
ズ状である。規模は長径1.78m、短  
径1.3m、堆石高0.19mを測る。遺物  
は、堆石中から石器が1点出土し、  
弥生時代の可能性をもつ。

**出土遺物(第68図、図版12)**

15は土掘具で上部両端が僅かに  
に抉れる。材質は砂岩製で、長さ  
7.8cm、幅9.7cm、厚さ2.95cm、重さ  
221.46gを測る。

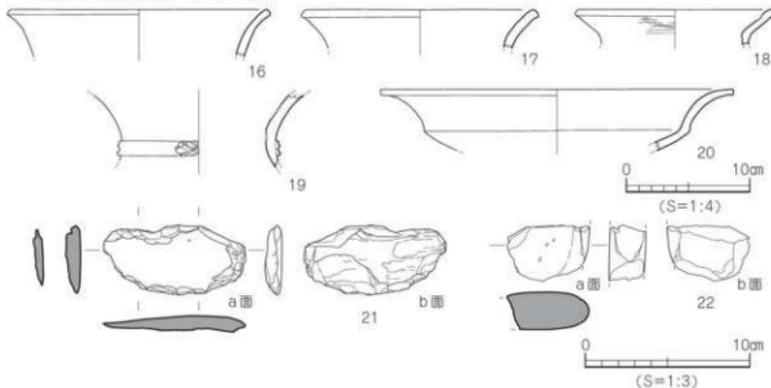


第68図 集石2測量図・出土遺物実測図

**(3) 第Ⅲ層出土遺物**

(第69図、図版12)

16~20は弥生土器である。16  
~18は甕の口縁部で、外反する口



第69図 第Ⅲ層出土遺物実測図

縁部に端部は平らな面をなす。19は壺の頸部付近で、1条の貼付凸帯に斜格子状に刻目文が施される。20は高坏の口縁部で、屈曲部から口縁部は大きく外反する。21は外湾刃半月形石庖丁の未成品で、a面の自然面に打ち欠きによる刃部が付けられ未穿孔の凹みをもつ。材質は緑色片岩製で、長さ8.6cm、幅4.3cm、厚さ0.9cm、重さ44.95gを測る。22は砥石でa面、b面に砥面をもつ。材質は石英粗面岩製で、長さ4.9cm、幅3.3cm、厚さ2.4cm、重さ49.37gを測る。

## 第4節 小 結

本調査によって検出された弥生時代後期の土器溜は、周辺に同時期の集落が展開することを示す資料である。自然流路の埋土は第IV層が堆積していることから、弥生時代以降に埋没した可能性が高く、当地が氾濫により形成された沖積地であることがわかる。集石遺構は人為的に積み上げられたものであるが、遺物は石器が1点ずつしか出土しておらず遺構の性格は不明である。また、集石1はSR1が埋没する以前に構築されているが、明確な時期は不明である。集石遺構から出土した土掘具は側面両端に抉れを持つもので、松山平野では弥生時代前期～中期の集落遺跡からの出土資料がある。これらの調査成果は発掘調査の希薄な今在家地区に於いて当時の景観を復元する為の貴重な資料である。

表 29 SK 1出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
1	甕	口径 (152) 残高 1.0	マメツ	ヨコナデ	橙色	橙色	石・長 (1-2) 金 ○		
2	甕	底径 34 残高 17.5	マメツ	態ナデ	灰白色	灰白色	砂 ②-③ ○		12
3	壺	口径 (145) 残高 4.4	マメツ/ハタリ	ヨコナデ/マメツ	浅黄褐色	灰白色	石 (1-3)・長 (1) ○		赤粒
4	壺	口径 (84) 残高 5.6	ヨコナデ/マメツ	ナデ	橙色	淡褐色	石 (1-4)・長 (1) ○		
5	壺	頸径 (86) 残高 3.9	マメツ	マメツ	浅黄褐色	褐灰色	石・長 (1-3) ○		
6	壺	底径 (40) 残高 2.7	ハタ/ヨコナデ/ナデ	ナデ	オリーブ黒色	灰色	石 (1-3)・長 (1) ○		
7	高坏	口径 (200) 残高 4.3	マメツ	マメツ	橙色	褐色	砂 (1-2) △		
8	高坏	口径 (156) 残高 4.8	マメツ/ハタリ	マメツ/ハタリ	褐色	浅黄褐色	石 (1-3) ○		黒粒
9	高坏	口径 (238) 残高 4.1	マメツ	マメツ	浅黄褐色	灰白色	石 (1-2)・長 (1) ○		赤粒
10	高坏	口径 39 残高 6.9	ナデ/ハタリ/ナデ	ナデ/マメツ	橙色・浅黄褐色	橙色	石 (1-3)・長 (1) ○		
11	高坏	口径 41 残高 3.8	ハタ/ヨコナデ	ナデ	浅黄褐色	灰白色・黒褐色	石 (1-3)・長 (1) ○		
12	高坏	底径 (162) 残高 10.7	マメツ/ハタリ	マメツ/ヨコナデ	橙色・浅黄褐色	浅黄褐色	石 (1-3)・長 (1) ○		12
13	みづ	口径 6.5 器高 7.5 残高 2.1	ナデ (タタキ/ハタ)	ナデ	褐色	浅黄褐色	石 (1-3)・長 (1) ○		12

表 30 集石 1 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法 量			備考	図版	
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			重さ (g)
14	土掘具	ほぼ完存	安山岩	8.4	7.8	2.1	131.25		12

表 31 集石 2 出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法 量			備考	図版	
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			重さ (g)
15	土掘具	ほぼ完存	砂 岩	7.8	9.7	2.95	221.46		12

表 32 グリッド出土遺物観察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
16	甕	口径 (206) 残高 3.9	マメツ	ヨコナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	石 (1-2)・長 (1) ○		
17	甕	口径 (182) 残高 3.2	マメツ	マメツ	にぶい橙色	灰白色	石 (1-3)・長 (1) 金 ○		赤粒
18	甕	口径 (156) 残高 2.9	ヨコナデ/ハタリ	マメツ/ハタリ	明褐色	灰白色	石 (1-3)・長 (1) ○		
19	壺	頸径 (125) 残高 6.0	ナデ	マメツ/ハタリ	褐色灰	白色	石 (1-2)・長 (1) ○		
20	高坏	口径 28.5 残高 5.0	マメツ	マメツ	褐色	明黄褐色	砂 (0.5-1) ○		

表 33 グリッド出土遺物観察表 (石製品)

番号	器種	残存	材質	法 量			備考	図版	
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			重さ (g)
21	石庖丁	-	緑色片岩	8.6	4.3	0.9	44.95		12
22	砥石	一 部	石英粗面岩	4.9	3.3	2.4	49.37		12

# 第9章 今在家遺跡2次調査

## 第1節 調査の経緯

### 1. 調査に至る経緯

2009（平成21）年2月24日、松山市今在家二丁目48番1外における宅地造成に伴い埋蔵文化財確認申込書が、申請者より松山市教育委員会に提出された。

申請地は、松山市の周知の埋蔵文化財包蔵地〔№125 今在家遺物包含地〕内にあたる。申請地のある今在家町内では平成元年に築成分遺跡、平成2年に今在家遺跡1次調査が実施されている。築成分遺跡では、弥生土器のほか集石遺構から石器が出土し、北東約80mに位置する今在家遺跡では、弥生時代後期の土坑から祭祀性の高い土器や石廬丁が出土している。

これらのことから松山市教育委員会では、確認申込書が提出された地番について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を把握するために、試掘調査をすることとなった。試掘調査は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が平成21年3月13日（金）に行った。調査の結果、申請地の南側に弥生時代の遺跡が確認された。この結果を受け松山市教育委員会、埋蔵文化財センターと申請者は、発掘調査についての協議を行い、開発に伴って消失する遺跡に対して、記録保存のため本格調査を実施することとなった。

発掘調査は、埋蔵文化財センターが主体となり2009（平成21）年6月1日～同年6月19日の間に野外調査を実施した。

### 2. 調査の経緯

調査は開発によって失われる部分とし、宅地に進入する道路部分の調査を行った。試掘時のトレンチ部は、調査対象地とはなっていない。調査面積は151.86㎡である。調査工程を以下に記した。

平成21年6月1日、発掘用具、発掘機材、備品の搬入。重機により掘削を開始する。2日、重機による耕作土以下の掘削。調査区の南壁に土層観察用のトレンチを設定する。3日、重機による耕作土以下の掘削。西壁に土層観察用のトレンチを掘削する。第6層の掘り下げを行う。調査区西側で第6層中より弥生土器が出土する。4日、第7層上面で平面精査を行い遺構の検出に努める。調査区西側の遺物出土状況の写真撮影を行う。8日、調査区西側の第6層掘り下げ作業。南壁トレンチ精査。第8層中より弥生前期と思われる土器片1点出土。9日、出土遺物写真撮影、遺物測量図作成作業を行う。調査地と調査区の全体測量を行う。15日、南壁トレンチ内の精査。北壁、西壁の土層図作成作業を行う。16日、北壁、西壁土層図作成作業を行う。18日、北壁土層図作成作業。発掘用具の撤去作業を行う。発掘機材、備品の撤去を行う。19日、発掘用具の洗浄・整理等を行う。野外調査を終了する。

### 3. 調査組織（平成21年4月1日時点）

財団法人 松山市生涯学習振興財団	埋蔵文化財センター	所長	白石 修一（兼総務課長）
理事長	中村 時広	次長	折手 均
事務局 局長	松澤 史夫 （兼松山市考古館館長）	次長	重松 佳久
		調査担当リーダー	栗田 茂敏
		主任	相原 浩二（調査担当）
			大西 朋子（写真担当）

## 第2節 層位 (第71図)

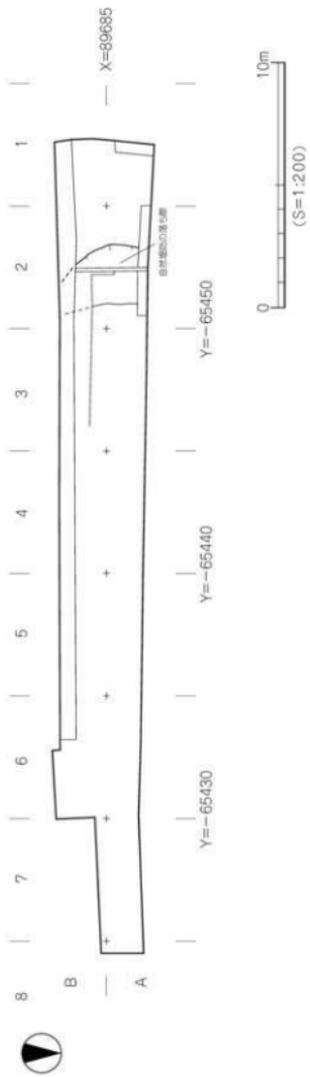
調査地は、松山平野の中央部にあたる氾濫原の標高32.80mに立地する。地表から深さ2.60mまでの掘削を行い層序の精査を行った。調査区の層序は上から第1層造成土、第2層緑灰色土、第3層明緑灰色土、第4層灰色土、第5層黄橙色土、第6層黒褐色土、第7層鈍い黄褐色土、第8層鈍い黄橙色砂質土、第9層灰黄褐色砂質土、第10層灰黄褐色砂質土である。

第1層は現代の客土で層厚1m前後を測る。第2層は現代の耕作土、第3層は第2層の床土である。遺物は第6層中で検出した。第6層は、弥生時代後期の遺物を包含する。層厚は6cm～14cmを測る。遺物は、西側の限られた部分でしか出土せず、東側では遺物を検出しなかった。他の層では、遺物の出土は無かった。第7層以下は、通常地山と呼ばれる層である。遺構の検出作業は、第7層上面で行った。各層の土色、層厚は以下である。

- 第1層 [客土]:層厚85～115cm
- 第2層 [現代耕作土]緑灰色(10GY6/1):層厚6～22cm
- 第3層 [床土]明緑灰色(10GY8/1)土:層厚4～10cm
- 第4層 灰色(N8/)土:層厚4～10cm
- 第5層 黄橙色(10YR8/6)土:層厚4～10cm
- 第6層 黒褐色(10YR3/1)土:層厚6～14cm [弥生後期土器包含]
- 第7層 鈍い黄褐色(土10YR5/4)土:層厚10～24cm
- 第8層 鈍い黄橙色(10YR7/4)砂質土:層厚8～24cm [弥生土器1点出土]
- 第9層 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土:層厚8～12cm [自然堤防]
- 第10層 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土:層厚4～12cm [自然堤防]

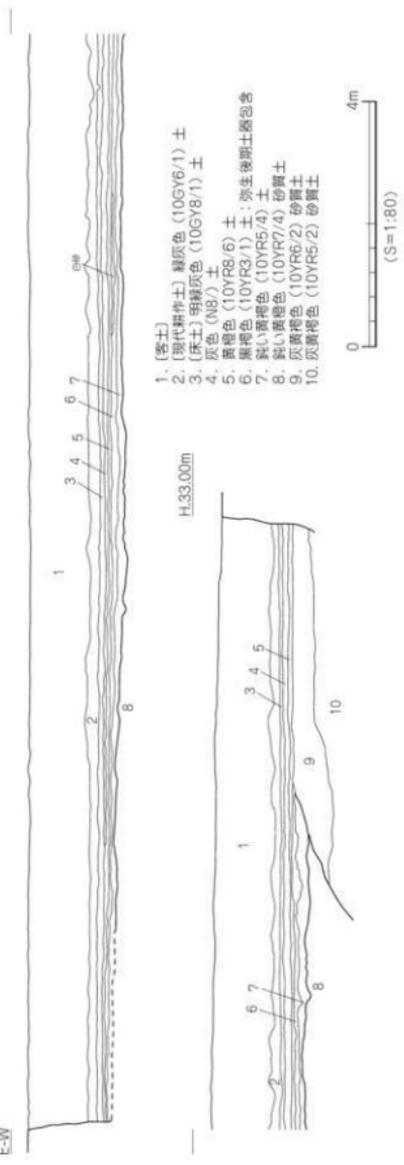


第70図 調査地位圖



南壁

E-W



1. [素土]
2. [現代耕作土] 緑灰色 (10GY6/1) 土
3. [灰土] 明緑灰色 (10GY8/1) 土
4. 灰色 (N8/7) 土
5. 黄褐色 (10YR8/6) 土
6. 黒褐色 (10YR3/1) 土: 遊生後期土層包含
7. 紫心黄褐色 (10YR5/4) 土
8. 紫心黄褐色 (10YR7/4) 砂質土
9. 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土
10. 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土

第71図 遺構配置図・南壁土層図

### 第3節 遺構と遺物(第71・72図)

遺構の検出は、試掘データをもとに第7層上面で行った。平面精査を行い、遺構の検出に努めたが今回の調査区では、明確な遺構は検出しなかった。遺物は、第6層中と第8層中より出土した。

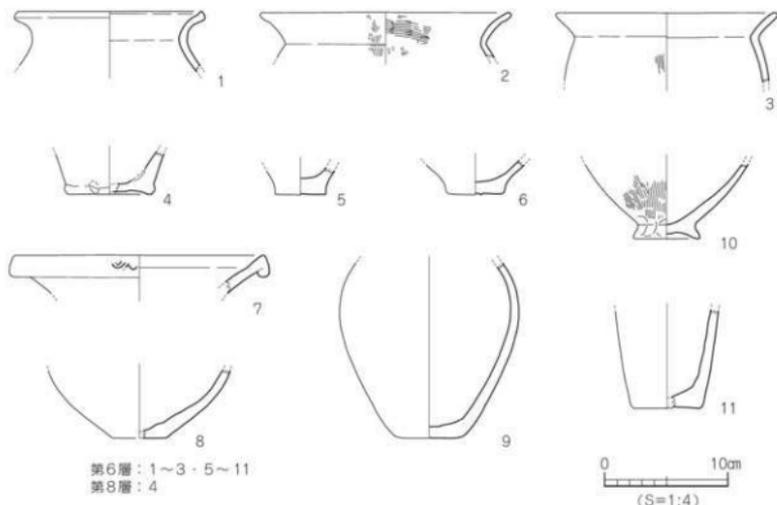
第6層中から出土した遺物は、調査区西側で検出した自然堤防状の砂礫層の落ち際に沿って帯状に幅約3mの間で出土した。時期は、弥生時代後期中葉～後葉である。

第8層から出土した土器は、土層堆積状況を確認するため南壁に設定したトレンチより弥生時代前期と考えられる甕の底部1点が出土した。このことから弥生時代前期の遺構の有無を確認するため、南壁トレンチにおいて土層壁面の精査を行ったが明確な遺構を確認するまでに至らなかった。

以下に第6層と第8層から出土した弥生土器を図示する。

#### 出土遺物(第72図、図版14)

1～6は甕形土器。1は口縁部が外反し端部は上方に肥厚する。2は外反する口縁部。3は「く」字状を呈する口縁部である。4のみは8層中から出土したもので、やや上げ底で器壁の薄い底部である。5は突出する小さな器壁の厚い底部。7～9は壺形土器。7は口縁端部が下方に拡張され端面に波状文が施される。8・9は平底の底部である。10・11は鉢形土器の底部と考えられる。10は上げ底の底部。11は平底である。



第72図 第6・8層出土遺物実測図

## 第4節 小 結

今回の調査では、調査場所が限定されたこともあり明確な遺構の検出には至らなかったが、弥生土器が出土し今在家町における弥生時代後期の集落の広がりを確認できた。

今在家町には、国土地理院発行の「治水地形分類図」に旧河道が明記されている。「治水地形分類図」は、水害や地盤災害の起こりやすいところを判断する基礎資料として作成されたものである。地図によると旧河道は、調査地の西側に位置している。調査地の約80m西方では東西方向に地盤が低くなり、南西約100mの旧河道上には高津羽泉跡の石碑が建てられている。この様な状況から調査区の西側で検出した砂礫層（第9層、10層）は旧河道の自然堤防と考えられ、この自然堤防の東側に調査地が位置していることとなる。

調査で出土した土器は、調査区の西端で検出した自然堤防の東側で南北方向の帯状に出土している。出土状況から自然堤防上からの転落遺物と考えられ、自然堤防上に集落関連の遺構が存在する可能性が高いものと考えられる。出土した遺物は、弥生後期中葉から後葉に時期比定され時的に今在家遺跡1次調査で検出した遺構と同時期であることから、今在家遺跡の集落の東限の様相を示しているものと思われる。



第73図 治水地形分類図

表 34 第6・8層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量 (cm)	調 整		色 調		胎土・焼成	備考	図版
			外 面	内 面	外 面	内 面			
1	甕	口径 (154) 残高 4.9	マメツ	ゴコナデ	灰黄色	橙色	石・長 (1~3) ○		
2	甕	口径 (199) 残高 3.7	ナデハケ(68cm)	ハケ(64cm)	灰白色	浅黄褐色	石・長 (1~3) ○		
3	甕	口径 (180) 残高 5.7	マメツ (ハケ取)	マメツ	橙色	にぶい黄褐色	長 (1) ○		
4	甕	底径 (73) 残高 3.5	マメツ/ハタリ	マメツ/ハタリ	明赤褐色	橙色	石・長 (1~2) 金 ○		
5	甕	底径 (40) 残高 2.2	マメツ	ナデ	明赤褐色・灰黄褐色	褐灰色	炭砂 ○		
6	甕	底径 (45) 残高 2.8	マメツ	マメツ	にぶい褐色・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石・長 (1~4) ○		
7	甕	口径 (211) 残高 3.1	マメツ	マメツ	橙色	にぶい黄褐色・褐灰色	石・長 (1~2) ○		14
8	甕	底径 (43) 残高 5.6	マメツ (ハケ取)	マメツ/ハタリ	黒褐色・にぶい褐色	灰白色	石・長 (1~2) ○		
9	甕	底径 (55) 残高 14.3	ナデ	ナデ(指頭痕)	橙色・にぶい黄褐色	灰色	石・長 (1~3) ○		黒座 14
10	鉢	底径 5.3 残高 6.1	ハケ(54cm)/ナデ	マメツ	灰白色	にぶい黄褐色	石・長 (1~4) ○		黒座 14
11	鉢	底径 (58) 残高 8.1	マメツ/ハタリ	マメツ/ハタリ	明赤褐色	浅黄褐色	石・長 (1) 金 ○		14

## 第10章 まとめ

本報告書では、平成元年から平成21年にかけて発掘調査を実施した7遺跡について報告を行った。この7遺跡は松山平野南部に位置し、調査の結果、弥生時代から中世にかけての遺跡の存在が明らかとなりつつある。

### 弥生時代

今在家遺跡2次調査では、自然堤防の落ち際から弥生土器が出土し、繁成分遺跡からも弥生時代後期の土器溜を検出していることより、調査地から西に広がる自然堤防上には、弥生時代前期や後期の遺跡が存在することを示すものである。また、繁成分遺跡から出土した土掘具は松山平野では近年の調査により、弥生時代前期から中期頃の資料が増加しており、これらの良好な資料となる。東石井遺跡3次調査SK101は、後期後葉の土器の廃棄土坑と考えるが、弥生土器のなかでも高坏が比較的多く出土しており、これらは祭祀で使用された土器を破棄したことも考えられる。西石井荒神堂遺跡3次調査SD1は、南西から北東方向に直線的に延びる弥生時代後期末の区画性をもつ溝であるが、南方約70mには同時期の竪穴建物や土壇などを検出した西石井荒神堂遺跡がある。この溝はその集落を区画する施設の可能性をもち、調査地から南方へ広がる集落の存在が窺える。また、西石井遺跡4次調査SB101とSB201の2棟は4mの位置で近接しており、同時に火災を受けた可能性をもつ。さらに、SB201は炬付近くに焼土が集中しており、この部分が火災の原因と推測される。

### 古墳時代

西石井荒神堂遺跡2次調査は後期を中心とした集落である。竪穴建物5棟のうちSB1とSB3はいずれも北壁内側にカマドを伴い、SB1はカマドから外へ延びる煙道施設をもつ。また、掘立柱建物5棟の殆どは東西棟であり、全ての建物から柱痕を確認し、柱の抜き取りは行われていないことが判った。SK1からは土師器や須恵器に混じり、獣歯が数点出土しているが、祭祀的な意味合いがあるのか、遺棄しただけなのかは不明である。

### 中世

東石井遺跡3次調査から検出された溝や柱穴などから周辺には中世の集落があることがわかった。また、SP305やSP310から出土した石は受熱されており、これらは支石として別の場所で使用され、廃棄したものと考えられる。

今回報告した遺跡は、小野川と内川に挟まれた沖積低地上にある。この地域は近年急激に増加した開発に伴う数多くの調査により、各時代の集落に関連した資料が得られているが、より詳細な集落の範囲や構造など分析を行う必要がある。



1. SB1カマド完掘状況(東より)



2. SB3完掘状況(南西より)



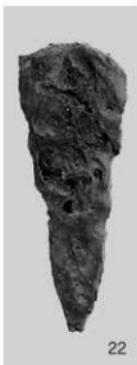
3. SK1遺物出土状況(南東より)



4. SK1完掘状況(南西より)



5. 遺構完掘状況(西より)



1. SK1出土遺物



1. SD1中層遺物出土状況(南西より)



2. SD1中層遺物出土状況(南より)



3. SD1下層遺物出土状況(東より)



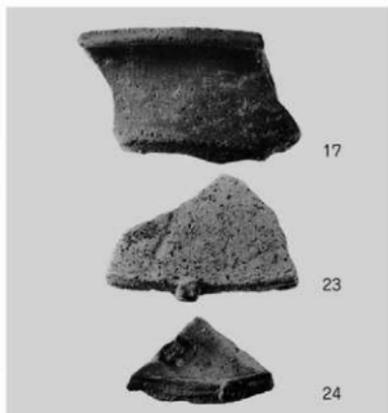
4. SX1遺物出土状況(西より)



5. 遺構完掘状況(北より)



1. SD1完掘状況(西より)



2. SD1出土遺物



1. I・II区遺構検出状況(南より)



2. SB201遺物出土状況(北より)



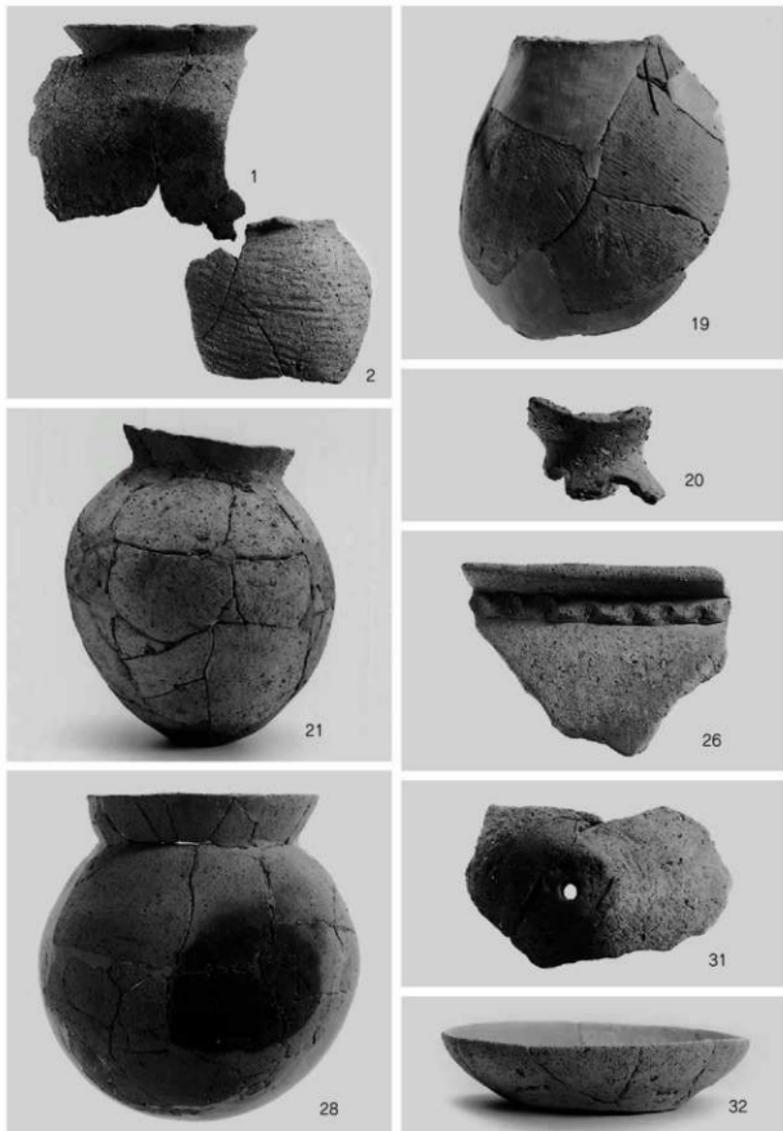
3. SB101完掘状況(北より)



4. SB201完掘状況(北より)



5. I・II区遺構完掘状況(北より)



1. 出土遺物 (SB101: 1・2, SB103: 19-20, SB201: 21, SX101: 26, SB202: 28・31, 中世: 32)



1. T1完掘状況(南東より)



2. T2完掘状況(北東より)



3. SD1完掘状況(南東より)



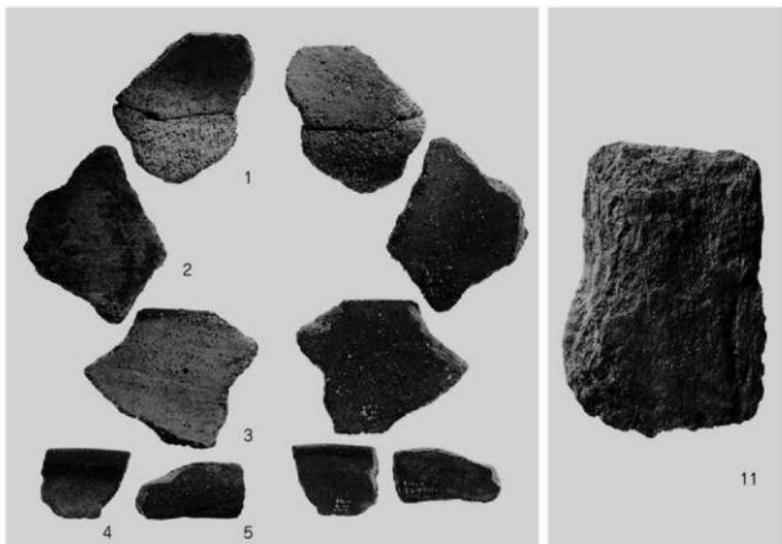
4. SD1完掘状況(北より)



5. 遺構完掘状況(東より)



1. 遺構完掘状況(東より)



2. SD1出土遺物



1. II区遺構完掘状況(南東より)



2. III区東壁土層(北西より)



3. I区SK101遺物出土状況(南より)

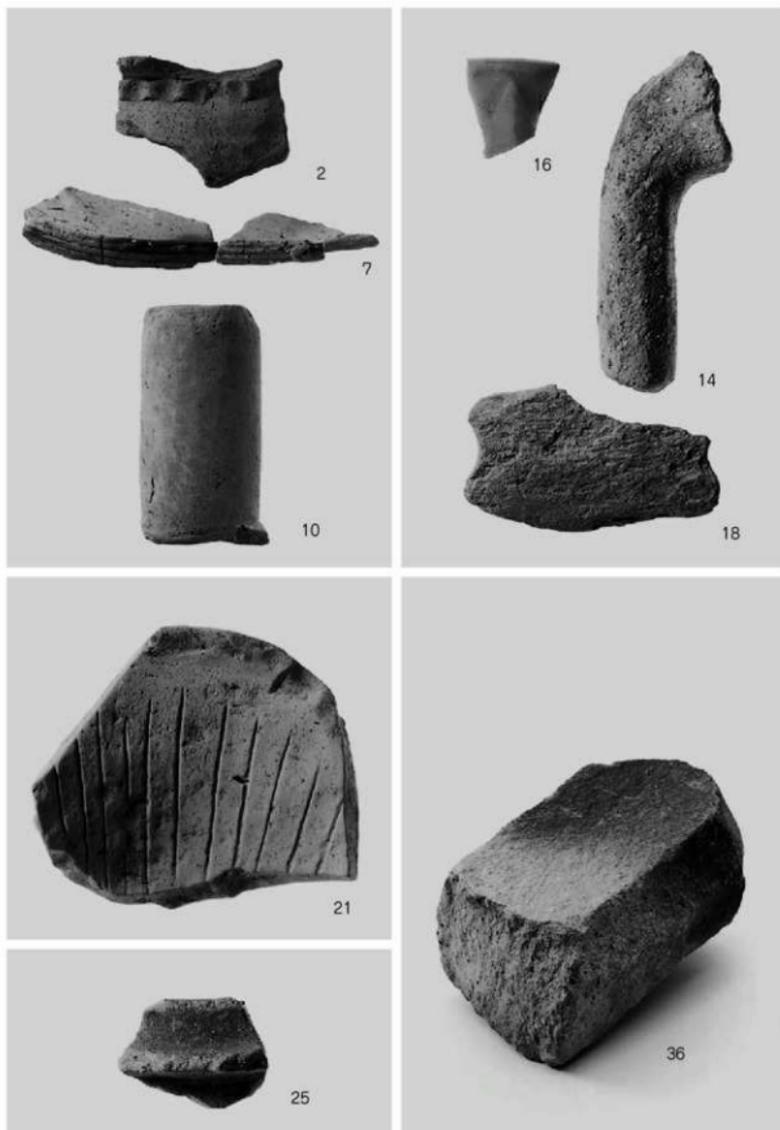


4. I区SK101完掘状況(南より)



5. I区遺構完掘状況(南より)

図  
版  
10



1. 出土遺物 (SK101:2・7・10, SD101:14・16・18, SD103:21, SP310:25・36)



1. 集石1出土状況(東より)



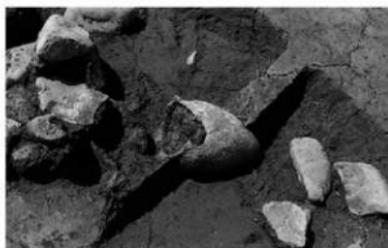
2. 集石2出土状況(南東より)



3. 集石2出土状況(北西より)



4. 土器溜出土状況(東より)



5. 土器溜出土状況(東より)



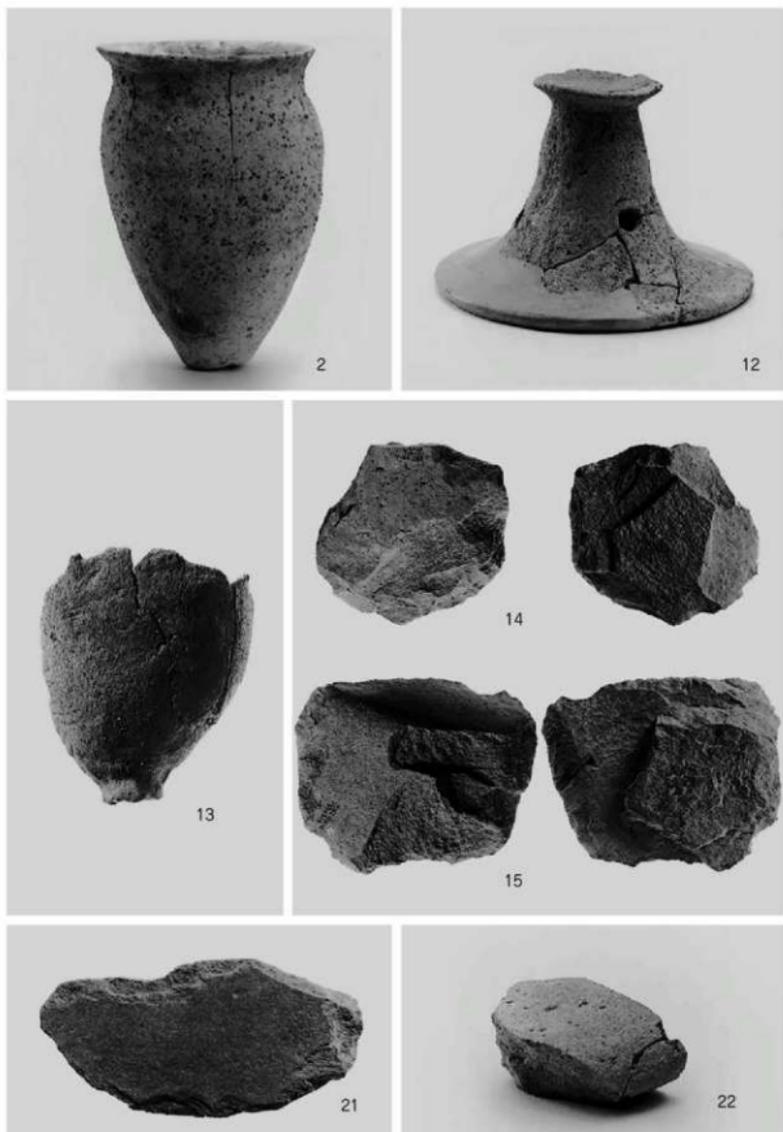
6. SR1完掘状況(西より)



7. SR3・4完掘状況(南東より)



8. 遺構完掘状況(南より)



1. 出土遺物(集石1:14,集石2:15,土器溜:2・12・13,第三層:21・22)



1. 遺構検出状況(西より)



2. 砂礫検出状況(南東より)



3. 遺物出土状況(北より)



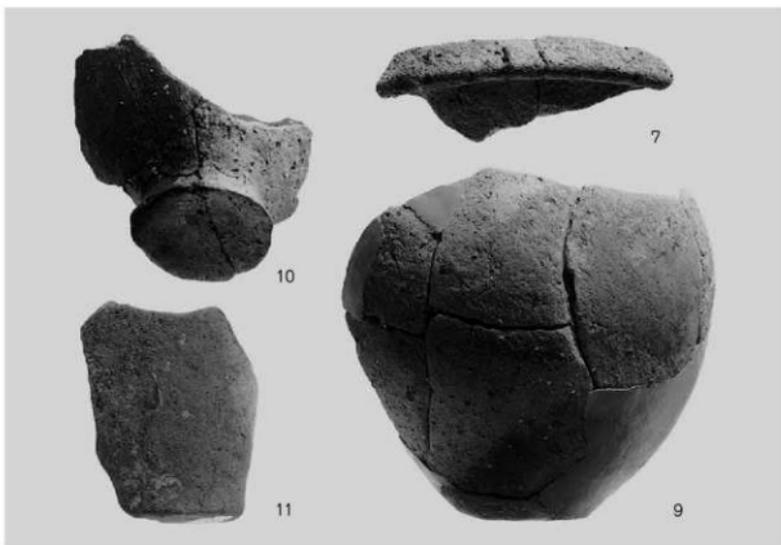
4. 南壁土層(北より)



5. 西側完掘状況(東より)



1. 完掘状況(西より)



2. 第6層出土遺物

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	いしい・うけな いせき							
書名	石井・浮穴の遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第162集							
編著者名	河野 史知・大西 朋子							
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67-6 TEL.089-923-6363							
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西石井荒神堂遺跡 2次調査	松山市西石井町	38201	383	33°48'53"	132°46'18"	20001115 / 20010112	296.2	宅地造成
西石井荒神堂遺跡 3次調査	松山市西石井 二丁目	38201	415	33°48'57"	132°46'19"	20030414 / 20030516	150.0	宅地造成
西石井遺跡4次調査	松山市西石井 一丁目	38201	490	33°48'59"	132°46'28"	20070516 / 20070615	135.0	宅地造成
東石井遺跡2次調査	松山市東石井 二丁目	38201	437	33°48'58"	132°46'44"	20050105 / 20050131	112.75	宅地造成
東石井遺跡3次調査	松山市東石井 五丁目	38201	458	33°48'58"	132°46'30"	20060123 / 20060209	90.14	宅地開発
繁成分遺跡	松山市今在家町	38201	149	33°48'31"	132°47'28"	19890227 / 09890528	1157.12	分譲宅地工事
今在家遺跡2次調査	松山市今在家 二丁目	38201	527	33°48'24"	132°47'36"	20090601 / 20090619	151.86	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西石井荒神堂遺跡 2次調査	集落	古墳	聖穴建物・独立柱建物・ 土坑・溝		土師器・須恵器		聖穴建物から炭化材や焼土を抽出	
西石井荒神堂遺跡 3次調査	集落	弥生	溝・性格不明遺構		弥生土器		区画溝を検出	
西石井遺跡4次調査	集落	弥生 古墳 中世	聖穴建物・溝・性格不明遺構 聖穴建物 柱穴		弥生土器 土師器		聖穴建物から炭化材や焼土を抽出	
東石井遺跡2次調査	集落	弥生 古墳	溝		弥生土器・縄文土器・石製品 須恵器		弥生時代～古墳時代の溝を多数検出	
東石井遺跡3次調査	集落	弥生 中世	土坑 溝・柱穴		弥生土器 土師器・須恵器・磁器・石製品		土坑から7個体分の高環が出土	
繁成分遺跡	集落	弥生	土器窯り 集石遺構		弥生土器 石製品		縄文時代の可能性が高い集石遺構	
今在家遺跡2次調査	自然環境	弥生	自然堤防		弥生土器		自然堤防の落ち際を検出	
要 約	<p>今回報告した7遺跡から、沖積低地上の主に弥生時代から中世にかけての遺跡の存在が明らかとなりつつある。弥生時代では殆どの遺跡から遺構が確認されており、なかでも東石井遺跡3次調査SK101は禁裏で使用された土器の廃棄の可能性をつつ、古墳時代では聖穴建物や溝などの集落跡が検出されているが西石井遺跡2次調査の聖穴建物はカマドや煙道を伴っており、建物構造が分かる資料などを検出した。</p>							

松山市文化財調査報告書 第162集

## 石井・浮穴の遺跡Ⅱ

---

---

平成25年3月15日 発行

編集 公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団  
埋蔵文化財センター  
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6  
TEL.(089)923-6363

発行 松山市教育委員会  
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1  
TEL.(089)948-6605

印刷 平和印刷工業株式会社  
〒790-0921 松山市福音寺町728番地  
TEL.(089)947-9155(代)

---

---

